わたしの聖書が一番！５巻

破滅へと向かうサウル～４人のライ病人

～サムエル記上25章－列王記下7章～

もくじ

第1章　破滅へと向かうサウル …… 1
第2章　待ち望んでいた王 …… 9
第3章　ダビデ王 …… 17
第4章　反乱を起こした息子 …… 25
第5章　神殿の建設 …… 33
第6章　賢者から愚か者へ …… 41
第7章　アハブとイゼベルと預言者エリヤ …… 49
第8章　カルメル山の対決 …… 57
第9章　召しにこたえるエリシャ …… 65
第10章　天からの祝福 …… 73
第11章　忠実な奴隷 …… 81
第12章　しもべたちへの神様の心づかい …… 89
第13章　4人のライ病人 …… 97

子供のための日々の聖書研究ガイド

第1章
破滅へと向かうサウル

暗唱聖句

「生きている者は死ぬべき事を知っている。
しかし死者は何事をも知らない。」
ー伝道の書 9:5

日曜日

私たちがだれかに親切にしたり、助けてあげたりしたとき、された人たちは「ありがとう」と言うのがふつうですよね。ところが、ダビデになんども助けてもらったにもかかわらず、そうしなかった人がいます。それは、ナバルというお金持ちの男です。

ダビデとその仲間たちは、サウルから逃れて、ナバルの羊飼いたちが、羊やヤギをたくさんかっているところにかくれていました。ダビデ自身も羊飼いでしたから、ナバルの羊飼いたちにはやさしく接していました。泥棒たちの集団がナバルの家畜をぬすもうとしたときには、ダビデの仲間たちが動物たちを守って、強盗を追いはらいました。ダビデの仲間たちがいなかったら、ナバルはたくさんの家畜をうしなっていたことでしょう。そしてダビデの仲間たちは、自分たちのためにナバルの家畜をとるなどということも、決してしませんでした。

ナバルは、信仰深いカレブの子孫でしたが、カレブとはまったくちがい、いじわるでわがままな人でした。サムエル記上 25:3節。

そのころは、羊の毛を刈る季節になると、羊の持ち主が宴会をもうけて人々を招待していました。ナバルが羊の毛を刈っていたとき、ダビデは仲間のうちの 10 人に何と伝えましたか？ 4-9 節。

ナバルはどのような返事をダビデに伝えましたか？ 10-12 節。

ダビデは、ショックを受けたにちがいありません。彼と仲間たちは、ナバルの動物たちを守ってあげ、とても親切にしてきたのです。ナバルはとてもずるい人だと、ダビデは思ってしまいました。じっさい、このナバルの返事がダビデをひじょうに怒らせ、正しいかどうかも考えず、すぐに、ある決心をさせてしまったのでした。それはどんな決心でしたか？ 13 節。

***考えてみよう：**ダビデは、ナバルのいじわるに仕返しをするつもりでした。ダビデがそう思ったのは当然のことですか？私たちは、だれかに傷つけられると、仕返しをしたいと思うでしょうか。イエス様はどうでしたか？*

月曜日

ナバルが、「食べ物をめぐんでほしい」というダビデの願いをことわったので、ダビデは仲間たちをひきつれ、この意地悪でわがままなナバルをこらしめに出かけました。しかし、ダビデの仲間がナバルに食べ物を求めたときのことを知っていた羊飼いのひとりは、ナバルの妻アビガイルに一部始終を知らせるため、いそいで彼女のところへ行きました。サムエル記上 25:14-17。

アビガイルは美しい女性で、夫とはまるでちがう性格の持ち主でした。彼女はやさしく、礼儀ただしく、かしこい人でした。何か恐ろしい事が起こるのを止めるために、ひとときもむだにはできません。ナバルには何も告げず、彼女はすぐに、パンといちじく、干しぶどう、いり麦、ブドウジュースを袋につめました。そしてそれらをロバに背負わせ、召使いの者たちと先に行かせました。それから自分のロバに飛びのり、いそいで彼らの後を追いました。18-20 節。

思ったとおり、ダビデはもうこちらへ向かっていて、そのようすは怒りに燃えていました。ダビデに会ってすぐに、アビガイルは何をしましたか？ 23-24 節。

アビガイルはダビデに、夫がダビデに対して行ったひどいあつかいの責任はすべて自分が負うと言いました。そして「どうかおゆるしください」と、ダビデにお願いしました。それから、ダビデが勇敢に神様の敵と戦ったことや、彼がいつか王になるはずだということを話しました。それを聞いて、ダビデの怒りはおさまったのでした。32-33 節。

ダビデは、アビガイルの賢明な勧告〔アドバイス〕に心から感謝しました。

アビガイルが家にもどったとき、何が起こりましたか？ 36-38 節。

***考えてみよう：**自分に対していじわるをする人に、仕返しをするのは正しいことですか？イエス様が子どもだった時にはどうしたと思いますか？イエス様は、私たちがお願いすれば、イエス様のようになれるように助けることがおできになりますか？*

火曜日

またもサウルのスパイたちは、ダビデと仲間たちのかくれている場所をサウルに教えました。サウルはダビデを殺さない約束をしていたのに、殺したいと

いう気持ちを押さえることができませんでした。またそうなることを、ダビデもわかっていました。しかし、ダビデには友だちがいました。サウルが向かってくることを彼らが知らせてくれるときには、ダビデと仲間の何人かは、スパイのようにサウルの宿営所（寝泊まりしている場所）を見つけることができました。

夜のうちに、ダビデと仲間のひとりは、こっそりサウルの宿営所にしのびこみました。とつぜん、すぐ目の前に眠っている、サウルと司令官のアブネルが見えました。サウルの剣と水筒は彼のすぐそばにおかれています。ダビデといっしょにいたアビシャイという兵士は、それが神様のご計画であるという確信がありました。彼はダビデに、なんと言ってささやきましたか？ サムエル記上 26：8。

ダビデは小声でなんと答えましたか？ 9-12 節。

私たちが神様に信頼していれば、神様はどれほどかんたんに問題を解決してくださることでしょう！十分安全なところまで離れてから、ダビデは何をしましたか？ 13-17 節。

ダビデはもういちど、なぜサウルが自分を殺そうとするのか、彼にたずねました。18 節。

サウルも、自分が悪かったことと、ダビデを傷つけるようなことは二度としないと、あらためて約束しました。さらに、自分が愚か者のようにふるまい、罪を犯したこともみとめました。

サウルを守るべき役目だったはずのアブネルは、丘の上にいるダビデのもとへ使いの者をやってサウルの剣と水筒を取りにいかせたとき、さぞ恥ずかしかったことでしょう。

別れぎわ、サウルはダビデになんと言いましたか？ 25 節。

考えてみよう：今度も、ダビデは自分がサウルを殺したいなどとは思っていないことを証明しました。しかしサウルは、自分の心にサタンが入ることをゆるし、ねたみで心を満たしていました。

水曜日

ダビデは、サウルの近くにいては決して安心できないだろうとあきらめていました。どんな約束をかわしたとしても、サウルを信頼できないことはよくわかっていたのです。何年も何年もサウルはダビデを追いつづけていましたし、それが終わることはないだろうとダビデは思いました。

そんな時、サタンはダビデに疑いの心を起こさせようとしていました。そして、

自分が何をするべきかを神様にたずねることをせずに、ダビデはある計画を自分だけで決めてしまいました。ダビデは、ペリシテ人たちの中で暮らすことにしたのです。イスラエルの人々の間にいて、サウルにたえず追い回されるよりは、ペリシテ人たちと暮らした方がより安全なのではないかと考えたのでした。サムエル記上27:1。

ペリシテの王のひとりであるアキシは、よろこんでダビデと彼の一族を守ってくれました。アキシは、イスラエルで最も勇敢な兵士ダビデと友だちになれたことが、うれしかったのです。

サウルがダビデの居場所をつきとめたとき、何を決心しましたか？4節。

ダビデは、ペリシテ人といっしょに暮らしたくはありませんでした。というのは、自分の家族や兵士たちに、ペリシテ人たちのする事をまねてほしくなかったからです。そこでダビデは、自分の家族や仲間たちだけで住むことのできる町をアキシ王に求めたので、王はよろこんでチクラグの土地をあたえました。5-6節。

ダビデは1年以上もペリシテ人のところにとどまりました。彼は、ひそかに異教の人々と戦っていたのですが、アキシ王には、イスラエル人と戦っている、と話していました。ダビデが本当に自分の民に危害を加えるようなことをするでしょうか？そんなはずはありません。実はダビデは、うそをついていたのです。だいたいの場合、1つのうそをつくと、最初のうそを隠すために、さらにうそを重ねていくことになってしまいます。

ペリシテ人のところにいた間に、ダビデは何度かもめごとに巻きこまれました。しかし、神様のお守りをうたがってサタンの誘惑に負けてしまったのにもかかわらず、自分がいつの日かイスラエルの王となるために、サムエルが油を注いでくれたことを、ダビデは決して忘れませんでした。

考えてみよう：わたしたちがまちがったことをしたり言ったりすると、神様は悲しまれますが、それでわたしたちを愛することをやめてしまうでしょうか？

木曜日

ふたたびダビデは、もめごとに巻きこまれました。しかも今回は、どうやったらそれを切りぬけられるかがわかりません。こんどは何が起きたのですか？サムエル記上28:1,2。

ペリシテ人の指揮官たちが戦うために集まっていると、兵士たちが彼らの前を通りすぎました。その時、アキシ王とダビデ、またダビデの仲間たちは、しんがり（軍隊の列のさいごの部隊）になって進んでいました。サムエル記上29:2。

ペリシテ人の指揮官たちは、彼らの前を通りすぎたダビデに気づいて、彼がそこで何をしているのか、あやしみました。彼らは、自分たちの強い味方であった巨人ゴリアテを殺したのは、このダビデだと知っていましたし、またペリシテ人ならだれでも、ダビデが敵であることを知っていました。だとすれば、ダビデと仲間たちは、どのようにして、ペリシテ人の軍隊に入りこんだのでしょう?

アキシ王は、ダビデがイスラエルを去ってペリシテ人の味方になったことを、けんめいに説明しました。王はペリシテの指揮官たちに、ダビデが 1 年以上も忠実に自分に仕えてくれているのだから、彼を信頼できるはずだと言いました。しかしそれでも、ペリシテの指揮官たちは、それは無理だと答えました。4 節。

もしダビデがペリシテの軍隊とともに進んでいったならば、この怒った指揮官たちの予想どおり、ペリシテ人をうらぎって、イスラエルのために戦ったことでしょう。しかし今は、まだ自分を信じてくれているアキシ王とともにチクラグへ帰ることができました。9-11 節。

チクラグにもどったダビデを待っていたものは、あまりにも悲惨なありさまでした。サムエル記上 30:1-4。

さらに、ダビデの仲間たちまでもが彼に刃向かおうとしています。6 節。

そこでダビデは、自分を守るためにペリシテ人のところへ行く決心をする前に行うべきだったことを実行しました。7-8 節。

このお話の続きはとても興味ぶかいので、最後まで読んでみたいと思うでしょう(9-19 節)。ただし、いちばん大切なところは、敵にうばわれたダビデのものすべてを神様が取り返して下さったことです。19 節。

考えてみよう:ダビデが本当に神様を愛しているのを、神様はごぞんじでしたか? ダビデが以前していたように、神様に心から信頼できるように、神様は忍耐してダビデを助けてくださいましたか?神様が、あなたに対しても忍耐してくださっていることを、うれしいと思いますか?

金曜日

「魔女」は、本当に存在するのでしょうか?エンドルには、その「魔女」がいました。彼女は隠れてくらしていましたが、それは神様が、魔女や魔法使いを人々の間で生かしておいてはならない、と話されたからです。なぜかって?彼らはサタンの手先だからです。サタンが告げることは何でも言ったり、実際におこなったりします。サウルは、こういった人々をイスラエルの中に住まわせていたのでしょうか?サムエル記上 28:3。

しかしもうすでに、ペリシテ人はイスラエル人と戦う準備がととのっており、サウルはそれをとても恐れています。彼は、ダビデが今はペリシテ人たちと暮らしていることを知っていました。そして、ダビデがペリシテ人の仲間になって自分に戦いを挑んでくるにちがいないと信じきっていま

した。自分を助けてくれる人はだれもいない、自分はひとりぼっちだ、とサウルは思いました。それなのにペリシテ人との戦いは、もう明日にせまっています。4-6節。

実はこれが、サウルにとって、長年にわたり自分のしてきたあやまちを悔い改める最後のチャンスでした。部分的に従ったり、従わなかったりすることで、聖霊をこばんできたあやまちです。またサウルは、神様が次のイスラエルの王にしようと選んだ男を殺すことに、全精力をつぎこんできました。しかし悔い改めるかわりに、サウルは何をしましたか？ 7-8節。

その夜、サウルは服装を変え、他人になりすまして魔女と話しました。彼女はサウルに何と言いましたか？サウルは何と答えましたか？何が起こりましたか？ 9-14節。

サタンは、死んだ人を実際に生き返らせることができるでしょうか？もちろんできません。命は、神様だけがお与えになるものです。ただし、もし神様がおゆるしになれば、サタンはまるで本物であるかのように見える、驚くようなわざをすることができますか？そう、できてしまうのです。サタンは自分を亡くなった人の姿に似せたり、話し方をまねたりすることさえできてしまうのです。

サタンは、サウルがこれまでに犯した、まちがった選びのすべてを知っていました。ですから今、サムエルのふりをして、サウルにサウル自身のまちがった選びについて思い出させました。サタンはまた、

サウルが明日の戦いに敗れるだろうということも告げました。サタンは本当に冷酷です！サウルはどう思いましたか？ 20節。

***考えてみよう：**はじめのうち、美青年サウル王は良い選びをしていました。しかし、一歩一歩、サウルは以前の悪い習慣に引きもどされていきました。そして、いつも彼は言い訳をしました。ひじょうに悲しいことです！私たちが神様に従えば日々助けを下さるように、神様はサウルのことも喜んで助けていたことでしょう。*

もっと学ぼう！

★サムエル記上 25-29章

★人類のあけぼの下巻 p. 344-357

星が空からふってきたとき

「少女エレン」より　エイミー・シェラード編

175年以上も前のある秋の日、ふたごの姉妹がメイン州のゴーハムというところに生まれました。名前はエレンとエリザベス。1827年11月26日、月曜日のことでした。このふたごには、やさしいお父さんとお母さん、6人のお兄さんとお姉さんがいました。ふたりが生まれたとき、家族のみんながどんなにか喜んで、楽しい時をすごしたか想像できるでしょう？

Little Folk Visuals

エレンの両親はロバートとユーニスといいました。彼らはメソジスト教会の信者で、イエス様をとても愛していました。彼らは、週の7日目である土曜日が、神様の休まれる安息日であることを知りませんでした。ですから、ほとんどのクリスチャンと同じように、日曜日には忠実に教会へ通っていました。

そのころ、世界中のいろいろなところで、たくさんの人が注意深く聖書をしらべていました。彼らは、イエス様が、イエス様を愛する人々を天国へと連れていくためにもどってこられる、という約束について学んでいました。また彼らはイエス様が私たちに下さったいくつかの「しるし」について勉強しました。そうすれば、イエス様がもうすぐ来られることがわかります。イエス様が、注意して見ていなさいとおっしゃったしるしの1つは、いくつもの「星」や隕石がふってくる、というものでした。

夜、空をよこぎって流れていく星、つまり流れ星を見たことがありますか？「星」と呼ばれていますが、実は隕石なのです。聖書は、イエス様が来られる前になると、いちどにたくさんの「星」が落ちるであろう、と言っています。そして、エレンがもう少しで6歳になるという夜、そのような

現象が起こったのです。人々がその夜、空を見上げていると、まるできらきらと輝く何千もの星が、雨となってこの世界にふりそそいでいるようでした。

エレンと妹は眠っていたので、降ってくる星々を見ませんでしたが、翌日、みんながその話をしていました。それはとてもすばらしい光景で、ある人たちは、あの晩イエス様が来ようとなさったのだろうか、とささやきました。

エレンは動物がだいすきでした。秋になると、こどもたちは時々、ヒッコリー(クルミ科)の実をさがしに森へ入っていきました。こどもたちは、冬の何か月かの間、他に食べるものがないリスたちがヒッコリー木の実をかくしているのを知っていました。エレンは、リスたちが自分たちの木の実がなくなっているのを見た時にがっかりさせないよう、とうもろこしを入れた小さなかばんを持って行きました。かくされていた木の実を見つけると、エレンはそれをポケットに入れました。それから、木の実がかくされていたところには、とうもろこしをおいてあげました。彼女はリスたちに、木の実のかわりに何か食べてほしいと思ってそうしたのです。なんて思いやりのある子でしょう!

エレンの家族は1頭の雌牛を飼っていて、彼女は小さい時に乳しぼりをおぼえました。ある日の夕方、乳しぼりの時間になったので、エレンは雌牛を牧草地から小屋へつれて帰るために出かけました。ところが、雌牛が牧草地にいないのです。

「もしかしたら、うちの雌牛は森に迷いこんだのかもしれないわ」とエレンは思いました。森に入ると、彼女は雌牛の名前を何度もよびました。しかし、「モ〜」という鳴き声は聞こえません。何度よびつづけても、返事はありません。

やっとのことでエレンは雌牛を見つけました。ところが、雌牛は水が流れている真ん中のぬかるみにはまっていました。どうしよう・・・彼女は途方にくれました。いったいどうすれば、この大きな動物を泥から引き上げて家につれて帰り、乳をしぼることができるでしょうか?

(つづく)

第2章
待ち望んでいた王

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「あなたのまことをもって、わたしを導き、わたしを教えてください。あなたはわが救の神です。わたしはひねもすあなたを待ち望みます。」ー詩編 25：5

日曜日

サウルがサムエルに相談しようと魔女のところへ出かけた、その翌日のことです。邪悪なサタンはサムエルに化けて、サウルを怖がらせ、さらに失望させるためにできるだけのことをしました。いよいよ、ペリシテ人との戦いの時がやってきました。忠実なヨナタンは、父サウルのすぐそばについています。

その戦いは、うまくはいきませんでした。サムエル記上 31:1。サウルは敵の矢によって大けがをし、もう助からないことが自分でもわかりました。彼は、自分が敵の手によってひどい目にあわされ、殺されることを考えただけでも耐えられませんでした。そこで、武器を運ぶ者に何をするように言いつけましたか？ 4-6 節。

チクラグでは、ダビデが、戦いがどうなったのかの知らせを心配そうに待っていました。とつぜん、町へ見知らぬ人が知らせを持ってかけこんできました。サムエル記下 1:2-4。

サウルとヨナタンが本当に死んだということが、どうやってはっきり知ることができるのかとダビデがたずねると、男は、自分がサウルを殺した、と誇らしげに告げました。男は、サウルの王冠とブレスレットをダビデのもとへ持ってきました。彼は、サウルが死んだのをダビデと仲間たちがきっと大喜びし、自分に何かほうびをくれるにちがいないと考えていました。10 節。

ところがダビデ

と仲間たちのようすを見て、男は自分が大変なまちがいをしでかしたことに気づきました。11-12 節。

考えてみよう：ダビデは、サウルと親愛なる友ヨナタンについての美しい歌をかいて、この歌を『弓の歌』と呼んでいます（17-27 節）。自分の命をねらっていたサウルに対するダビデの態度をすばらしいと思いませんか？ダビデは、イエス様ならこのようにしただろうという事を実行しましたか？

月曜日

サウルがダビデを殺そうとしていた何年もの間、ダビデはサウルに忠実でしたか？ダビデは忠実でした。彼はいつでもサウルのことを「主が油注がれた者」と話していました。ダビデ自身も油を注がれていたのに、彼は、自分が王になる時期を神様に決めていただくことを選んだのでした。

ダビデの親友ヨナタンとサウルは死にました。しかしダビデは、まず神様にたずねることをしないで王になろうとはしませんでした。サムエル記下 2:1。

ヘブロンは、ダビデが属するユダ族の領地にある町でした。そこに住んでいた人々は、喜んでダビデを自分たちの王にしました。サウルを葬ったのは別の部族の町にいる男たちだったことを彼らがダビデに告げると、ダビデはそこへ使者を送り、感謝を伝え、またユダの人々が自分を王としたことも伝えさせました。4-7 節。

できればすべての部族が自分を王にしたいと望んでくれるように、とダビデは願っていました。そうすれば、彼らの国は強くなれるでしょう。ところが、サウル軍の指揮官アブネルには、別の計画がありました。サウルといっしょにダビデを追いつづけていた間に、アブネルまでもがダビデを憎むようになっていました。それにくわえて、自分がサウルを守るべきときに、ダビデがサウルを殺すことのできる状況にしてしまった、あの恥ずかしい思いを決して忘れることができませんでした。

さてアブネルは、神様のご計画ではないと知りながらも、サウルの息子のひとりであるイシボセテを王としてたてました。それは、ダビデが全イスラエルの王となる７年半も前のことでした。10-11 節。

考えてみよう：それからまもなく、同じ国の中で人々が２つのグループに分かれて、互いに争うことになりました。内戦と呼ばれるものです。神様が祝福できたのは、ダビデとイシボセテのどちらだと思いますか？祝福される側に選ばれたのはなぜですか？

火曜日

なんだか大変なことになっています！イスラエルの民どうしで、戦っています。その戦いは数年ものあいだ、つづきました。ある人たちは、サウルの息子イシボセテを王にしたいと思いました。別の人たちは、ダビデを王にしようと思いました。神様は、王にする人をすでに決めておられましたか？どちらの側が神様に祝福され、どちらの側が勝利することになっていたのでしょう？サムエル記下3:1。

サウルの息子イシボセテは、よい王様とはいえませんでした。そのうち、彼とアブネルが言い争いになってしまい、アブネルは、これ以上イシボセテを助けるのはやめよう、と決心しました。アブネルは、ダビデの側につくつもりで、ダビデも彼を歓迎しました。じつは、ダビデがゴリアテを倒したときに、アブネルはその場にいて、ダビデの勇ましい姿を見ていたのでした。

ところが、ダビデの軍の最高司令官であるヨアブは、そのことを知って腹をたてました。彼はアブネルをねたんでいただけでなく、信用していませんでした。23-25節。

この後に起こったできごとは、ダビデを悲しませました。アブネルが殺されたのです！しかしダビデは、自分には何の罪もないことをすべての人に証明しました。ダビデはその思いをどのようにあらわしましたか？31,32節。その後、イシボセテも殺されてしまいました！このときも人々は、ダビデには何の罪もないことを知っていました。

そんなことがありましたが、ついに、部族どうしがまとまりました。人々は、ダビデが彼らの敵とどれだけりっぱに戦ったかを覚えていました。それは、サウルがダビデをねたむようになる前のことです。また、サウルがダビデを殺そうとしていたにもかかわらず、ダビデがどれほどサウルに忠実であったかも知っていました。何よりも、まず彼らが思い出したのは、ダビデが王になることが神様のご計画である、ということでした。それで、人々は彼を全イスラエルの王としたのです。サムエル記下5:3。

考えてみよう：ダビデがたくさんの問題をかかえていても、神様は助けてくださいましたか？わたしたちが問題をかかえているときも、神様は同じように助けることがおできになりますか？

水曜日

ようやく、イスラエルの民同士の戦いがやみました。そしてついに、同じ王がたてられることになりました。その王とは、だれのことでしたか？

そのことを知ったペリシテ人たちは、何をしようと決めましたか？サムエル記下5:17,18。

ダビデはサウルのように行動するでしょうか、それとも、自分が何をするべきか、神様にたずねることを覚えていましたか？

サムエル記下 5:19。

神様がともにおられたので、ダビデの軍隊はペリシテ軍を打ち負かしました。20 節。

しかしペリシテ人は、もっとたくさんの兵隊がいれば、次の戦いでは必ず勝てる自信がありました。それですぐに大軍を引き連れて、反撃しようともどってきました。ダビデがどうすればよいかを神様にたずねると、今度は何と言われましたか？23,24 節。

こんどの戦いは、神様ご自身が民の最高司令官です。ダビデの兵士たちが静かにしているようすが想像できますか？彼らは木々の上の方から聞こえてくるはずの行進の音を待ち、耳をすましていました。そして、行進の音が聞こえたとたん、敵に襲いかかったのでした。25 節。

この戦いのあとは、長い間、イスラエルのどの敵も、彼らを悩ませるようなことはしませんでした。

そこでダビデは、ある特別なことをするのには、よい時期だと判断しました。長い年月の間、聖なる契約の箱は、15 キロほども離れた一軒の家におかれていました。ダビデは今、その契約の箱を自分の住んでいるイスラエルの首都エルサレムに持ってきたいと思いました。盛大な祝賀会がもよおされ、契約の箱は、ダビデが用意した特別な幕屋におかれることになるでしょう。

考えてみよう：こんどのお話の中で、神様がダビデの兵隊たちに行進の音を聞くようにと言われた場面を、あなたはどう思いますか？天使たちが、戦いに勝利させるために助けてくれたのですか？わたしたちは天使を見ることも聞くこともできませんが、彼らはいつでも私たちのそばについていてくれますか？

木曜日

契約の箱がエルサレムへと運ばれてくる日、それはすばらしい祝いの日となったことでしょう。どれだけの人々が招待されましたか？サムエル記下 6:1。

ダビデは、すべてを完璧に計画しました。契約の箱を運ぶための新しい荷車を作り、特別な音楽を演奏しました。みな、喜びいさんで、契約の箱のあったアビナダブの家へ行ったことでしょう。彼らは細心の注意をはらって、契約の箱を新しい荷車につみこみました。そして荷車が動き出すと、人々は神様をほめたたえました。2,3,5 節。

不意に、荷車を引いていた雄牛がつまずき、おそらくそのせいで契約の箱がゆれたのでしょう。アビナダブの息子のひとり、ウザは、その横にいました。彼はどうしましたか？ 6 節。

あっという間に、すべてが変わってしまいました。すばらしい祝賀会は、とつぜん中止されました。なぜですか？いったい何があったというのでしょう？ 7 節。

人々はおびえ、泣き叫んでいました。ダビデは、神様をあがめようと最善をつくしていたのです。それなのに、なぜ、ウザはとつぜん命をうばわれたのでしょうか？何がまちがっていたというのでしょう？

ダビデは、計画どおり契約の箱をエルサレムに運ぶのが、すっかりこわくなってしまいました。彼は、契約の箱をどこへおいていくことにしましたか？ 9,10 節。

帰る道すがら、人々は悲しみ、途方にくれ、考えこんでいました。ダビデも、いろいろなことを考えていました。いや、ただ考えていたのではありません。ダビデは、神様の定められた契約の箱の規則について、自分たちが不注意になってしまっていたことに気がついたのです。神様は、契約の箱を動かす場合について、特別に明確な（はっきりとした）規則を与えておられました。しかし、祭司たちですら不注意になっており、またある者たちは、その規則のことすら忘れてしまっていたのかもしれません。神様は、その規則をお忘れになっていたでしょうか？いいえ、そうではありません。そして神様は、神の民もそれらを決して忘れてはならないことをごぞんじでした。

考えてみよう：どのように神様にしたがうかを学ぶことは、今でもわたしたちにとって重要ですか？神様は、わたしたちがどのように礼拝し、したがうべきかを教えるために、聖書を与えて下さいましたが、もし、わたしたちが聖書を読まなければ、それを知ることができるでしょうか？

金曜日

ウザの身に恐ろしいことが起こった後、契約の箱はオベデエドムの家へ運ばれ、ダビデはエルサレムへもどり、人々は家へ帰りました。神様は、契約の箱をある場所から別の場所へと移動させるときの特別な指示を与えておられました。まず、箱は祭司によって、慎重におおいをかけられなくてはなりません。つぎに、その棹をレビ人の中でも特別な人たちの肩にかついで、運ばれなくてはなりませんが、箱には決してふれてはいけませんでした。民数記 7:6-9, 4:15。

ダビデはそのすべてにおいて、まちがいをおかしていました。彼は、神様の規則に注意深くしたがってはいませんでした。

もうひとつ、問題がありました。ウザは、神様への服従について軽卒（かるはずみ）でした。彼は悪い事をしたのに、それを悪かったとも思わず、神様にその罪を告白しようともしなかったのです。

オベデエドムの家に契約の箱をあずけてから３か月後、ダビデは、箱について、ある知らせを聞きました。それはどんな知らせでしたか？また、ダビデは何をすることに決めましたか？サムエル記下 6:12。

こんども、ダビデは荷車で契約の箱を運ぼうとしましたか？まさか、そんなことは絶対にしません。

ふたたび、何千人もの人々がそこにあつまりました。それは、すばらしい祝賀会でした。

みんなが、大事な教訓を学んでいました。こんどこそ、彼らは、自分たちのしていることが神様に喜ばれていることを知っています。なぜなら、契約の箱の移動について、彼らは神様の規則にしたがっているからです。

人々が家へ帰るまえに、ダビデはひとりひとりにプレゼントをあげました。17-19節。

考えてみよう： *神様がわたしたちにしてほしいとのぞむことに、どうしたがうかを、わたしたちはこれまで以上に学ぶ必要があります。そうすることで、わたしたちは幸福になり、サタンから離れて安全でいられるのです。今からおよそ200年前に、現代を生きる神の民のために、神様がひとりの預言者にメッセージを授けられたのを知っていましたか？神様は、イエス様のご再臨の前に、これらのメッセージが神の民に必要になることをごぞんじだったのです。両親や先生に、その預言者の名前を聞いてみて下さい。また、神様がその預言者に語ったことの中から、話をいくつか聞いてみて下さい。*

もっと学ぼう！

★サムエル記上 31章
★サムエル記下 1-6章
★人類のあけぼの下巻 p. 396-404

学校へ通うエレン

「少女エレン」より　エイミー・シェラード編

ある日の夕方、乳しぼりの時間に、かっていた雌牛が森にまよいこみ、ぬかるみにはまっているのをエレンは見つけました。どうやったら雌牛をそこから助け出せるだろうか、彼女はけんめいに考えました。

そして、ある考えが浮かびました。雌牛は、エレンがひとにぎりの草をむしるのを見ていました。彼女はその草をもって、雌牛のところへと手をのばしました。雌牛は、その大きな一口分の草を見つめています。それを食べたくてしょうがないので、とうとう泥にはまった足をぬきだし、えさに食いつきました。雌牛を安全にうちにつれて帰りながら、エレンはどんなにうれしかったことでしょう。

エレンは成長するにつれ、こどもたちが進んでお手伝いをするようになる必要があることを学びました。ハーモン家では、お母さんがたのんだことに対してこどもの誰かが文句をいうと、お母さんはその子の言ったことをもう一度くりかえして言わせます。それからお母さんは、こどもたちがよろこんで従わなくてはいけないことをはっきりと思い出させるのです。エレンの家では、みな楽しくすごしましたが、だれもなまけ者ではありませんでした。

その当時、ぼうしを作る人たちは帽子屋さんと呼ばれていましたが、エレンのお父さんも帽子屋さんでした。エレンがまだとても小さかったころ、一家はメイン州のポートランドという町にひっこしました。お父さんは、ポートランドで仕事をした方がうまくいくだろうと考えたのでした。帽子は動物の毛皮でできていて、お父さんが作るいろんな種類の帽子の準備を家族全員で手伝いました。

Little Folk Visuals

エレンがもうすぐ６歳という時に、彼女とふたごの姉妹はポートランドの学校へ通いはじめました。学校ではとても楽しく過ごしました。当時は、２、３人のこどもが１つの長い机にならんですわりました。あ

る日、エレンのとなりの女の子が先生を怒らせるようなことをして、先生は物差しをとって女の子に投げつけたのですが、その子には当たらずにエレンの額にあたり、血がでるけがをしました。エレンは立ち上がり、教室を出て行きました。もう家に帰りたくなったのです。

おそらく先生は、自分のしてしまったことが気がかりで、彼女の後を追いかけたのでしょう。彼は自分のしたまちがいを許してくれるように彼女に話しました。もちろん、エレンは先生を許したのですが、先生のおかしたまちがいとは何だったかを問いただしました。先生が、エレンに当てるつもりはなかった、と言うと、エレンは、だれかをたたいたりすることがまちがいだと思うと言いました。先生はきっと、真剣にかんがえながら学校へもどったにちがいありません。

エレンは学校が大好きでした。読むのがとても上手でしたので、先生は時々エレンに、クラスのみんなに聞こえるよう、教科書を読むようにお願いすることもありました。何年も後、エレンが結婚してからのことですが、彼女が電車で夫に本を読んで聞かせていると、ある女性が、もしかしてあなたの名前はエレン・ハーモンではありませんか?とたずねてきました。「はい、そうですが、どうして私だとわかったのですか?」とエレンが答えると、女性は幼いころ同じ学校にいて、そこで聞いていたあのすてきな声をおぼえていたと言いました。女性の話によれば、その学校のこどもたちは、授業でエレンが読んだときの方がずっとよく内容を理解できたのだそうです。

エレンの楽しい学校生活は長くはつづきませんでした。ある出来事が、学びを楽しんでいるこのかわいらしい少女のすべてを一変させてしまったのです。

（つづく）

第3章
ダビデ王

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「互いに情深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあってあなたがたをゆるして下さったように、あなたがたも互いにゆるし合いなさい。」エペソ 4:32

日曜日

ダビデは感謝の念でいっぱいでした。神様は約束どおり彼を王とならせて下さいました。それに、これからはもう、洞くつや森にかくれなくてもよいのです。彼は今、イスラエルの首都エルサレムにある、すてきな家に住んでいます。聖なる契約の箱もエルサレムにあり、だれかの家ではなく、専用の幕屋に保管されていました。

契約の箱! ダビデはこの箱のことを考えたとき、別の場所におかなくてはと思いました。自分は宮殿に住んでいるのに、契約の箱はただの幕屋においたままでいいのでしょうか?ある日、ダビデはそのことについて預言者ナタンと話し合うことにしました。サムエル記下 7:2。

ナタンはダビデから、契約の箱を保管するための美しい神殿を神様のために建てる、という計画を聞きました。これはすばらしい提案だ、とナタンは思いました。彼はダビデに何と言いましたか? 3節

ところがその夜、神様はナタンと長い時間をかけてお話しなさいました。そして、神殿をダビデが建てるのは、神様の計画ではないとおっしゃいました。神様がダビデをお選びになったのは、彼がいやしい羊飼いの少年だったころであったことを思い出させる必要がありま

した。神様はダビデを助け、守り、そしてイスラエルの王とならせてくださいました。ただし神殿を建てる仕事は、ダビデが死んだ後、息子のひとりが次の王となって、それをはたすことになります。17節。

ほとんどの人なら、おそらく落ち込むか、もしくは怒るでしょう。というのは、神様のために特別に何かしたいと考えていたのに、神様からだめと言われたからです。しかし、ダビデが契約の箱をおいてある幕屋へ行ったとき、彼はがっかりするようなそぶりをしましたか？それとも、感謝を表しましたか？18-20節。

考えてみよう：あなたもダビデがしたように、神様を愛し信頼したいと思いますか？わたしたちがそうすることを選ぶときにはいつでも、神様はあなたに最善の〔いちばんよい〕ことをして下さいます。

月曜日

ダビデは、ある約束のことを思いめぐらしていました。それは、親友のヨナタンとかわした約束です。彼らはお互いの家族に対して、いつまでも親切でいようと約束していました。

それで今、だれかヨナタンの家族で生き残っている人がいないか、自分が助けてあげられる人がいないか、気になり始めました。サムエル記下9:1。

そのことについては、もしかするとサウルのしもべの一人、ヂバという人が知っているかもしれないのをだれかが思い出しました。2-4節。

ヨナタンの息子の名はメピボセテと言いました。とても長い名前だと思いませんか？あの恐ろしい日、つまり父のヨナタンと祖父のサウルが死んだとき、彼はまだ5歳の男の子でした。何が起こったかを聞いたとき、メピボセテの乳母は彼をだきかかえて逃げたのですが、うっかり落としてしまい、彼は足にひどいけがを負いました。それ以来、ふつうに歩くことができなくなってしまったのです。サムエル記下4:4。

ヨナタンの息子は、今ではもう、青年になっていました。ダビデが彼のところへ使いをやったとき、彼はおびえていました。メピボセテは、自分の父とダビデが親友だったことを知ってはいたのですが、ダビデについての恐ろしい作り話をダビデの敵から聞かされていたので、こわがっていたのです。ダビデはどうやって、メピボセテが自分をこわがらないようにしてあげましたか？サムエル記下9:5-7。

それからダビデはヂバを呼びよせ、彼がするべきことを伝えました。9-11節。

ヨナタンの息子は、人々がダビデについて話していたことがうそだったと、ようやくわかりました。また彼は、ヨナタンとダビデが、なぜこれほどまでにすばらしい友情で結ばれていたのかもわかりました。そして、ダビデをまるで自分のほんとうの父親のように愛するようになりました。

考えてみよう：他の人が話す悪いことを信じてしまわないように、わたしたちはいつも気をつけていなくてはいけませんか？ときどき、人々が話していることが本当ではない、とわかることもありますか？ダビデのしたことを、あなたはどう思いますか？

火曜日

聖書の物語は、よい選びとわるい選びのどちらについても語っていますか？神様を心から愛するよい人たちでさえも、まちがった選びをしたことが、伝えられているでしょうか？そのとおりですね。

ダビデは神様をとても愛していました。しかし、ある時サタンが彼にまちがった選びをするように誘惑し、ダビデはそれに負けてしまいました。また、よくあることですが、最初のまちがった選びをかくそうとして、彼はさらに多くのまちがった選びをするはめになってしまったのです。

ダビデの兵士たちが遠くで敵と戦っていた時のこと、ダビデはある美しい女性を見て、どうしても自分のものにしたいと思いました。この女性は結婚していて、彼女の夫はダビデの軍隊の中でもいちばん勇敢な兵士だということがわかりました。ところが、それでもダビデは彼女を手に入れたかったのです。彼女の名前はバテシバといいました。

そこでダビデは、軍隊の指揮官であるヨアブに命じて、確実に敵に殺されるだろうと思われる戦いの場所へ彼女の夫を行かせました。この方法であれば、すべての人に彼女が未亡人（夫を亡くした人）であることが知れわたるだろうと、ダビデは考えたのです。ヨアブがダビデの命令どおり行い、バテシバの夫は殺されたので、ダビデは彼女を自分の妻としてむかえました。

ひとつ、またひとつと、ダビデは神様の十戒にしたがわなくなりました。今や、彼は「むさぼってはならない」「ぬすんではならない」「姦淫してはならない」「殺してはならない」「偽証（嘘）してはならない」のいましめをやぶっているのです。ああ、何とおそろしいことでしょう！そして、人々はダビデのしたことに気づいたのです。

考えてみよう：神様は、ダビデが王様だからという理由で、彼がしてしまったことをうまくごまかすのをゆるされましたか？どんな罪であっても、それはひじょうに重大であることをわたしたちは知っています。しかし、えらい、地位のある人たちがまちがったことをすると、他の人々が自分たちのする悪いことの言い訳に、そのことを引き合

いにだすことがあると気がつきましたか？神様が、このような地位のある人々に罰をあたえなくてはならなかった例をいくつか思い出せますか？

水曜日

ダビデの生きていたころ、多くの男性には二人以上の妻がいました。王様であれば、たくさんの妻をもつのが当たり前でした。ダビデもすでに二人以上の妻をもってはいたのですが、こんどは他の人の妻を盗み、その夫を殺し、うそをついたのです。異教（キリスト教以外の宗教）の王様たちなら、ダビデのしたことを悪いとは思わなかったでしょう。それにダビデは、彼らに影響されてしまっていました。しかし、王様であるからといって、自分のしたことすべてが神様によしとされるのではありません。神様の十戒にしたがわないことが罪であって、ダビデはその罪を犯したのです。

ある日、神様はダビデに話をさせるため、預言者ナタンをつかわされました。サムエル記下 12:1-4。

ダビデは話を聞いているうちに、怒りがこみ上げてきました。一体どうして、すでに何でも持っている金持ちの男が、貧しくても正直な男に対して、それほどひどいことができるというのでしょうか？ 5-6 節。

おそらくナタンは、まっすぐダビデを見つめているしばらくの間、だまっていたのでしょう。それから口を開きます。ナタンはダビデの犯したおそろしい罪について、神様が告げられたことをダビデに話しました。7-10 節。

さらにナタンは、ダビデが犯したこのことのせいで、これから悲しい出来事が起こるだろうと告げました。ダビデの家族だけでなく、国全体をも苦しめることになるのです。

とつぜん、ダビデはナタンが正しいことを悟りました。彼は、ナタンの話に出てくる金持ちの男とまるで同じようなことをしたのです。ひとことも言い訳をせず、ダビデは自分の犯したおそろしい罪をみとめたのでした。彼は、自分自身が死に価する罪をおかしたことも悟りました。

ナタンがダビデを見ると、彼が本当に後悔していることがわかりました。13-15 節。

考えてみよう：サウルは自分の罪を認めましたか、それとも言い訳をしましたか？二人の態度は、こんなにもちがっていたのです！ダビデが自分の罪をみとめ、それを後悔したとき、神様はどれだけすぐにダビデを許して下さいましたか？わたしたちの神様はなんと愛すべき、すばらしいお方でしょうか！許されたからといって、罪の結果が起こるのを止めることができたでしょうか？それはできませんでした。罪はわたしたちを傷つけ、また他人をも同じように傷つけるのです。ダビデは、もうすぐそれがわかるでしょう。

木曜日

「結果」という言葉をきいたことがありますか？親たちはこどもたちに、もし従わなければ、その結果を自分の身にうけることになるよ、と警告することがあるでしょうか？もちろんです。その「結果」として、たたかれたり、他の罰を受けたりすることもあるでしょう。また時には、わたしたちが傷ついたり、自分のしたことが他の人を傷つけることもあり、自分がだれかを傷つけてしまった罪悪感に苦しめられたりすることもあります。

ダビデがこれらのおそろしい罪を犯したとき、それには必ず結果がともなうことを、神様はナタンをとおしてダビデに警告されました。そしてダビデの罪のせいで、それらの結果はすべて起こるのです。神様がそれを起こさせられたのではありません。それは、まちがった選びのたどる道であり、行く末なのです。結果はいつでも必ずついてまわります。それはまさに、サタンの望むことです。それから、彼は人々が神様に対して怒り、責めるように仕向けるのです。まるで、これらのことが起こったのはすべて神様のせいであるかのように、です。

ナタンが、金持ちの男が貧しい男から小羊をとりあげた話をしたとき、ダビデは、金持ちの男は自分がとりあげた分を４倍にして貧しい男に返すべきだと言いました。ダビデは自分の罪のために、自分の４人の息子が死ぬ結果になることを知らなかったのです。最初の息子は、バテシバとの間にできた男の赤ちゃんで、病気で亡くなってしまいました。ダビデは神様に、どうかこの罪のない赤ちゃんをいやしてくださいと、必死にお祈りしました。神様はこの赤ちゃんを愛しておられましたが、ダビデの犯した罪はそれほど大したことはなかった、とだれかに思わせるようなことをしてはいけないのを知っておられました。

考えてみよう：ダビデが自分のしてしまったことを悟った後に書いた歌の一部を読んでみて下さい。詩編 51:1-12。この中から一節を選んで暗唱しましょう。

金曜日

ダビデは神様を愛していました。また、自分の犯した恐ろしい罪を生涯ずっと悔いていました。この罪があったために、自分のこどもたちがまちがったことをした時にも、罰を与えにくくなっていました。ダビデは、こどもたちがいつでも、ダビデの犯した罪を自分たちが罪を犯すことの言い訳に使うことができるのを知っていました。そういうわけで、ダビデが彼らに罰を与えることをしなかった

ために、こどもたちのうちのある者は、悪いことをしても、とがめられずにやりすごしました。ダビデの家族は大家族でした。そのうちのほとんどが、異母〔腹ちがいの〕兄弟、異母姉妹と呼ばれる関係でした。彼らの父親はダビデひとりですが、母親はちがいました。

ダビデの長男の名前はアムノンといいます。ダビデの息子たちの中で一番ハンサムだったのはアブサロムでした。彼について、聖書は何と語っていますか？サムエル記下 14:25。

アブサロムは、異母〔腹ちがいの〕兄弟であるアムノンが自分の妹にしたあまりにもひどいことに、怒りを覚えていました。ダビデは何があったかを知ったので、アムノンを罰するべきでしたが、そうしませんでした。

まる2年もの間、アブサロムは異母兄弟であるアムノンに口をきくことすらしませんでした。彼はだれにも言いませんでしたが、アムノンを憎んでいました。そしてとうとう、復讐〔仕返し〕の計画を思いつきました。アブサロムが大きな宴会をもよおし、すべての兄弟と父ダビデも招待します。たくさんの酒を出すのです。そしてみんなが酒に酔っている間に、自分のしもべにアムノンを殺すよう命じるのです。

アブサロムがダビデを宴会に招待したとき、ダビデはありがたく思いましたが、これほどたくさんの人々を招くのはアブサロムにとって負担が大きいと考えました。サムエル記下 13:25。

そこでアブサロムは、ならばせめて異母兄弟のアムノンを宴会へ来させるよう、ダビデにお願いしました。しまいにダビデは、すべての兄弟たちをそこに行かせる許可を与えました。けれども、ダビデ自身は行かないことに決めていました。26-27 節。

考えてみよう：罪を憎むのは正しいことですか？はい、正しいことです。では、罪を犯す人を憎むのは正しいことでしょうか？いいえ、正しいことではありません。仕返しをしたいと思う気持ちは、だれかを傷つけることの正当な理由になるでしょうか？ダビデはそうしたことがありますか？神様はローマ 12:17-19 で何と言っておられますか？

もっと学ぼう！

★サムエル記下 7, 9, 11-13 章
★人類のあけぼの 70 章下巻 p. 405-433

病気のエレン

「少女エレン」より　エイミー・シェラード編

エレンが９歳のとき、お父さんは、乗り合い馬車で長い旅をして、いまよりもっと帽子が売れる州へと引っ越すことに決めました。お父さんは帽子の箱を荷造りして、大好きな家族にお別れを言いました。帽子の箱を馬車の屋根にのせてから、お父さんは他のお客さんたちと馬車に乗り込みました。そして、エレンのお母さんと８人のこどもたちに手をふって、お別れをしました。

Little Folk Visuals

次にお父さんがエレンに会うときには、見てもそれがエレンだとわからないぐらい変わりはてた姿になっていることなど、知るよしもありませんでした。どうして?一体何が起きたのでしょう?

ハーモン家は、こどもたちの通う学校から、たったの２、３ブロック離れたところに住んでいました。

ある日のこと、学校が終わって、このふたごの姉妹とクラスメートのひとりが家へと歩いていると、うしろから、ひとりの少女が怒って何かさけんでいるのが聞こえました。ふりかえってみると、少女は手に石をもって、３人に追いつこうと走ってくるではありませんか。

エレンたちは、絶対にけんかをしてはいけないと教えられていましたので、３人とも家へ向かって全速力で走りだしました。少女がどれくらい近くにきているのかをたしかめようと、エレンが一瞬ふりかえったとき、少女の投げた石がエレンの鼻を直撃しました。彼女は意識をうしなって地面にたおれ、鼻からは血が流れでていました。

その次にエレンがおぼえているのは、目をあけると自分がお店にいて、人々が心配そうにのぞきこんでいたことです。親切な通りがかりの人が自分の馬車でエレンを家までおくろう、と言いましたが、エレンはこの人の馬車の中に血をつけてしまったら申しわけないと思い、感謝の気持ちだけを伝え、歩いて家まで帰れると言いました。

エレンの姉妹とクラスメートが手伝いましたが、結局、自力では歩けないことがすぐにわかりました。彼女はふらふらとめまいがして意識を失い、またも地面にたおれてしまいました。もう家の近くまで来ていたので、エリザベスとクラスメートがエレンを家まで運びました。お母さんは、すぐにエレンをベッドに寝かせました。

当時のお医者さんといえば、今のお医者さんのようにたくさんのことを知っていたわけではありません。彼らはエレンを助けてあげたいと思いましたが、何をしたらよいかわかりませんでした。エレンの傷があまりにもひどく、出血も多かったので、お医者さんたちは、彼女がもうじき死ぬだろうと思っていました。

何週間もの間、エレンは見ることも聞くこともできず、静かにベッドに横たわっていました。みんな、彼女が死んでしまうと思いました。ある親切な近所の人は、エレンの家族に、彼女のお葬式の準備の手伝いをしたい、とまで話しにきました。しかし、エレンのお母さんは「けっこうです」とことわりました。お母さんは、エレンが死なないと信じていたのです。

エレンが意識をとりもどしはじめたとき、自分に起こった出来事について何も思い出せませんでした。まるで長い長い眠りから覚めたような感じで、ただ、どうしてこんなに力がなくて疲れているのか、ふしぎでなりませんでした。

そんなある日、近所のおばさんがたずねてきて、こう言うのを聞いたのです。エレンがあまりにも変わりはてた姿だったので、本人だとは気づかなかった、と。

エレンは、それがどういう意味なのかを考えました。そしてはじめて、鏡をもってきてほしい、とたのみました。あの近所のおばさんが、自分の姿について、どうしてあんなおかしなことを言ったのか、確かめたかったのです。

（つづく）

第4章

反乱を起こした息子

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主がたまわる地で、あなたが長く生きるためである。」—出エジプト記 20:12

日曜日

ついにアブサロムは、異母〔腹ちがいの〕兄アムノンが、妹にしたことに対するこらしめの計画を実行することにしました。大宴会がひらかれ、アムノンを含むダビデの息子全員がそこに来ていました。そこで、何が起きましたか？宴会はどのようにして幕を閉じましたか？サムエル記下 13:28-29。

しかし、ダビデの息子たちが家にもどらないうちに、だれかが知らせをもってあわただしくかけこんできました。30-31 節。

それから別の男が、先の知らせとはちがう知らせをダビデに伝えました。正しかったのはどちらの知らせですか？ 33 節。

ダビデは、息子たちをひとりのこらず愛していました。もし長男のアムノンが殺されていたら…アブサロムにそこまで残酷なことができるのだろうか？

道を見つめていたある人が「帰ってきました！」とさけびました。「たしかに、王子様方が帰って来られます！」34-36 節。

たしかに、ダビデの息子たちは無事でした。ただし、長男のアムノンがいません。あと、もうひとり見当たりません。それはだれでしたか？ 37 節。

ダビデがひじょうに悲しむだろうということを、アブサロムは知っていました。また、アムノンが自分の異母兄弟の手により殺された事実をダビデがどう思うか、アブサロムはそのこともわかってはいました。そこで彼は、しばらくの間、父親からはなれて暮らすほうがよいと決心しました。

アブサロムのしたこと

は、ひどく悪質な犯罪でした。そしてダビデは、罰として、アブサロムが家に帰ることをゆるしませんでした。どれくらいの期間、アブサロムは追放されていましたか？ 38 節。

考えてみよう：ダビデは自分の犯した恐ろしい罪の罪悪感に苦しんでいたので、アムノンに罰を与えるのは簡単ではなかったことでしょう。しかし、アムノンは今、自分のしたことのために死んでしまいました。もちろん、アブサロムのしたことも大変なまちがいです。ダビデの罪のせいで、これほど多くの悲劇が起きていました。罪の結果は本当に恐ろしいですね？サタンの言うことに耳をかたむける選びは、かならず最後に不幸な結果をもたらすのです。

月曜日

アムノンを殺したアブサロムへの処罰は、彼が思っていたよりもかなり長い期間つづきました。どれくらいの間、アブサロムは家からはなれて暮らしましたか？サムエル記下 13:38。

それでもダビデは、アブサロムを愛してやみませんでした。ダビデはどう思っていましたか？ 39 節。

ダビデの軍隊の指揮官ヨアブは、そろそろダビデとアブサロムを仲直りさせようと決めました。ヨアブは、ひとりの賢い女を別の町からよびよせて、預言者ナタンがダビデに金持ちの男が貧しい男から小羊をとりあげた話をした時のように、ダビデに話をするようお願いしました。彼は、この女がダビデに話すための物語まで、でっちあげました。その内容は、二人の兄弟が争ったことについてです。サムエル記下 14:2-3。

女が物語を話し終えると、ダビデは女に、ここへきてこれを話すように差し向けたのはヨアブではないか、とたずねました。女は、そのとおりです、と答えました。そこで、ダビデはヨアブと話をしました。王は、ヨアブに何をするよう言いつけましたか？ 21 節。

やっと家へもどれると知ったアブサロムは、喜んだにちがいありません。けれども、がっかりしたのもたしかです。なぜですか？ 23-24 節。

こうなると人々の目には、罰するべき時にアムノンを罰しなかったのに、アブサロムに対しては処罰がきびしすぎるように見えました。人々は理解できませんでした。なぜ、人々は納得しなかったのでしょう？ダビデはアブサロムにきびしすぎましたか？すぐに、人々はアブサロムに同情しはじめました。まもなく人々は、彼のことを、悪事を行った者ではなく、英雄だと思うようになりました。

考えてみよう：様々な事が、ダビデにとってうまく進んでいましたか？神様はまだ、ダビデを愛しておられましたか？もちろん、とても

愛しておられました。アブサロムを家にもどらせはしたものの、自分に会うことをゆるさなかった点で、ダビデは賢かったと思いますか？

火曜日

アブサロムは、人々が自分のことを慕っているのを知っていました。また、彼がエルサレムにもどってきて、すぐ近くに住んでいるのに、ダビデが彼と口をきこうとすらしないのを人々が同情してくれていることも知っていました。サムエル記下 14:28。

アブサロムはヨアブを呼び寄せて、手伝ってもらうことにしました。ヨアブは協力しましたか？ 29 節。

アブサロムは不満をつのらせていました。そこで、ヨアブが必ず聞いてくれるようなことをしようと決心しました。それは効果がありましたか？ 30-33 節。

ついに、ダビデとアブサロムは仲直りをすることができました。いや、本当に仲直りできたのでしょうか？おそらく、ダビデはそう思っていたことでしょう。心からアブサロムを愛していましたから。しかしアブサロムは、今や人気者でいることの喜びの味をしめるようになり、自分をとても偉く見せるようなふるまいを始めました。サムエル記下 15:1-5。

アブサロムは、父ダビデに忠誠をあらわしていたでしょうか？いいえ。少しずつですが、人々の多くは、アブサロムのほうがダビデよりもいい王様になるかもしれない、と思うようになりました。6 節。彼らは、いずれダビデの次に王になるのはアブサロムだろうと考えてはいましたが、実はたくさんの人々が、アブサロムを今すぐにでも王にしたいという気持ちがありました。アブサロムは、人々の忠誠心をこっそりうばっていたのでした。

ダビデはその間ずっと、アブサロムが、ダビデとふたたび一緒になれたことを喜んでいるとばかり思っていました。彼には、本当のところ何が起きているのか、まったくわかりませんでした。

考えてみよう：アブサロムには、表と裏がありました。父親といるときの彼と、民といっしょにいるときの彼は、まったくちがっていたのです。これは正直なことでしたか？こどもたちは、このようなことをするように誘惑されることがあるでしょうか？両親はこどもたちがいつも何をしているか、わかっていますか？神様はごぞんじでしょうか？神様は、アブサロムがしていることをごぞんじでしたか？

水曜日

ついにアブサロムは、ダビデに代わって自分が王になるための計画

をつくりあげました。何が起きているのか、ダビデはまだ何も知りません。

ある日のこと、アブサロムは、30キロ離れたヘブロンの地へ行く必要があるとダビデに話しました。そこは、ダビデが王とされた最初の町です。アブサロムの話では、彼が追放されていた間に、神様が自分とダビデがいっしょになれるよう助けて下されば、自分はヘブロンへ行き、神様のために特別な事をすると約束した、というのです。ダビデは、アブサロムが神様に感謝をささげたいというので、喜んでそこへ行く許可を与えました。しかし、アブサロムがそこへ行く本当の理由は何でしたか？サムエル記下 15:9-10。

ダビデはようやく、何が起きているのかを知ることになります。これから戦争がはじまるのです。宮殿から自分の治める美しい都を見ながら、このエルサレム内で戦いが起きて、人々がここで殺されることを考えただけでも耐えられませんでした。

そんなことは断じてあってはなりません！13-14節。

それでもまだ、ダビデを慕い、彼を助けるためならどんなことでもする心がまえのある忠実な人々が数多くいました。ただちに、ダビデと彼の兵士と召使いは都をはなれました。愛し、信じていた自分の息子から逃げるのは、ひどく悲しいことでした。

祭司ザドクが契約の箱を都からもちだして来るのを見たダビデは、それをもって帰るように言いました。ただし、アブサロムの軍隊がエルサレムに着いたら、そこで起こっている事を自分に知らせるよう、ザドクにたのみました。28-29節。

一行が道をいそいでいると、ヨナタンの息子の財産を管理しているサウルのしもべ、ヂバに会いました。サムエル記下 16:1-3。

さらにダビデがすすんで行くと、今度はサウルの親族、シメイに会いました。彼は、ダビデのことをきたない言葉でののしりはじめ、泥や石をも投げつけました。ダビデの兵士のひとりはシメイを殺してやりたいと思いましたが、ダビデはそのままさせておくようにと命じました。何しろ、実の息子アブサロムがダビデにしていることは、シメイよりもひどいのですから。11-13節。

考えてみよう：そこで起きていた出来事について、本当にダビデに責任があったと思いますか？私たちが、もめごとを起こすような選びをしてしまっても、神様はなお、愛して下さるでしょうか？

木曜日

アブサロムとその軍隊がエルサレムの都に到着したとき、戦おうとしていた相手が皆いなくなっているのに気づき、次に何をすればよいのか、わからなくなってしまいました。

彼はふたりの人に、それぞれの意見を聞きました。どちらもアブサロムを助けたいと思っている様子でしたが、実は、そのうちのひとりはダビデを助けたかったのです。さて、アブサロムが選ぶのは、どちらの意見でしょうか?最終的に、彼は、本当はダビデの味方であるホシャイの意見を選んでしまいました。

ホシャイは、急いで祭司ザドクにこの事を知らせました。ダビデに知らせを届けるため、ザドクはひそかに町の外で少年ふたりを待たせていました。ところが、だれかに見つかってしまい、少年たちもそれに気づきました。サムエル記下 17:18-19。

もう安全だとわかると、彼らはすぐに全速力で走って行き、ダビデと仲間の人々全員が、その晩にヨルダン川を渡らなくてはならないことをダビデに告げました。その日は1日中大変な思いをしてここまで来たので、ダビデもともにいる人々も、もうくたくたに疲れきっていました。それでもとにかく、彼らは進みつづけたのです。そしてやっとのことで、守りがかたくて安全な町にたどりつきました。町の人々はとても親切で、できるかぎり快適に暮らせるように助けてくれました。

そのころエルサレムでは、アブサロムがいらだっていました。彼と大軍隊がダビデを追いましたが、彼の兵士たちはうまく訓練されておらず、戦いかたも知らないので、到底ダビデの兵士たちにはかなわないのです。

この出来事は、ダビデにとって恐ろしい悪夢のようであったにちがいありません。彼のりっぱな息子が自分に戦いを挑み、王となるためには、できれば実の父親である自分を殺そうとさえしているのです。ダビデの心は痛みました。

考えてみよう:ダビデの書いた歌のひとつである、詩篇3篇を読んでみてください。これはいつ書かれたものですか?ダビデはなおも、神様に信頼することを選んでいましたか?たとえ何が起ころうと、神様は、私たちが信頼するのをやめないように望んでおられるでしょうか?神様は、たとえ私たちが大きな間違いを犯したときでさえも、私たちを愛してやみません。

金曜日

今起こっている現実を受け入れたくないダビデでしたが、一刻も早く軍隊を組織しなければならないことはわかっていました。サムエル記下 18:1-2。

ダビデが兵士たちとともに出陣すると言ったとき、彼らは何と言いましたか?3-4節。ダビデにはひとつ、大切な願いがありました。そして兵士たちが町の門を出ていくとき、ダビデはその願いをそれぞれの長に伝えました。それはどんな願い

でしたか？ 9,15,16 節。

ある人が走ってきて、戦いが終わったことをダビデに報告しました。ただ、ダビデにはひとつだけ、知りたい大切なことがありました。そして使者が話すのを聞いた瞬間、ダビデはその答えを知ったのでした。32-33 節 , 19:1-4。

あなたにも、ダビデの声が聞こえてきそうではありませんか？ヨアブ以外のみんなが、悲しみにくれているようです。ダビデはこんなに悲しむのではなく、むしろ感謝すべきだとヨアブは思いました。なにせ、兵士たちはダビデのために命をかけて戦ったのですから。こうなると、まるで自分たちのせいでダビデを悲しませてしまったかのように兵士たちは感じていました。5-7 節。

ようやくダビデは、ヨアブが正しいことに気づきました。自分のために勇敢に忠実に戦ってくれた兵士たちに、ダビデは心から感謝しました。心が重かったにもかかわらず、彼は何をしましたか？ 8 節。

少し時間はかかりましたが、ついに、すべての人がダビデを彼らの王であると判断し、ふたたび彼に忠誠をつくすことを選んだのです。

考えてみよう：アブサロムが父親にとっての大いなる助け、慰めとなることもできたでしょうか？そうはならないで、彼はだれを傷つけましたか？アブサロムは神様の十戒のうち、どの戒めを破りましたか？

もっと学ぼう！

★サムエル記下 14-20 章

★人類のあけぼの 72 章

イエス様に心をささげるエレン

「少女エレン」より　エイミー・シェラード編

Little Folk Visuals

自分の顔が、けがをする前とは全く変わってしまっているなんて、エレンは考えてもみませんでした。でも今、自分の姿を鏡にうつして、ひどいショックを受けました。今見ているこの顔は、本当に自分の顔なのでしょうか？青白く、やせほそっています。鼻は、前に鏡で見ていたのとは全然ちがうのです。実際、彼女の顔には以前の面影がまったく残っていませんでした。

エレンの心は沈んでいました。はたして、彼女の顔をまともに見ることのできる人がいたでしょうか？彼女がこれからずっと、あのような顔で生きていかなくてはならないことを思うと、だれもがつらくなりました。エレンにはとうてい耐えられないだろうと、みんなが思いました。

お父さんが長い旅から帰ってきて、こどもたちにあいさつをし、エレンはどこかとあたりを見回しました。「エレンはどこだい？」お父さんはたずねます。そして、エレンを見つけました。

やせほそった小さな女の子、顔かたちの変わってしまったこの女の子が、本当に娘のエレンなのでしょうか？お父さんは、どんなにエレンをかわいそうに思ったことでしょう！

顔や姿によって、人間のあつかわれかたが大きく変わってくることに、エレンはすぐ気づきました。多くの友人は彼女に同情し、親切にしたり、手伝ってくれたりしました。しかし、ある友人たちは、以前と同じようにエレンを好きにはなれませんでした。「もうエレンは、かわいくないんだもの。」そう彼らは言いました。当然、エレンはひとりぼっちだと感じていました。明るくふるまっていても、心の中はひどく傷ついていました。

エレンが楽しみにしていたことのひとつは、学校にもどることでした。もう待ちきれないぐらいでした。しかし、やっとその

時がきたというのに、こんなにがっかりさせられるなんて!本を読むとめまいがして気分が悪くなりました。字を書こうとすると、手がふるえて書けません。エレンの先生たちもがっかりしましたが、彼女には、まだ学校に来るほどの十分な体力がついてないからだよ、というしかありませんでした。エレンは何度もなんども学校へ行こうとしましたが、あれほど望んでいた学びやにもどることはありませんでした。

そんなある日、エレンが 12 歳のとき、ウィリアム・ミラーという説教者がエレンの住んでいるポートランドへやってきました。エレンは何人かの友人といっしょに、彼の説教をききに出かけました。ミラー先生はイエス様の愛と、イエス様がもうすぐもどって来られる話をしました。

「イエス様がわたしのすべてを知っておられるなんて、うれしいわ」とエレンは言いました。「わたしはかわいくないし、学校にも行けないのに、それでもイエス様がわたしを愛して下さるなんて、本当にうれしい!」

ミラー先生は、イエス様が来られる前に起こるだろうと聖書に書かれているしるしのうちの多くは、もうすでに起こっている、と言いました。ですから彼は、イエス様が来られるのは、もう間近であると考えたのです。ひじょうに注意深く聖書を勉強した後、彼はついに、イエス様が来られるのは 1844 年 10 月である、と結論をだしました。アメリカのいたる所で、また世界のあちらこちらでも同じように、伝道者たちが人々に準備をするように宣べ伝えました。わくわくどきどきしますね!

彼女がバプテスマを受けて教会員となった日は、エレンにとって本当にうれしい一日でした。彼女の心は幸福で満たされ、他の人にもイエス様の愛を伝えたいと思いました。

エレンと姉妹たちは伝道のための本や文書をあげたいと思いましたが、お金がかかりますし、そのお金がありません。自分たちにできることは何かしら?と彼女たちは考えました。

(つづく)

第5章
神殿の建設

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「すべてのものはあなたから出ます。われわれはあなたから受けて、あなたにささげたのです。」—歴代志上 29:14」。

日曜日

ダビデは40年もの間、王様でした。羊の番をしていた時にサムエルに召され、油を注がれた日から、実にいろいろな事がありました。巨人ゴリアテのこと、ヨナタンのこと、サウルのこと、他にも神様がなんども自分を守りやしなって下さる約束をはたしてくださったことを、ダビデは時々思い出したことでしょう。そして、今はもう年老いていました。

神様は、ソロモンが次の王になるべきだとおっしゃいました。しかし、ダビデの4番目の息子アドニヤは、ソロモンより年上で、次に王位につくべきなのは自分だと思っていました。列王記上 1:5-6。

アドニヤが、まるで自分が王になったかのように宴会をもうけているのを知って、預言者ナタンは急いでダビデに知らせました。24-27節。

あらためてダビデは、自分が息子をきちんと厳しくしつけてこなかったことを思い知らされました。アドニヤは、神様のご計画に反抗しているのです。

ダビデはザドクとナタンに、ただちにソロモンに油をそそぎ、彼こそが王であることを公表しなくてはならないと言いました。ふたりはすぐに、言われたとおりのことを実行しました。その後、ダビデとソロモンに忠実な人たちは何をしましたか？39-40節。

何が起きているかを知らされたアドニヤは、宴会どころではなくなりました。宴会は中止となり、人々は急いで家へ帰りました。49節。

しばらくたって、アドニヤは命を失いました。神様が言われたとおり、ダビデの4人の息子が死んでしまっ

たのでした。

考えてみよう：服従と不服従。最後に幸福をもたらすのは、どちらでしょうか？あなたはどちらを身につけようとしていますか？

月曜日

契約の箱をおさめ、人々が礼拝をささげるための美しい神殿をたてたいと、ダビデは強くのぞんでいました。ところが、神様はナタンをとおして、だめだといわれました。神殿の建設は、息子のソロモンが実行することになっていたのです。

ダビデが神殿を建てることはかないませんでしたが、神様の助けを得て、彼が神殿の設計図をすべてつくりました。歴代志上 28:19。

またダビデは、ソロモンが必要としそうな材料や道具をいくつも集めておきました。歴代志上 22:5,14。

今や、ソロモンが王様になっていました。ダビデは彼に神殿の設計図をわたし、やるべきことを伝えました。ダビデはまた、神殿はソロモン自身でなく、神様に栄光を帰すべきものであると念をおしました。歴代志上 29:1。

自分がもうじき死んだら、ソロモンはさぞかし心細く感じるだろうとダビデは思いました。彼はソロモンに、もし神様に信頼して従うならば、神様が父親となって下さるだろうと言って、息子を励ましました。歴代志上 28:6-7。

すばらしい約束ではありませんか！ただし、その約束がはたされなくなる場合もありました。もし彼が神様に従わずに、サタンに従うことを選んだ場合です。9 節。

神殿の設計図に目をとおしたソロモンは、父の死後に自分が負うべき責任の大きさを考えて、はたして自分はよい王様になれるだろうかと、不安になったことでしょう。父親は、神様に信頼しているかぎり、何も恐れることはないからといって、彼を励ましました。20 節。

考えてみよう：心から喜んでしたがうことを選ぶとき、あなたはすでに、神様のための大事なことを学んでいるのです。そのことを知っていましたか？

火曜日

ダビデは一生のあいだに、何か過ちをおかしたことがありました

か？実は、なんどもありました。彼も、わたしたちと同じ人間でしたから。あやまちをおかし、とても残念な選びをしたこともありました。ダビデのいくつものまちがった選びの結果、さまざまな災いが起こるのを止めるのは最善でないことを神様はご存知でしたが、決してダビデを放ってはおかれませんでした。神様はダビデについて、「彼はわたしの心にかなった人で」あるとさえ言われたのでした。使徒行伝 13:22。

神様はなぜ、そのように言われたのでしょうか。決して、ダビデが完ぺきな人間だったからではありません。完ぺきではありませんでしたが、自分がまちがったことをしたとわかった時にはいつも、悪かったと心から反省しました。それに、決して言い訳をしませんでした。彼はいつも神様に、また他の人々に対しても、自分のしたことがまちがいだったと告白したのです。そしてそのたびに、どうかゆるしてくださいと、神様にお願いしたのでした。

神様は、罪の悪い結果を見たがっているのでしょうか？もちろん、そんなことはありません。エレミヤ 29:11。

神様が十戒というすばらしい律法をわたしたちに下さったのは、邪悪なサタンの影響から守られ、安全で幸福なくらしをしてほしいと願っておられるからです。サタンはわたしたちをだまして、神様に従わせないようにします。したがわない結果、最後には不幸になってしまうのを、神様は知っておられるのです。不幸な結果が起こるのをあえて見守るほうが最善であることをご存知の神様に対して、ダビデは不満をもらしましたか？いいえ、ダビデは文句を言いませんでした。

神様は、どんなときでも喜んでゆるしてくださいます。そして、わたしたちが神様を信頼するよう願っておられます。罪の結果が起こるのをあえて神様がゆるされる時でも、信頼するのです。神様は私たちや他の人たちにとって、最もよいものが何かを知っておられます。

考えてみよう：わたしたちが過ちをおかしたり、まちがった選びをしたりするとき、また、そうしないように努力するのをやめさせようとサタンが誘惑するときには、ダビデのことを思い出してください。時には、罪の結果をかりとるほうがよいのはなぜですか？

水曜日

ダビデは40年間、王としておさめ、そして亡くなりました。ソロモンが王となるために必要なものはすべて残しましたが、それでも特別な助け手が必要なのをソロモンは知っていました。神様も、ソロモンを助けたかったのです。そのことを、ソロモンはどのようにして知りましたか？歴代志下 1:7。

もし神様が、あなたに同じ質問をしたな

ら、何と答えますか?ソロモンの答えを読む前に、あなたがいちばんほしいものを言ってみてください。

それから、ソロモンが何を求めたかを読んでみましょう。8-10節。

あなたの答えは、ソロモンの答えと似ていましたか?彼の答えはすばらしかったと思いますか?神様はどう思われたでしょうか?11-12節。

神様は、ソロモンに知恵を与えると約束なさいましたか?列王記上 4:30,32-34。

富を与えることも約束なさいましたか?歴代志下 1:15。

***考えてみよう:** 多くの人が欲しがるものは何でしょうか?いくつかあげてみてください。どれだけたくさんのお金をもっていたとしても、人は、欲しい物すべてを手に入れて、幸福になることはできないのを知っていますか?たくさんの物があれば、人は幸福になれるのでしょうか?いいえ、そうではありません。人は、ほしい物を手に入れるたびに、これで自分は幸せになれると思うのですが、実際はそれほど幸せではないことが分かって、さらに多くの物を手に入れようとするのです。彼らは、サタンのうそにだまされていることに気づいておらず、この方法では決して幸せになれません。*

では、お店で本当の幸福を買うことができないのであれば、どうやってそれを手に入れることができるのでしょう?どんな人たちが、本当に幸せな人なのでしょうか?子供のころのイエス様は幸せでしたか?

木曜日

ダビデが年をとってからの時期と、ソロモンが王であった間は、敵が戦いをしかけてくることはありませんでした。ソロモンにとって、美しい神殿をたてるのに絶好の時でした。わたしたちはこの神殿を「ソロモンの神殿」と呼びますが、実際は「神さまの神殿」でしたね?ソロモンではなく、神様をあがめるための建物でした。

ダビデは亡くなる前に、ソロモンが必要とするたくさんの物を、けんめいに集めました。また、自分の持っている財産の多くをソロモンに与えました。さらにイスラエルの人々も、義務感からではなく、心から喜んで、自分たちの財産をソロモンにささげました。歴代志上 29:2-3,9,16。

建物が建てられているあいだ、どんな音が聞こえていましたか?もしあなたがその場にいたとしたら、どんな音を聞いただろうと思いますか?列王記上 6:7。

想像できますか?持ってこられた石の大きさも形も完ぺきだったので、ただ組み立てるだけでよかったのです。しずかに、そしておごそかに、それぞれの部分が定められたところに置かれました。働き人たち

は、神様と天使たちが見守っていることを実感したことでしょう。

契約の箱が長いあいだ保管されていた古い幕屋は、内側はとても美しかったのですが、外観は質素でした。こんどの神殿は、まったくちがったものでした。内部だけでなく、外観もおなじように美しいものでした。何千何万もの人たちが、この仕事にたずさわりました。そして完成してみると、それはそれは見事な美しい建物でした。

祭司たちは、うやうやしく神聖な器具を聖所へと備えつけていきます。そして契約の箱を、ダビデが保管していた幕屋から運び出し、すでに至聖所に置かれていたふたりの背の高い、金でつくられた天使たちのつばさの下に設置しました。金の天使たちは、うつむいて箱を見おろす形になっていて、まるで契約の箱を見守っているようでした。

考えてみよう：わたしたちの礼拝する場所が質素であっても優雅であっても、そこは神様に栄光を帰するところだということを、覚えておくべきですか？礼拝する場所を清潔で感じのよい場所として保つことは、わたしたちの家にそうするよりも大切なことですか？あなたはどう思いますか？

金曜日

神殿を建てるのに、7年もの年月がかかりました。ついに完成し、神殿を神様におささげする特別な儀式の準備もととのいました。

ソロモンは、その儀式を9月に行うことにしました。その頃までに収穫が終わるので、すべての人が参加できるからです。イスラエル人の他には、外国から来た、りっぱな着物を身にまとった特別な客人もいました。その中のだれもが、これまで見たことも聞いたこともないほどの壮大な奉納（神様に捧げる）の儀式でした。

ふだん、古い幕屋での仕事は、祭司のいくつかのグループが月ごとに交代でおこなっていましたが、この新しい神殿の奉納の儀式には、祭司全員がきれいな純白の礼服を着てのぞみました。また大祭司は、美しい特別の礼服を着ていました。

その時の音楽は、とてもすばらしいものでした。120人もの祭司がラッパを吹きます。その音に聖歌隊が前からも後ろからも答えるように歌います。あらゆる種類の楽器の音が鳴りひびいています。

特に重要なのは、これからです。聖歌隊の全員が同じ歌を共にうたい、すべての楽器が聖歌隊にあわせてかなでられました。歌の歌詞は、どのようなものでしたか？また彼らが歌ったときに、何が起こりましたか？歴代志下 5:13-14。

そこにいたすべての人がどれだけ感動したか、想像できますか？神殿の中庭にある特別な演壇に立って見ていたソロモンは、とても満足しました。神様も喜んでおられることがわかったからです。

いよいよ、神殿を神様にささげるための、祈りの時間がやってきました。ソロモンの前には新しく美しい祭壇があり、すでに犠牲の供え物がおかれ、焼かれる準備がととのっています。ソロモンがうやうやしくひざまずいて、神様をほめたたえ、これからも民を祝福し守ってくださいと願うすばらしい祈りをささげている間、人々はしずかに聞き入っていました。祈りを終えたときに、何が起こりましたか？歴代志下 7:1-3。

家に帰る道すがら、人々は、この日のことは決して忘れないだろうと思いました。

考えてみよう：神様は、この美しい神殿で礼拝されたときのように、わたしたちが礼拝するところにもとどまりたいと思うでしょうか？いつも神様にそう思っていただくために、わたしたちはどんなことができますか？

もっと学ぼう！

★列王記上 1, 5-8 章
★歴代志上 22, 28, 29 章
★歴代志下 1-7 章
★人類のあけぼの 73 章
★国と指導者 1, 2 章

天国の夢

「少女エレン」より　エイミー・シェラード編

エレンと姉妹たちは、人々にあげるための本や印刷物を買うお金をかせぎたいと思いました。彼女たちは、これらの本や印刷物で言われている、イエス様の再臨がもうすぐだというメッセージを、他の人たちにも知ってほしいのです。そして、できるだけ多くの人々に、イエス様にお会いする準備をさせたいと思いました。

ハーモン家のお母さんは女の子たちに編み物を教えたので、すでに彼女たちは帽子をつくるお手伝いもできるようになっていました。

「そうだ、長い靴下を編んで売りましょうよ。そして、帽子を編むお父さんのお手伝いもするの。」みんなでそう決めました。そういうわけで、彼女たちはこれらの仕事にとりかかりました。エレンは体がじょうぶではありませんでしたが、できるだけがんばって、1日に25セントをかせぐことができました。たいしたお金ではないように思えますよね？でも当時、これはかなりの金額で、エレンたちは無料でくばる本や印刷物を買うことができたのです。

ある伝道者は、「僕は、神様がエレンを何か大きな働きのために準備をさせようとしているのだと思う」と言いましたが、そのとおりでした。イエス様はエレンに、彼女のためのひじょうに大切な働きを用意しておられました。将来、彼女はイエス様のための預言者となるのでした。

預言者とは、神様の民への重要なメッセージを、まぼろしや夢をとおして与えられる人です。エレンがまだ15歳のときに、イエス様から与えられた夢のひとつを、ここに紹介しましょう。

夢のなかで、エレンは悲しんでいました。「どうしたらイエス様に会えるのかしら？」彼女は考えました。「イエス様がわたしたちのいる地上にいて下さったなら、会いに行って、わたしの悩みすべてを打ちあけられるのに。イエス様ならわたしをきっと助けてくださるはずだわ。」

それから、夢でドアが開かれているのが見え、ひとりの天使が部屋に入ってきました。「あなたはイエス様にお会いしたいのですね?」と彼はたずねます。「イエス様はここにおられます。あなたが願いさえすれば、彼を見ることができるのです。さあ、荷物をもってわたしについてきなさい。」

エレンはすばやく自分の荷物をひろいあげ、天使についていきました。まもなく、ふたりは急な階段につきあたりました。登り始めると、天使がこう言いました。「上だけを見ていなさい。他にもこの階段を登った人たちがいたのですが、そのうち何人かは下を見たために、めまいをおこし、落ちてしまったのです。」

エレンは天使に言われたとおり、上を見つづけました。最後の段まできたときに、ふたたび天使が話しかけました。「あなたの荷物をぜんぶここにおいて行きなさい。」彼はそう言いました。

エレンは持ち物をおきました。すると天使は、階段の頂上にあるドアをあけて、そこをとおりぬけるよう、エレンに言いました。その瞬間、彼女はイエス様の目の前に立っていました。イエス様のお顔は、これまでに見たものよりもずっと美しいお顔でした。その優しいひとみは愛に満ちていて、その手をエレンの頭において、やさしくほほえみました。「こわがらないでいいんだよ」とイエス様はおっしゃいました。

イエス様の声をきいてエレンはうれしくなり、その前にひざまずきました。彼女が立ちあがるときにもまだ、イエス様は見つめてほほえんでおられました。それから、天使がドアをあけるときに言いました。「さあ、もう荷物をもっていってもいいですよ。」

エレンが目を覚ましたとき、こんなに美しい夢を見せてくださった神様に感謝しました。また、イエス様がいつも自分にほほえんでいてくださるように、とお祈りしました。

（つづく）

第6章
賢者から愚か者へ

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「神は、その心にかなう人に、
知恵と知識と喜びとをくださる。」
—伝道の書 2:26

日曜日

どうやら、すべての人がソロモンの知恵のことを知っているようです。列王記上 4:34。

いちど、ふたりの女がある大きな問題をかかえてソロモンのところへやってきたとき、彼は変わった方法でその知恵をあらわしました。

この女たちは同じ家に住んでいました。ふたりとも赤ちゃんがいて、赤ちゃんはそれぞれの母親とベッドで寝ていました。ところがある晩、母親のひとりが寝返りをうったとき、気づかずに自分の赤ちゃんの上に転がってのってしまい、小さな赤ちゃんを窒息させて死なせてしまったのでした。

とうぜん、赤ちゃんの母親は大変なことになったと思ったにちがいありません。しかし、すぐに恐ろしい、いじわるな考えが浮かんだのです。もし、音をたてないように起きて、もうひとりの母親の赤ちゃんと自分の赤ちゃんをすりかえられるなら、自分の死んだ赤ちゃんはもうひとりの母親のものになり、相手の生きている赤ちゃんは自分のものになるだろう。そう考えて、彼女はそれを実行したのです。

翌朝、目をさましたもうひとりの母親は、大きなショックを受けました。はじめは泣いたことでしょう。しかし、よくよく見てみると、死んでいる赤ちゃ

んは自分のこどもではないとわかったのです。死んだ赤ちゃんの本当の母親をみると、なんと、生きている自分の赤ちゃんを抱いているではありませんか。あたかも生きている赤ちゃんは自分のものであるかのようにふるまい、しかも、もうひとりの赤ちゃんが死んでしまってかわいそうに、というそぶりまでしたのかもしれません。

すぐにけんかになり、叫び声も聞こえたことでしょう。ほかの人たちには、どちらが本当のことを言っているのか、まったく分かりませんでした。真実を知る方法はないのでしょうか？決着をつけるために、女たちはソロモンのところへ行くことにしました。王様はふたりの話をきいて、話しているふたりの様子を注意深く見ました。どちらも、生きているのは自分の赤ちゃんだと言い張るのです。**列王記上 3:17-22**。

しばらく彼女たちが言い争った後、ソロモンは何と言いましたか？ **23-25 節**。

彼は、本当にそんなことをするつもりなのでしょうか？にせの母親は、「かまいませんよ。どうぞ、そうしてください」と言いました。ところが、本物の母親はなんと言いましたか？ **26 節**。

ソロモンはただちに、どのような判決を下しましたか？そして、その判決を聞いた人々は、どう思いましたか？ **26 節**。

考えてみよう：神様の十戒にしたがうことを選んで、サタンに耳をかさないことが、本当の知恵であることを、あなたは知っていましたか？ヨブ記 28:28 と詩編 119:99,100 を読んでみましょう。

月曜日

あるとき、シバと呼ばれる国の女王が、ソロモンをおとずれることにしました。彼女は、これまで耳にしたソロモンについてのすてきな話がすべて本当かどうか、確かめたいと思ったのです。ソロモンという人は、本当にそれほど裕福でかしこいのだろうか？彼が建てた神殿は、本当に目を見張るほど美しいのだろうか？またソロモンは、彼女がたずねたいと思っている質問に、すべて答えることができるのでしょうか？**歴代志下 9:1**。

シバの女王が到着したときのことは、見ていたすべての人の心に強く残ったことでしょう。たくさんのらくだが、金や宝石や高価な香料などの贈り物を運んできたからです。

女王が見たいと望むものはすべて見せてあげよう、また彼女が知りたいことはなんでも説明してあげようと、ソロモンは親切に時間をさいてあげました。いろんなことについて、どんなにむずかしい質問をしても、一つひとつていねいに答えたのでした。**2 節**。

ソロモンは何よりも、神様について多く語りました。自慢することなく、自分の知恵とすべてのものは神様から与えられたのだと話しました。心からそう思っていて、彼が本当にいばらない人であることが、女王にはわかりました。

いよいよ帰る時になって、ソロモンは、

女王が自分の国にもって帰りたいと思う物があれば、何でも差し上げますと申し出ました。そのときに女王が何を求めたかはわかりませんが、神様がご自分の民になさったことを彼女がほめたたえたことは、わたしたちにもわかりますね。8節。

シバに帰ったあとも、女王は、新しい友人のソロモンと、イスラエルで学んだすてきな神様のことを、決して忘れなかったはずです。ソロモンは、りっぱな伝道者でもありました。この訪問は、彼女が期待していたよりもはるかにすばらしいものでした。5,6節。

考えてみよう：お金持ちで地位も高い人は、高慢と謙遜〔へりくだること〕のどちらになりやすいですか？シバの女王が来たときのソロモンは、そのどちらでしたか？あなたは大きくなったら、高慢になりたいですか、それとも謙遜になりたいですか？

火曜日

お金持ちであることと、偉い人であることは、何か危険だと思いますか？しかも、そのような人が、とてもかしこい場合はどうでしょう。ソロモンはとても裕福で身分が高く、しかもかしこい人でしたか？はい、彼はまさにそのような人物でした。しかしそのために、サタンはソロモンを簡単に誘惑できることを知っていました。

長いあいだ、ソロモンは謙遜な王様でした。彼は、自分がこんなによい王でいられるのは、ただただ、毎日神様が彼を祝福し、助けて下さるからであることを覚えていました。ところが、サタンは少しずつ、神様にではなく自分自身にたよるようにソロモンを誘惑しました。そして少しずつですが、彼は神様の十戒にそむくようになりはじめたのです。ソロモンは、自分よりもサタンがかしこいことを、忘れてしまったのでしょう。

7年かけて神殿を建てたのち、ソロモンは自分の宮殿を建てました。それはそれは美しい宮殿で、完成するまで13年もかかりました。もう欲しいものはすべて手に入れました。そしてそこから、ソロモンは高慢になっていったのかもしれませんね。列王記上 10:26,28。

他の国々の王様たちにはたくさんの妻がいたので、ソロモンもそれをまねしはじめました。彼の妻たちの多くは、異教の王様や外国の偉い人の娘たちでした。ソロモンは、妻たちが真の神様を信じて礼拝するようになって、さらには彼女たちの国々にまで、イスラエルにならって真の

神様にしたがうよう影響を与えることができると考えたのでした。彼は神様ではなく、自分自身の知恵にたよったのです。まもなく、彼は妻たちを喜ばせようと、偶像の神々を拝むことができるような礼拝所をいくつも建てました。そればかりか、みにくい偶像と、異教の神々を拝むための神殿を、神様の美しい神殿の真向かいに建ててしまったのでした。そこは、だれもが見ることのできる場所でした。なんと悲しむべきことでしょう！**列王記上 11:4-8**。

考えてみよう：神様に信頼して従うことを選んでいないのに、サタンから安全に守られることがありえますか？いいえ、それは無理です。サタンは、わたしたちの誰よりもかしこくて、強いのですから。

水曜日

聖書は、2種類の知恵があることをわたしたちに教えています。ひとつは神様から来る知恵、そしてもうひとつはサタンから来る知恵です。ソロモンがイスラエルの王となってのち、長いあいだ選んでいたのはどちらの知恵でしたか？ところが、彼は少しずつ自分の知恵にたよりはじめました。そしてまもなく、その知恵は別の誰かから来るようになります。それは誰ですか？

ソロモンはもはや、前のようにかしこく、親切で謙遜な人物ではありませんでした。しかも今は、欲しいものをすべて手に入れたのに、ぜんぜん幸せではないのです。彼は、うぬぼれが強く自分勝手で、しかも冷たい人になっていました。

神様はソロモンを愛しておられました。彼の名前の一部にも、「神の愛」を意味する言葉がありました。神様はなんども、ソロモンがおそろしい選びをしていることをわからせて、助けようとしました。そしてついに、ある預言者にひとつの警告をあずけて、ソロモンのもとへつかわしました。すると、ソロモンはとつぜん、われにかえったのです。彼は過去をふりかえり、自分のおかした数多くのまちがった選びを思いおこして、おそろしくなりました。そして、心から悪かったと思いました。ダビデのように、彼は言い訳をしませんでした。

ソロモンはまた、自分のあやまちがくりかえされないように、人々へむけての警告の書も書きました。幸福を見つけるために、できることは何でもしたと書かれていますが、どれもうまくいかなかったようです。それはまるで、自分の手で風をつかもうとするようなものでした。**伝道の書 2:11**。

この書のいちばんさいごに書かれていることを読んでみて下さい。**伝道の書 12:1,13,14**。

考えてみよう：あなたは神様から知恵をいただきたいと思いますか？ヤコブ

3:17 は、神様からの知恵がどのようなものかをわたしたちに語っています。また ヤコブ 3:14-16 には、サタンからの知恵がどのようなものかが書かれています。あなたは、ソロモンが死ぬ前に本心にたちかえってよかったと思いますか？わたしたちは、ソロモンの物語からどんな教訓を学ぶことができますか？

木曜日

ソロモンが王位についていたのは、40 年間でした。そのうちの何年かは、神様が彼にまことの知恵を与え、おどろくばかりに祝福して下さいました。しかしそのあと、彼はサタンの知恵に耳をかたむけはじめます。

そして、ソロモンが死ぬ前に神様の知恵に立ち返ったにもかかわらず、忠実でなかった期間にしてしまったことの悲しい結果がいくつも見られました。自分たちの幸せではなく、王様の幸せのために、毎日つらい仕事をさせられていた多くの国民は、不満をつのらせていました。ソロモンは、たくさんの妻たちのぜいたくな暮らしを支えるために、重い税を人々に支払わせていたのでした。

彼の息子が新しい王になる時がきていました。はたしてその息子は、父のソロモンのようになるのか、人々は関心がありました。彼らは、新しい王に、まちがっていることを変えてほしかったのです。

次の王となったソロモンの息子の名前は何といいますか？列王記上 11:43。

ほかの人たちと共にヤラベアムという名の男が、レハベアムと話をするためやってきました。ヤラベアムは、ソロモンに仕えていた有力な指導者のひとりでした。ある日、エルサレムを出たとき、彼はひとりの神の預言者と出会いました。この預言者は新しい服を着ていましたが、それを脱いで、12 切れに引き裂きました。預言者は、ヤラベアムに何をするように言いましたか？列王記上 11:29-32。

そのことを知ったソロモンは、もうヤラベアムを信用できなくなりました。40 節。

しかしソロモンが死ぬと、ヤラベアムはエジプトから戻ってきました。そして、人々がソロモンの息子を王位につけようと集まっていたところに、彼も出向きました。

人々がレハベアムに変えてほしい事を伝えると、彼は、少し考えたいので 3 日後にもどってくるようにと言いました。列王記上 12:5。

考えてみよう：わたしたちが何を選ぶべきかをいちばんよく知っているのは、わたしたちよりもかしこい人ですか？それとも、かしこくない人ですか？子どもは、親の言うことよりも、他の子どもの言うことを聞くべきでしょうか？レハベアムは、人々にどう答えるべきかの決断を助けてくれる、正しい人たちの言う事に耳を傾けましたか？

金曜日

レハベアムは、父のソロモンがしていたような大変な負担を人々にかけるべきか、自分より年上でかしこい人た

ちにたずねました。彼らはレハベアムに、もし彼が人々の願いどおりに行い、彼らに親切でやさしくするならば、人々は彼を愛し彼に仕えるであろうと言いました。ところが、レハベアムの年若い仲間たちは、正反対のことをしろと言います。だれが支配者であるかを人々に知らしめて、ソロモンのときよりもさらに負担を増やすべきだというのです。レハベアムはどちらの助言を選びましたか？列王記上 12:8。

レハベアムの決断は、イスラエルの民を怒らせました。10 の部族が彼を王として受け入れないことを表明して、それぞれの場所にもどりました。レハベアムに仕えつづけたのは、ユダ族とベニヤミン族だけでした。10 の部族はヤラベアムを王とし、まさに、あの預言者が新しい服の 10 切れをわたして言ったとおりのことが起こったのです。列王記上 11:30,31。

それから 200 年もの間、王国は 2 つに分かれていました。仲良くしていたときもありましたが、互いに戦争をすることもありました。もはやイスラエルは、神様がのぞまれたように、他の国々に神様を教える、影響力のある国家とはなれませんでした。

しかし、よい王様やわるい王様があらわれては消え、時代は過ぎていきましたが、他の人々のすることに迷わされることなく神様を愛し、神様に信頼し、したがう忠実な人々が、どの時代にも必ずいました。たいてい、ユダの部族には忠実な人々が他の部族よりも多くいましたが、10 の部族の中にも、そのような人々はたくさんいました。神様はひとりひとりをごぞんじで、彼らを決して見放しませんでした。

考えてみよう：今でも神様は、忠実でいるための選択をしているのは誰か、また、していないのは誰かを知っておられますか？あなたはそのどちらを選んでいますか？

もっと学ぼう！

★列王記上 3-4 章，10-12 章；歴代志下 9 章、

★国と指導者 3-6 章

イエスが来られるのを待つ

『少女エレン』よりエイミー・シェラード編

エレンはワクワクして、それはもう、うれしくてたまりませんでした！ウィリアム・ミラー氏が、イエス様がもうすぐ来られることを説教したとき、ネブカデネザル王が夢で見た像の絵を見せてくれました。その夢と、夢の意味については、聖書のダニエル書2章が語っています。この像の足以外の部分は、すでに起こって滅亡したいくつかの王国のことを指しているというのです。

Little Folk Visuals

「さて、わたしたちは今、鉄と粘土でできたこの足の時代にいるというわけです。」ミラー氏は説明しました。「そして、とても重要な事件が夢のさいごに起こります。この像の足に衝突した巨大な石は、イエス様が来られることを知らせているのです。それは、もうすぐにちがいありません。」

もちろん、イエス様を心から愛していた人々は喜びました。

預言の別の箇所には、聖所が「清められる」と書かれていました。モーセが建てた聖所は、何千年も前になくなっていますし、美しい神殿ももちろんありません。そこで人々は、この預言に出てくる聖所とは、わたしたちの住む世界を指していると考えました。そしてこの預言は、この世界がイエス様の来られる時に火で清められるという意味なのだ、と考えたのです。

イエス様がもうすぐ来られることを信じる人々は、アドベンチストと呼ばれていました。なぜだかわかりますか？「アドベント」という言葉は、「キリストが来られること」を意味するからです。イエス様が最初に来られたのは、2000年以上も前、小さな赤ちゃんとして生まれた時でした。2度目は、彼に忠実な人々を天国へ連れて行くために来られるときです。そういうわけで、イエス様がもうすぐ来られることを信じる人々は、アドベンチストと呼ばれたのです。

あちこちの教会で、多くの伝道者たちがイエスの再臨について説教し、いく千万もの人が信じる決心をしました。しかし、信じない伝道者や信者は、それよりも多くいました。彼らは、教会員でない人々といっしょになって、イエスの再臨をまちのぞむ人たちをばかにしました。

エレンとその家族は、「もうあなたたちは、教会員ではありません」と牧師から言われて、とても悲しみました。アドベン

チストでいることを選んだために、教会から追い出されたのです。それでも彼らは、自分たちの信じていることに忠実でなければならないことを知っていました。

アドベンチストの牧師たちは、預言者の書いたことを注意深く研究して、イエス様の来られる正確な日付も聖書にはっきり示されている、と考えました。そして、1844年の10月22日に、イエス様はこの世界にもどって来られると確信したのです。その日、いたるところで、50,000人の人々が、イエス様が来られるのを熱心に待っていました。エレンと家族も、その中にいました。

その木曜日の朝、ハーモン家の人々は早く起きました。おそらくエレンは、鏡にうつる自分の顔をちらっと見て、髪をとかしながらこう思ったかもしれません。「新しい顔になるのももうすぐね。これからはもう、病気になったりつかれたりすることもないわ。ああ、とうとうイエス様にお会いできる!」

人々は、イエス様が天使の雲に囲まれて、もどって来られるのを見ようと、空を見上げました。「もういつ来てもおかしくない!」そう人々は思いました。

のろのろと時間がすぎていきます。ついにお昼になりましたが、イエス様はまだおいでになりません。でも、夜になるまではまだ時間があります。

（つづく）

第7章

アハブとイゼベルと預言者エリヤ

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「あなたがたの父なる神は、求めない先から、
あなたがたに必要なものはご存じなのである。」
ーマタイ 6:8

日曜日

イスラエルの民がはじめて王を求めたとき、預言者サムエルは、神様の他に王をたてることは神様のご計画ではないと、彼らに念をおしました。神様のご計画どおりに行うなら、神の民が人間や軍隊やつまらぬ偶像などにたよらず、力ある神様に信頼をおいていることを、すべての国々が知るようになるでしょう。ところが今や、イスラエルにはふたりも王がいるのです。しかも、どちらの王も偶像を拝んでいます。これはひどく悲しむべきことです！

北側の10部族の人々が、ソロモンの息子が王となることを拒んだ後、ヤラベアムが彼らの王となりました。ヤラベアムの王国は「イスラエル」または「北の王国」と呼ばれました。ソロモンの息子のレハベアムは、エルサレムに住んでいました。彼の王国は、「ユダ」または「南の王国」と呼ばれました。

ヤラベアムは王様になってまもなく、

嫉妬〔人をうらやみねたむこと〕の心に負けてしまい、おかしなことを始めてしまいました。彼は、何をすることに決めたのですか？列王記上 12:26-30。

そのころレビびとは、神様に言われたとおり、ほかの部族の中に入って暮らしていましたが、ヤラベアムはレビびとを彼の偶像礼拝の祭司にしようとしました。彼らがそれを断ると、ヤラベアムはどうしましたか？31節。

それからまもなく、神様に忠実であることを選んだ多くのレビびとと他の人々は、ユダへと移り住みました。そこでは、何の心配もなく神様を礼拝することができたからです。しかし、ほとんどの人々は、ヤラベアムの国にとどまり、ヤラベアムが偶像を建てた場所で偶像を拝んだのでした。

考えてみよう：神様はこのことを悲しまれたと思いますか？神様は、10の部族から人々を救うのをあきらめたと思いますか？そんなことはありません。神様はわたしたちを愛しておられるのです。そして、人々が聖霊を永久にしりぞけ、自分たちのまちがった選びを正すことを拒まないかぎり、神様があきらめることは絶対にありません。ソロモンのことを覚えていますか？神様は彼のことを見放しましたか？

月曜日

ヤラベアムが死ぬと、北の王国イスラエルの状態は、なにもかもが悪くなる一方でした。どの王も前と同じように悪いか、さらにひどい王もいました。神様を愛して十戒を守る人など、もうほとんどいないようでした。

何人かの悪い支配者たちのあとに、アハブがイスラエルの王となりました。彼はどのような人物でしたか？列王記上16:30。

アハブは悪い人でしたが、結婚した相手もまた悪い女でした。神様を憎み、バアルを拝んでいました。彼女は、首都のサマリアにバアルの神殿を建てさせました。国中のいたるところで、人々は異教の偶像を拝んでいました。まるで、そこにはもう神様に忠実な人がひとりもいないかのようでした。

けれども、神様はあきらめておられませんでした。神様は、神様のために働いてくれる、ぴったりの人物をご存じでした。その人の名はエリヤといい、ヨルダン川の東の山々に住む、神様に忠実な預言者のひとりです。エリヤに対する神様の計画は、神の民を「目覚めさせる」ことでした。

信仰深いエリヤは、人々がますます偶像礼拝におちいっていくのを見て、ひじょうに悲しみ、また悩みました。神様の警告に注意を払う人はだれもいません。エリヤは、神様がどうにかして人々の中から何人かでも救ってくださるよう、心から願いました。

時がくると、神様はエリヤにご自分の計画をお話しになりました。それは、アハブ王のところへ行き、神様がこれからしようとすることを彼に告げよ、というものでした。

エリヤは、この計画がアハブと彼の悪い妻をはげしく怒らせ、そのために自分は殺されるかもしれないと思いました。でも、神様に信頼していたので、こわくはありませんでした。

考えてみよう：神様は今でも、神様のために勇敢でいられる男の人や女の人、男の子や女の子を必要としておられますか？あなたも、神様から必要とされる人になりたいですか？

火曜日

エリヤは、バアルを拝む人々が、雨やつゆや日光を与えるのはバアルの神だと信じているのを知っていました。彼らは、天におられる神様だけが、自然界を動かす力があることを信じませんでした。なんと愚かな人たちでしょう！彼らは、太陽や雨やつゆを創造されたのが神様であることを知らなかったのです。

そして神様は、アハブの王国のどこにおいても、雨やつゆを降らせないようにすることがおできになりました。これが、神様がこれからなさろうとする恐ろしいことであり、エリヤはこのことをアハブに告げなくてはなりませんでした。

王に神さまのお告げを伝えようとサマリアへ向かって歩いていたエリヤは、みどりの草原と美しい花々、みどりの木々が生い茂る森、さらさらと流れる小川に目をやりました。もうすぐすべてが、まるでちがう景色になってしまうことを考えました。

ついに、サマリアへとやってきました。王の宮殿に着いたエリヤは、門番の前を通り過ぎ、まっすぐ王様のいるところへ歩いていきました。勝手に入ってきたことをあやまることもせず、エリヤは神様からのメッセージを王に伝えました。**列王記上17:1**。

話し終えるとすぐに、くるりと向きを変え、外へ出て門番の前を通り過ぎ、行ってしまいました。王様は、あっけにとられてしまいました。あまりにもとつぜんのことだったからです。アハブが何も言わないうちに、エリヤは出ていってしまいました。いったい、あの男はどこから来たのだろう？どうやってこの宮殿に入ってきたのだろうか？どうして王に向かって、あれほど大胆なことが言えたのだろう？

王様の質問に答えられる者は、ひとりもいませんでした。エリヤがどうやって門番をすりぬけてきたのかも、また、宮殿をあとにしてどこへ行ったのかも、だれも知りませんでした。

考えてみよう：神様がエリヤにやるように命じたことは、ふつうの人にはとてもできそうにもないようなことでした。これほどのことを実行するには、たくさんの勇気が必要でしたか？わたしたちが神様にしたがい、十戒を守る決心をするとき、神様は、それをする勇気をわたしたちに与えることがおできになりますか？

水曜日

宮殿を去るとき、エリヤは、神様が次にしてほしいことが何であるかを知りませんでした。しかし、確かなことがふたつありました。アハブと妻のイゼベルが怒っていることと、ふたりがエリヤを

殺そうとすることです。しかし、神様はエリヤを守ってくださいます。

たしかに神様は、エリヤが宮殿を出ると、次にどこへ行って何をするべきかを教えてくださいました。列王記上 17:3-5。

神様は、すべてのことを考えてくださっていました。エリヤは安全な場所にかくされ、毎日、食べ物と水も与えられました。まもなく、すべて神様が言われたとおりになっていることが、はっきりわかってきました。くる日も来る日も、また何週間たっても、一滴の雨すら降らないばかりか、わずかの露すらおりません。それはまるで、天のとびらが大きなカギで閉じられたかのようでした。

しばらくすると、緑の草原は茶色に変わり、木々の葉っぱは枯れ落ち、風が吹くたびにほこりがまい上がるようになりました。エリヤが飲んでいた小川の水もどんどんへっていき、しまいにはちょろちょろと流れるだけになりました。カラスは毎日せっせと食べ物を運んできてくれました。そして、ついに小川はどうなりましたか？ 7 節。

それでも、エリヤは心配などしません。神様が面倒を見てくださっていることを知っていましたから。次に神様は、エリヤに何をするよう、お命じになりましたか？ 8,9 節。

町に着いてみると、神様が言っておられたとおり、やもめの女の人がいたので、こわがらせないように優しく話しかけてみました。10,11 節。

やもめの女の人は、イスラエルの神様が真の神様であることをすでに信じていました。彼女はいつでも、旅人には親切にしていました。エリヤに対しても、正直に話しました。12 節。

エリヤは、なんと言いましたか？また、食べ物が残り少ないときに、女の人はどうやって神様への信頼をあらわしましたか？ 13-16 節。

考えてみよう：このやもめの女の人が神様に信頼することを選び、持っているわずかな食料を分け与えたことで、彼女は３人の命を救ったのでした！その３人とは、だれのことですか？分け与える行為は、今でも神様

に喜ばれますか？

木曜日

エリヤがこの親切なやもめの家にとまっていたある日、とても悲しいできごとが起こりました。彼女の幼い息子が重い病気にかかって、死んでしまったのです。やもめの女の人は、深い悲しみにおそわれました。エリヤも悲しみました。神様は彼らのために毎日すばらしい奇跡を起こしてくださり、そのおかげで３人は大変な飢きん（農作物がとれないために食物が足りなくなること）を生き延びることができました。ところが、この家の男の子が、死んでしまったのです。

やもめの女の人は、おそらく自分が過去におかした悪いことのために、神様が自分に罰を与えたのだろうと思いました。エリヤは、神様がそのようなお方でないことを知っていました。預言者は、母親のうでに抱かれていた男の子を自分のうでに抱き、それから自分の部屋に運んで、そっとベッドにおきました。それから、神様が奇跡を起こして、男の子にふたたび命を与えてくださるようお祈りしました。

はじめのうちは、何も起こりませんでした。それでもエリヤは祈りつづけました。すると、男の子の目が開きました。おそらく彼は、たった今、目覚めたかのようにあくびをしたことでしょう。また、なぜ自分がエリヤの部屋にいるのか、ふしぎに思ったかもしれません。エリヤは、このすばらしい奇跡を神様に感謝しました。少年を抱き上げて、ふたたび一階にいる母親のところへ運んでいくときのエリヤは、ほほえんでいたにちがいありません。**列王記上 17:22,23**。

やもめの女の人は、以前から神様に信頼してはいましたが、今はこれまで以上に神様を愛し、信頼しています。また彼女は、エリヤが本当に神様のしもべであることがわかりました。**24節**。

考えてみよう：近い将来、イエス様が、墓の中に眠っている多くのこどもや大人たちを呼んで、もう起きる時間ですよ、と言われる時がやってきます。その時の光景を想像するだけで、わくわくしてきませんか？

金曜日

エリヤが預言したとおりに雨が降らなくなるなんて、イスラエルのだれも信じてはいませんでした。バアルの祭司たちはみんなに、バアルが雨やつゆや太陽を支配しているから心配はいらない、と言っていました。また、エリヤが起こると言ったことは、かならずバアルがくいとめるから、もうじき、エリヤの神よりもバ

アルがはるかに強いことが分かるだろうといって、得意になっていました。

しばらくのあいだは、だれも心配していませんでした。ところが何日か過ぎ、何週間かすぎ、それから何か月もたちました。次の年になりましたが、まだ雨はふりません。

ここまで雨が降らないと、みんな心配になってきました。悪い祭司たちは、あわてふためいています。彼らは声をはり上げて祈り、次々に犠牲をバアルへささげています。しかし、何ひとつ変わりませんでした。

3年目に入るころには、草は枯れはて、木々は裸になり、食べ物はどんどん残り少なくなっていきました。人間も動物たちも、おなかがすいて死にそうです。あのイゼベルは、カンカンに怒っています！そして、これまで以上に神様を憎んでいます。彼女は、神様の預言者をさがしだし、かたっぱしから殺していきました。

イゼベルもアハブもバアルの祭司たちも、このひどい災いは、すべてエリヤのせいだと信じて疑いませんでした。彼らから悪口を聞かされていたイスラエルの人たちも、エリヤのせいだと思っていました！エリヤを捕らえるために、アハブはあちらこちらに兵隊をおくっていました。その上、外国の王様たちに、エリヤを見つけたらすぐに知らせるよう、約束までさせていました。アハブと悪い妻は、どれほどエリヤを殺したいと思っていたことでしょう！今起こっている災いは、実は自分たちのせいだということを、だれもわかっていないようでした。そしてなおも、必要な雨をバアルが降らせて、自分たちを救ってくれると信じていたのです。

考えてみよう：飢きんが起こることを神様がゆるされたのは、なぜだと思いますか？あなたは今までに、服従するべきことを思い出させるために、罰を受けたことがありますか？そのような経験があれば、ひとつ話してみてください。

もっと学ぼう！

★列王記上 12:26-33;16:29-34;17:1-24

★国と指導者 7章-10章（p. 106まで）

トウモロコシ畑での幻

『少女エレン』よりエイミー・シェラード編

刻々と時がすぎていきます。夜中の12時になるまで、再臨を待ち望む信者〔アドベンチスト〕たちは、イエス様がかならずおいでになると信じていました。ところが、イエス様は現れませんでした。ああ、彼らはどれだけ失望したことでしょう！エレンと家族の人たちは、悲しくてつらくて、いっぱい泣きました。いったい、何がまちがっていたのだろう？イエス様はなぜ来られなかったのだろうか？聖書が語る事はいつでも正しいはずだし、イエス様はどんなときも約束を守って下さるはずではなかったのだろうか？

Little Folk Visuals

こうなった今、彼らは家へ帰って仕事をし、もとの生活にもどらなくてはなりませんでした。そして、イエス様の再臨を信じていなかった人々は、彼らのことをばかにして、笑いものにしました。

失望した人たちの多くは、もう聖書なんか信じないと心に決めました。またその中のある人たちは、イエス様が来られなかったことをひそかに喜んでいました。なぜなら、この世のものを愛していたからです。しかしある人たちは、自分たちが何かまちがいをしたにちがいないと考えて、これまで以上に祈り、聖書の研究をつづけようと決心したのでした。

失望した日の翌日、ハイラム・エドソンという再臨信徒のひとりが、友人と話をしながら歩いていました。「他の友だちともいっしょに聖書を勉強して、祈ろうじゃないか」と彼は言いました。

ふたりは、トウモロコシ畑の中をとおっていきました。そうすれば、自分たちのことをばかにする人たちに会わなくてすみますから。

歩いていると、ハイラムはとつぜん立ち止まって空を見上げました。天の聖所のことが心にうかんだのです。「清められる」とイエス様が話されたのは、もしやこの聖所のことだったのだろうか？そうだとしたら、この世界が聖所であるという考えはまちがっていたことになる。この思いつきはイエス様から与えられたものであると確信したハイラムは、他の再臨信徒たちにその事を話しました。

話を聞いた人たちは、はじめのうち

は、なぜ天の聖所にあるものが清められる必要があるのか分かりませんでした。しかし、研究を進めていくうちに、モーセが建てた聖所とこの地上の聖所で祭司が行ったことのすべては、わたしたちに、天の聖所について理解させるためであったことが分かってきました。

聖所へ行った理由は、イエス様が自分たちの身代わりとなって死に、罪をゆるしてくださることを心から信じる者が、その信仰をあらわすためでした。罪を告白し、小羊を犠牲としてささげることで、人々はイエス様の犠牲への信頼をあらわしたのです。ハイラムと友人たちは、そのことを知っていました。小羊の血が聖所の中へ持ちこまれるというのは、罪人の罪がそこに持ちこまれることをあらわしていました。そして、毎年1回、あがないの日と呼ばれる特別な日がありました。この日の儀式は、神様に忠実な人々の罪の記録がとりのぞかれることにより、天の聖所が清められることをあらわしていました。

熱心な研究のすえ、1844年10月22日という日付は正しかったものの、その日に起こる出来事についてまちがいがあったことがわかりました。その日、イエス様は地上に来られるのではなく、天の至聖所に入られ、そこにある記録にもとづいて人々のさばきを始められたのでした。自分の罪を告白し、イエス様にしたがうことを選んだ人々は、イエス様が来られるときに天国へつれて行かれて、そこで永遠に彼と暮らすのです。黙示録14章6,7節。

再臨信徒たちは、イエス様の弟子たちのことを思い出しました。イエス様が王となられることを信じてうたがわなかった弟子たちは、彼が死んだときにどれほど失望したことでしょう。この弟子たちのように、再臨信徒たちも預言を理解していなかったのです。まさにわたしたちは今、あがないの日、つまり天の聖所の至聖所にある記録にもとづいてすべての人がさばかれる時代に生きています。イエス様がこの世界に来られると再臨信徒たちが考えていたその日から、さばきは始まっているのです。ダニエル7章9,10節。

今や彼らは、さばきが終了したときイエス様にお会いする準備ができているように、世の人々に警告のメッセージを伝えなくてはなりません。そこでイエス様は、エレンにひとつの幻をおあたえになりました。この幻は、時がきてイエス様といっしょに天国へ行くためには、どのように準備をすればよいのかを、昔の再臨信徒やわたしたちに理解させる助けとなるものです。

（つづく）

第8章
カルメル山の対決

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、
あなたはわたしをあがめるであろう。」
—詩編 50:15

日曜日

まだ、雨はふりません！1滴もふりません！みんなが、これはエリヤのせいだと思っています。悪人アハブとイゼベルはエリヤを殺そうと、あちらこちらへ人をつかわしました。しかしエリヤは、ひとりの親切なやもめの家に、安全にかくまわれていました。

そんなある日、神様はエリヤに、ご計画の次の段階にうつる時期がきたことをお告げになりました。そこでエリヤはやもめの家を去って、サマリヤへのほこりだらけの道をくだり始めました。ちょうどそのころ、アハブと家来のオバデヤは、王の家畜たちにやる水をさがすために出かけていました。列王記上 18:1-5。

オバデヤは善良な人でした。彼は、悪い王妃イゼベルに命をねらわれていた、100人の預言者の命を救いました。今、オバデヤとアハブは、どうやって水をさがそうか、方法を考えています。そしてオバデヤは、エリヤが下っていったのと同じ道

だと知らずに、そこを歩いていました。6節。

エリヤにばったり出会ったとき、オバデヤがどれだけおどろいたか想像してみてください！それは信じられないことでした。また、エリヤが言ったことは、オバデヤをこわがらせました。7,8節。

エリヤの言うとおりに行動して、本当に

大丈夫なのでしょうか？オバデヤがアハブをつれてもどってきても、もしエリヤがそこからいなくなってしまっていたら、アハブはオバデヤを殺すに決まっています。しかし、どこにも行かないとエリヤが約束したので、オバデヤは王をつれにいきました。16節。

エリヤが会いたがっていることをアハブに伝えると、こんどはアハブのほうがびっくりしました。そして、急にこわくなってきました。もしや、これから何かもっと大変なことが起こる、とエリヤに言われるのではないだろうか？兵士たちといっしょにエリヤのところへ向かう間、何を言おうかと考えていましたが、言うべき言葉はほとんど思いつきませんでした。

考えてみよう：アハブが、あらゆる手をつくして自分を殺そうとしていることが分かっていても、エリヤがこれほど勇敢でいることができたのはなぜですか？

月曜日

オバデヤに案内されて、アハブ王がエリヤのところにやってきました。今、ふたりは互いに向き合って立っています。アハブはおびえていました。王の兵士たちは、なぜエリヤを殺せとの命令を下さないのか、ふしぎに思ったことでしょう。あれほどさがしていたエリヤを見つけた王は、預言者に向かってなんと言いましたか？そして、エリヤはなんと答えましたか？あなただったら、そのときにエリヤが言ったことを言えるぐらい、勇敢でいられたでしょうか？列王記上 18:17,18。

エリヤはすぐに返事をしましたが、まるで彼のほうが王様のようでした。それから自分がしようとしていることを王に告げましたが、アハブはそれに逆らうことができませんでした。19,20節。

アハブはただちに、カルメル山に集まるよう、国中の人々に知らせを送りました。そこにエリヤが現れたら、何かすごいことが起こるだろうと、だれもが思いました。そこには、何百人ものバアルの預言者もやってくるのです。これから起こることを少しも見逃したくなかったので、人々は早めにカルメル山にやってきて、よく見えるところに場所をかまえました。

山の頂上には、バアルを礼拝するための祭壇がいくつもありました。またそこには、かつて天の神様に犠牲をささげていた祭壇が、ひとつだけありました。それは、長いあいだ使われていなかったため、こわれて今にもくずれそうになっていました。

エリヤは進みでて、力強いすみきった声で語りかけました。人々は静かに聞いていました。カルメル山に集まった人たちの中で、神様の側につくことを表明していたのは、エリヤだけでした。そして今、集まった全員がどちらの側につくかを決める時が近づいていました。エリヤは何と言いましたか？21,22節。

考えてみよう：あの日、あの場所で神様に忠実だったのは、エリヤひとりだけでした。あなたは今までに、他のこどもたちみんなが何か悪いことをしている中で、自分

だけはしないという選びをしたため仲間はずれにされ、ひとりぼっちになったことはありますか？そんなとき、神様はあなたと共におられますか？

火曜日

カルメル山にやって来たすべての人が、興奮しています。どちらの神が強いのか、どうやって決めればよいのでしょう？公平なルールにもとづいて、決定しなくてはいけません。エリヤからそのルールを聞いた人々はみな、それは公平であるといって賛成しました。列王記上 18:23,24。

エリヤはバアルの預言者たちに、先に犠牲をささげるようにと言いました。バアルの預言者たちは、エリヤの言葉にしたがいました。25,26 節。

エリヤは注意ぶかく見守っていました。一瞬も目をはなさないようにしていました。これらの悪い祭司たちは、チャンスがあれば自分たちで祭壇の下に火をつけることを知っていたからです。でも今回は、みんなが見ています。

対決は、朝早くに始まりました。何時間かが過ぎ、祭壇のそばで飛んだりはねたりして、バアルに聞こえるように祈る祭司たちは、ますます狂ったようになっていきます。お昼ごろになると、エリヤは見まもりつづけながら、彼らをからかいました。27,28 節。

時間がたつにつれて、事態はますますひどくなっていきます。まもなく祭司たちは血だらけになり、その血は地面に飛びちっていました。しかし、それでもまだ天から火を降らせることができませんし、こっそり犠牲の供え物に火をつけることもできませんでした。とうとう祭司たちは、これ以上つづける意味がないことがわかりました。もうくたくたで動けなくなり、失望と怒りのうちに、あきらめたのでした。29 節。

さあ、次はエリヤの番です。こんどは、どんなことが起こりましたか？

考えてみよう：この日、どんな天使がそこにいたと思いますか？わたしたちが選びをするときにはいつも、どんな天使がそばにいますか？そのことを覚えておく必要がありますか？

水曜日

カルメル山の対決は、いよいよクライマックスです。こんどはエリヤの番です。人々を近くに呼び寄せたあと、エリヤが最初にしたことは何でしたか？列王記上 18:30,31。

エリヤは、犠牲の供え物の準備をすませました。それからあることをしましたが、それは、バアルの祭司たちがしなかったことです。何をしたのですか？33-35 節。

いったいどこにそれほどたくさんの水があったのか、ふしぎに思いませんか？実は、カルメル山の近くには海があって、塩水ならいくらでもくんでくることができました。

すべての用意がととのいました。それは、ちょうど夕方の犠牲をささげる時刻で

した。みんなが静まりかえっている中で、エリヤは祭壇のそばにひざまずき、心を低くして神様と語りました。バアルの祭司たちが1日中おこなっていたやりかたとは、なんというちがいでしょうか！エリヤが祈り終えると、何が起きましたか？36-38節。

炎が稲光のように、天から下ってきました。犠牲も水も、そして祭壇の石さえも、すべて焼きつくされ、なくなってしまいました。人々はこわくなりました。地面にひれふし、顔をおおい、この火が自分たちをも滅ぼしてしまうのではないかと恐れています。この時、みんなは何をみとめましたか？39節。

エリヤは、ひとときもむだにしませんでした。そこにいた人々は、「主こそ神である！」と口々に言いました。けれども、バアルの祭司たちはちがいました。彼らは、天の神様のことをみとめなかったのです。このような祭司たちを生かしておいたら、ふたたび人々を誘惑して、バアル礼拝へと導くことでしょう。エリヤはただちに、何をするように命じましたか？40節。

さあ、これでいよいよ雨がふるかもしれません。

考えてみよう：ご自分の民を目覚めさせる神さまの計画は、うまくいきましたね？エリヤが信頼して従いつづけたことを、あなたはうれしく思いますか？神様は今日でも、ご自分の民がサタンにしたがう道へと行かないように引き止め、彼らが神様の道にもどる選びができるように手助けする、エリヤのような人々を必要としておられると思いますか？

木曜日

空にはまだ、ひとかけらの雲もありません。これまでとまったく変わらず、暑くて、空気はからからで、ほこりっぽいのです。しかし、エリヤは自分の役割をはたしました。こんどは、神様がご自分の役割をはたされる時で、エリヤは神様が必ずそうなさることを知っていました。彼は、アハブに何をするように言いましたか？列王記上18:41。

アハブは食事をしていましたが、エリヤは食べ物のことすら頭にありませんでした。もうそろそろ雨が降ることを、エリヤは知っていました。彼は何をしましたか？42節。

そのほんの少し前まで、エリヤの祈りに答えて下ってきた火を見た人々は、「ひれふして」いました。今は、エリヤがひざ

の間に顔をうずめて、心を低くして神様に祈っています。こんどは、雨を降らせてくださいという祈りです。しばらくしてから、彼はしもべに何をいいつけましたか？ 43 節。

エリヤは、祈ってはしもべに空を見に行かせ、祈っては見に行かせることをつづけていました。もどってくるたびに、しもべの答えは同じでした。「雲は見えません」と。そして、そのたびに、エリヤはまた祈るのでした。「どうか、雨を降らせてください」と。彼は、神様が自分を特別大きな働きに用いておられることを知っていました。しかし自分自身には、まったく何の力もないことも自覚していました。そして祈りつづけていると、自分がますます価値のない者に思えてくるのです。しもべが 7 回見てくるまでには、エリヤは自分がまったく価値のない者で、神様がすべてだと感じていました。すると、こんどは何が起きましたか？ 44 節。

エリヤは、神様が彼の祈りに答えてくださったことが分かりました。なんと、嵐がやってきます！雨があまりにもはげしかったので、アハブは前がよく見えませんでした。エズレルの家までは 30 キロもあります。エリヤはアハブに何をしてあげましたか？たとえ自分を憎む敵であったとしても、エリヤは支配者に敬意をあらわすという、すばらしい模範を示しました！ 45,46 節。

考えてみよう：しもべが空に見た雲は大きかったですか、それとも小さかったですか？エリヤの信仰はどうでしょう。大きかったですか、それとも小さかったですか？わたしたちが神様に信頼をおくことを学ぶなら、信仰は大きくなりますか？

金曜日

アハブの馬車は、エズレルの都の門をとおりぬけ、宮殿へと進んで行きましたが、エリヤは都の城壁の外で待つことにしました。エリヤは外とうにくるまって地べたに横たわり、すぐに眠りにおちました。いっぽう宮殿の中では、その日の出来事をアハブがイゼベルに報告しました。話を聞いていた彼女は、だんだん腹が立ってきました。バアルがどんなに無力で役に立たないかを認めるどころか、イゼベルはエリヤに対して、これまで以上にはげしく怒りました。なんとしてでもエリヤの息の根をとめてやると、彼女は決心します。

そこでイゼベルは、エリヤにメッセージを送りました。列王記上 19:1,2。

使者はおそらく、エリヤをゆすって起こさなくてはいけなかったことでしょう。ちょっとのあいだ、エリヤは訳がわからなかったかもしれません。一体自分はどこにいるんだろう?何があったのだろう?そしてとつぜん、伝言を聞いてはっとしました。このままでは殺されることが分かったエリヤは、いそいで飛び起き、しもべを起こして、命からがら逃げ出したのでした。3,4節。

これまで、神様がエリヤを守ってくださっていることは、なんどもはっきり見せられているのに、しかもその同じ日、あれほどの出来事があった後に、あのエリヤが逃げ出すなんて、おかしいとは思いませんか?神様は、同じ日の昼間そうであったように、夜のあいだも同じように頼りになるおかたではなかったのですか?もちろんそうです!

思い出してください。サタンはその日、大きな戦いにやぶれました。サタンは、アハブとイゼベル以上にエリヤを憎んでいました。ふたりと同じく、サタンもエリヤを殺したいと思っていました。彼は、エリヤがひじょうに疲れて、がっかりしているところにつけ込みました。アハブとイゼベルが何も変わっていないことは、これではっきりとわかりました。

エリヤが逃げたとき、サタンはきっと神様をばかにして、あざ笑ったことでしょう。しかしそれでも、神様はエリヤを愛しておられたでしょうか?もちろん、愛しておられました。

考えてみよう：ヤコブ 5:17 のエリヤについて書かれている、最初の部分を読んでみてください。つまり、エリヤはわたしたちのような人間だったということです。彼は、いくつもまちがいをおかしました!それでも心をつくして神様を愛し、神様も彼を愛しました。神様は、エリヤをほうっておくつもりでしたか?

もっと学ぼう！

★列王記上 18 章

★国と指導者 10 章 p. 106-12 章 p. 126

天国の幻

『少女エレン』よりエイミー・シェラード編

あの大きな失望を経験した後のことです。ある朝、エレンと友人たちで礼拝をし、祈っていました。するととつぜん、エレンは自分が高く高く空中へとひきあげられて、地球のずっと上の方に行くような感じがしました。「わたしは天国へ行くのかしら?」彼女はふしぎに思ったにちがいありません。それから、あたりをみまわしました。「再臨信徒たちはどこにいるのかしら?どこにも見当たらないわ。」

Little Folk Visuals

「もういちど、よく見てごらんなさい。もう少し上のほうですよ。」どこからか、声がしました。

よく見ると、長くてまっすぐのせまい道が、地球のはるか上にあります。そこに、再臨信徒たちがいました。イエス様が先頭におられて、道の向こうにある美しい都へと、彼らを導いておられました。

エレンは、人々のうしろにある明るく輝く光が、はるか上の方から道をてらしているのを見ました。その光のおかげで、都に向かう人々は道が見えるので、つまずいて、ころがり落ちてこの世界にもどってしまうことがありません。うしろの明るい光は、何を意味しているのでしょう?

この明るい光は、天使たちがしるした記録の書にイエス様が目をとおされる時が来ていることを、世界中の人々に知らせるためのメッセージであると、ひとりの天使が教えてくれました。

イエス様が来られると再臨信徒たちが思っていたその日は、実は、天の聖所にある至聖所での「あがないの日」の始まりでした。人類で最初に死んだアベルから始まり、再臨のときにイエス様といっしょに行く準備ができているのがだれか、イエス様が審査をし、判断します。聖書では、これを「神のさばきの時」と呼んでいます。再臨信徒たちはそれを、イエス様がわたしたちの住む世界をきれいにし、新しくするために来られる日だと考えていました。しかし、それは彼らの思いちがいでした。

天使はエレンに言いました。「もし、この道を歩く再臨信徒たちがイエス様から目をはなさないでいるなら、安全に都へとたどり着くことができるでしょう。」

エレンが見ていると、道を行く何人かの人たちは疲れてしまい、不平を言い始めました。「都は遠すぎる。すんなりそこに着けると思ったのに」と、だれかが言いました。「もう、うんざりだ!」他の人たちも不満をもらします。イエス様は、手をふって人々をはげまし、元気づけました。すると、美しい光の波が彼らの頭上でぴかっと輝きます。イエス様がそうなさると、彼に忠実な人たちは喜びました。しかしある人たちは、うしろには実際に光なんかあるわけがない、と決めつけました。彼らは、自分たちがまちがった道を歩いていると判断し、イエス様と美しい都とを見つづけるのをやめてしまいました。見るのをやめると、あの光はもはや、彼らの足下を照らすことをしませんでした。彼らはつまずいて、下の暗い邪悪な世界へところがりおちてしまいました。なんと悲しいことでしょう!彼らは、都に入るチャンスをなくしたのです。この幻の中でエレンは、忠実な人たちといっしょに、この美しい都に入ることができました。都はあまりにもすばらしく、言葉では言い表すことができませんでした。

この幻は、再臨信徒たちが失望するのをイエス様がおゆるしになったわけを、エレンに理解させる助けとなりました。あの失望のあとの選びを見れば、彼らが本当に何を愛していたのかが分かります。彼らの選びを見れば、だれが聖書のみことばに信頼していたか、だれが信頼していなかったかが分かります。聖書を研究した人々は、他にも、これまで知らなかった多くのことを学びました。昔の弟子たちのように、今や再臨信徒たちの信仰は、あの大きな失望を経験する前よりも強くなっていたのです。

他の人たちにこの幻のことを話したとき、エレンは、イエス様の助け手として自分が用いられていることに気づきました。

（つづく）

第9章

召しにこたえるエリシャ

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「あなたの若き日に、あなたの造り主を覚えよ。」
—伝道の書 12:1

日曜日

いったいどうしたというのでしょう？あれほど勇敢で恐れを知らないエリヤが、イゼベルから逃げるとは！

カルメル山でのあの日は、だれにとっても忘れられないものとなりました。そこにいたみんなが、結局バアルには何の力もないことを知りました。悪い祭司たちにも、それはわかりましたが、彼らは死んでしまいました。

そして、待ちに待った雨がふりました！あまりにもはげしく降ったので、馬車で家にもどろうとしたアハブは、前がよく見えませんでした。神様が力を与えたので、エリヤはアハブを30キロもはなれたところにある宮殿まで、走って案内しました。しばらくたって、エリヤはふたたび走っていましたが、こんどはこわくなって走っています。なぜこわがっているのでしょう？神様は、これ以上彼を守ることができなくなったのでしょうか？

エリヤはしもべをおいて、たったひとりで、あわてて逃げて行きました。走れるだけ走って、ようやく一本の木の下で立ち止まりました。その時の彼は、とても落ちこんでいました。本当のところ、死んだほうがましだと思っていました。生きていて何になるというのだろう？彼が心から望んでいたのは、アハブが勇気を出して、これからは神様を礼拝する、とイゼベルに言うことでした。ところが、そうはなりませ

んでした。これからだって、何も変わらないのです。

まもなく、彼はねむりに落ちました。だれかがエリヤの肩にそっとふれたので、ぱっと飛び起き、ふたたび走り出そうとしました。イゼベルのしもべに見つかってしまった、と思ったのです。ところが、そばにいたおかたの顔はやさしく、声はおだやかでした。その声に言われるままに飲み食いしていたエリヤでしたが、まるで夢を見ているような心地でした。列王記上 19:5,6。

考えてみよう：だれかがあなたを殺そうとしていて、しかもあなたはひとりぼっちで、とても疲れてお腹もすいていたなら、あなたもエリヤのような気持ちになるでしょうか？ところで、エリヤはひとりでしたか？もしわたしたちが神様につながることを選ぶなら、本当にひとりぼっちになることはありますか？

月曜日

エリヤは、まだ疲れていました。何十キロも走ったのですからね。そして、このすばらしい食事のあとに、彼はもういちどねむりました。それから、だれかがやさしく肩にさわったので、ふたたび目をさましました。そこには前と同じ、あの優しそうな顔がありました。列王記上 19:7。

エリヤは、またもおいしい食事をいただきました。その後、神様が奇跡を起こしてくださいました。これから、かなりの道のりを歩くことになっていました。その食事のおかげで、彼は何日間もちこたえましたか？ 8 節。

旅の終わりごろには、アハブとイゼベルからは何十キロもはなれたところにいました。ホレブとは、シナイのもうひとつの呼び名です。ずっとずっと昔、神様がエジプトから人々を安全につれ出したあとで十戒をさずけた、その場所にエリヤは来たのです。彼は今、ほら穴の中にいました。ここなら、だれからも命をねらわれる危険はありません。神様は、エリヤからひとときもはなれませんでした。神様が語りかけてこられたので、エリヤは素直に自分の気持ちを打ちあけました。9,10 節。

神様がご自分の計画をなしとげるときには、必ずしも人の興味をそそるような方法でなさるとは限らないことに、エリヤは気づく必要がありました。わたしたちは、神様が力強いお方であり、その言葉はいつでも真実であることを認めることはできます。サタンでさえ、そのことは知っています。しかし最終的には、わたしたちに語りかける声、つまり罪を犯したことを心から悲しむようにうながす、聖霊のしずかな声に耳をかたむけることを選ぶのです。わたしたちがサタンの誘惑に耳をかたむけず、神様に忠実であるように選ぶ助けをしてくださるのは、神様のしずかなみ声です。そして、それに従うことができるようにするのは、神様のみ力です。わたしたちがどんなに努力しても、ひとりでそれをなしとげることはできません。このことをわからせるために、神様はエリヤにどんなことをなさいましたか？ 11,12 節。

今、エリヤは、自分がとるにたりない者であると感じています。彼は最善をつくしたのですが、自分以外のだれも、神様にしたがう気はないのだろうと思っています。13,14節。

考えてみよう:

聖霊をとおして神様があなたの心に語りかけるとき、あなたは、この静かで愛情に満ちた声にしたがうことを学んでいますか?

火曜日

エリヤのもとへ使者が来て、イゼベルが彼を殺すつもりであることを告げた夜、彼は神様がこれまでに何度も守って下さったことをすっかり忘れてしまっていましたね?エリヤが逃げなかったとしても、神様は同じように彼を守ってくださったでしょう。人々はこれまで以上に、神様がどれほど力あるおかたであるかを知ったはずでした。そのために、カルメル山での正しい選びをつづけることができたはずでした。

エリヤは今でも神様を愛し、神様に忠実でした。そしてもちろん、神様がエリヤを愛するのをやめることは、決してありませんでした。神様はエリヤに、いつか彼の代わりに預言者となるエリシャという名の男に、油を注ぐようにと言われました。

だれかが自分の代わりに預言者になることを知って、エリヤはねたみの心に負けて、いじけてしまうかもしれませんでした。でも、エリヤはりっぱでした。彼はすぐさま、エリシャをさがしに出かけました。道を歩いて行くと、すべてのものが何週間か前とまったく変わっていました。小川は水であふれ、すべてはみどりにあふれ、ふたたび育ってきています。エリヤがエリシャを見つけたのはどこでしたか、またエリシャは何をしていましたか?列王記上 19:19。

エリシャの家族は裕福でした。彼らもまた、忠実であることが神様に認められた人々でした。エリシャは静かでおだやかな性格の持ち主でしたが、必要なときには、強い指導者にもなれるような人物でした。

エリヤがエリシャを見つけたとき、エリシャはしもべたちと畑仕事をしていました。エリヤは自分の外套をエリシャの肩にかけてから、そのまま歩きつづけました。エリシャはおどろいたにちがいありません。しかし、預言者の行動が何を意味するかがわかったので、いそいでエリヤのあとを追いました。エリシャは喜んでし

たがおうと思いましたが、その前にひとつだけ、やっておきたいことがありました。それは何でしたか？ 20 節。

エリヤの答えは、何だか変ではないですか？それがどういう意味だったのか、またエリシャがどうしたかは、明日まなびましょう。

考えてみよう：神様は、すばらしいお方ですよね？神様がエリヤを愛したように、わたしたちをも愛してくださるなんて、うれしく思いませんか？

水曜日

エリヤがエリシャに知ってほしかったのは、どちらかを選ばなくてはならないことでした。神様の召しにこたえて、残りの人生は神様のために働くか、両親と家にとどまるかのどちらかです。神様の召しにこたえることは、自分の家族と幸福に暮らすことよりも大切ですか？エリシャはどうしましたか？ 列王記上 19:21。

エリシャはエリヤよりも若く、エリヤのよき助手となりました。また優秀な弟子でもあり、いっしょに働く間にたくさんのことをまなびました。むかしサムエルが始めた預言者の学校のほとんどはなくなっていましたが、エリヤはふたたび学校をつくり始めました。

何年か共にすごしてから、ある日エリヤはエリシャをおいて、ベテルの学校へ向かおうとしました。神様から、そうするように言われたからです。神様が自分のためにどんな計画をもっておられるかは知っていましたが、エリシャや他の生徒たちも知っているのか、エリヤにはわかりませんでした。エリシャは何と言いましたか？ 列王記下 2:2,3。

同じことが、ベテルとエリコの学校でも起こりました。4,5 節。

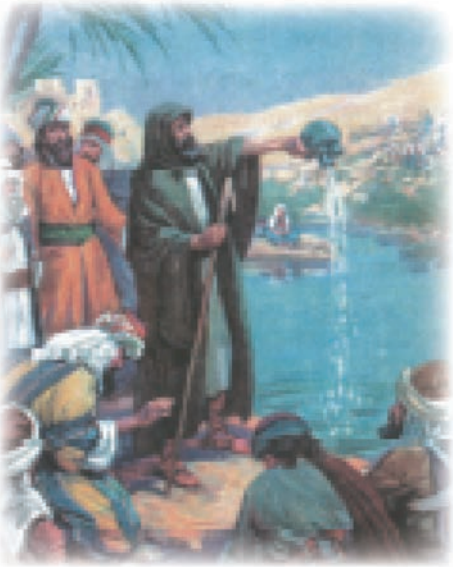
エリシャは、少しでも長く、エリヤといっしょにいたいと思っていました。自分がヨルダン川へ行っている間、エリコにとどまるようにとエリシャに言ったら、同じ答えがかえってきました。6 節。

考えてみよう：エリシャは、エリヤにも神様にも忠実でした。彼は、神様のために働くことを選んでから、ただのいちども心変わりをしたことはありませんでした。神様のために働くことをまなぶにつれて、あなたもエリシャのように神様から頼られる、忠実な人になりたいですか？

木曜日

エリコにある学校の生徒の何人かは、エリヤとエリシャがヨルダン川に向かったとき、あとからついてきました。何がおこるのかを見届けたかったのです。見届けたときに彼らがどう思ったか、想像できますか？ 列王記下 2:7,8。

それはまさに、ずっと昔、神様の民がこの川をわたってカナンの地へ入ったときに起こったのと同じようなことでした。エリヤとエリシャがかわいた川をわたりおえたあと、すぐに水がもとどおりに流れたので、生徒たちはこのふたりの預言者についていくことができませんでした。それでも、彼らは川の近くで待つことにしました。先へと歩きながら、エリヤとエリシャは何を話していましたか？ 9 節。



エリシャは、とても謙虚な〔へりくだった〕気持ちでした。自分にエリヤの代わりがつとまるだろうか？自分には、エリヤよりも神様の霊が多く必要だと感じました。エリヤは、エリシャに何と言いましたか？ 10 節。

そしてついに、エリヤは天に上げられ、いなくなってしまいました。11—12 節。

エリヤがいないのに、どうやって働きをつづけることができるだろう、とエリシャは思ったことでしょう。彼は今、ひとりぼっちです。いや、本当にそうでしょうか？ヨルダン川にもどってきたエリシャは、すぐに自分がひとりではないとわかりました。神様がそこにおられました。そこで起こったことを、だれが見ていましたか？ 13 — 15 節。

生徒たちはすぐさま、この新しい預言者に対して敬意（尊敬する気持ち）をあらわしました。それでも彼らは、本当にエリヤがいなくなってしまったのかを確かめたいと思いました。その必要はないとエリシャは言いましたが、彼らはしつこくお願いしました。おそらく神様がエリヤをどこかへ隠したのだろうと考えたのでした。16-18 節。

考えてみよう：エリヤに起こったことは、イエス様が来られるとき、生き残っている人々に起こることと似ています。モーセに起こったことは、イエス様が来られる前に亡くなる神様の民にも起こるでしょう。どちらにしても、もしわたしたちがモーセやエリヤのように神様に信頼し、したがうことを選ぶならば、また、もしわたしたちが犯した罪のゆるしを神様に求めるならば、みな、エリヤのように美しい天使の馬車に乗り、ふるさとへと帰ることができるでしょう。それはもうすぐです。あなたもその馬車に乗りたいとは思いませんか？

金曜日

エリシャはたびたび、奇跡の預言者と呼ばれてきました。神様が、彼をとおしてひじょうに多くの奇跡を行われたからです。エリヤが天に上げられたすぐ後に、ふたつのすごい奇跡が起こりました。

エリシャはしばらくの間、エリコにある学校を手伝うため、そこにとどまっていま

した。ある日のこと、この町の男たちが何人かやってきて、水の問題について話し合っていました。ここの水は悪くて飲めず、作物にかけてもよく育たないというのです。このことについて、エリシャは彼らに、何をするように言いましたか？列王記下2:20,21。

つぎにエリシャは、エリコから別の学校があるベテルへ行きました。そこへ向かう途中で、何が起きましたか？23節。

なんて、いじわるな子どもたちでしょう！エリシャのはげた頭をばかにしただけでなく、エリヤを天に上げられた神様もばかにしたのです。預言者は、このような子どもたちの行動を大目に見てはいけないことを知っていました。もしそれをゆるしておくなら、他にも彼らのまねをする者たちが現れるでしょう。24節。

もともと優しくておだやかなエリシャに対して、子どもたちが無礼で失礼な態度をとるようなことは、二度とあってはなりません。預言者として、悪を大目に見ないきびしい態度も、時には必要でした。

考えてみよう：これらの子どもたちの両親が神様と預言者をうやまっていなかったので、子どもたちにも神様をうやまうように教えていませんでした。だとしたら、神様は、もしわたしたちが敬意を表すことや、礼儀正しくすることを身につけていなければ、クマをつかわしてわたしたちに教えようとなさるのでしょうか？いいえ、そうではありませんが、今でも神様は、わたしたちの行動を見ておられます。そして、わたしたちの天使は、わたしたちが大人や神様の働き人に対して、また神様を礼拝する家において、どのようにふるまっているかを知っているでしょうか？あなたはどう思いますか？神様を礼拝する場所で神様とお話するとき、畏れと尊敬の念をもって礼儀正しくふるまうように、両親が教えてくれていることを、あなたはうれしく思いますか？

もっと学ぼう！

★列王記上 19:2; 列王記下 2章

★国と指導者 12章 p. 126-135

重い聖書を持ち上げる

『少女エレン』よりエイミー・シェラード編

あのけがのために、エレンは今でも体力が弱く、しばしば具合が悪くなることがありました。長い距離を歩くことも、重いものを運ぶこともできません。夜寝るときには、たくさんのまくらを積み上げて、すわっているような姿勢をとらないと、呼吸をすることも困難でした。しかし、イエス様は彼女に幻を示されたとき、彼女に特別な力もお与えになりました。彼女はときどき、力持ちの男ですらできないようなことをやってのけました。

Little Folk Visuals

あるとき、エレンが家族と礼拝をしている最中に、イエス様は彼女に幻をお与えになりました。彼女は立ちあがって、家族用の大きくて重い聖書がおかれているところに行きました。それは8キロほどもある聖書でしたが、彼女はそれを軽々ともちあげ、左手でもちつづけたのです。

見ていた家族のひとりは、「あんなに重い聖書を、あんなふうに長い時間もちつづけるのは、エレンにはぜったいにできないはずだわ」と言いました。

それを聞いたお母さんは、「幻をみせられていないときは、あの聖書をもちあげることすらできないのよ」と言いました。「イエス様が、特別な力をくださっているのにちがいないわ。」

エレンは30分ものあいだ、しずかに部屋を歩きまわりながら、この重い聖書を左手で持ちつづけていたのです！力持ちの男の人だって、2分以上もちつづけるのは無理でしょう！

また別のときには、大きな重い聖書を左手で頭よりも高くもちあげました。もう一方の手でページをめくり、いろいろな聖句を指さしました。それらの聖句を見ずに、天を見上げながら、エレンはそれをくりかえし声に出して読みあげました。

「エレンは、自分が指さしている箇所の聖句をわかっているのかい？くりかえし言っている聖句は、本当に指でさしているところなのだろうか？」人々はふしぎがります。

エレンの姉はいすから立ちあがって、エレンがページをめくって指をさすときに、その場所をたしかめてみました。するとまさに、エレンは自ら指さしているところを完ぺきにくりかえしているのです。しかも、まったくそこを見ていないのです。

幻のあと、エレンは幻で見せられたいくつかのことと、イエス様が彼女にお話しになったことを、部屋にいる人々に話しました。

ずっとむかし、預言者ダニエルが幻を見せられたとき、彼は息をしていませんでした (ダニエル書 10:17)。幻を見せられたエレンにも、イエス様は同じ奇跡を起こしてくださいました。彼女の心臓は動いているのに、息をしていないのです。まわりの人たちはなんどか、彼女が本当に息をしていないのか確かめてみました。そしてとうとう、それが見せかけでないことがわかりました。

エレンにとって、イエス様が彼女にお示しになったことを語るため、いろいろな場所へ出かけて行くのは、決してかんたんなことではありませんでした。内気な性格で、こわがりで、人前で話すことになれていませんでした。その上、彼女はとても体力が弱くて、ときには話そうとしても、小声でささやくぐらいしかできませんでした。それでもイエス様は、共にいて助けると約束してくださったのですから、彼女は自分のできるかぎりのことをしました。

エレンは話をする前、時々、緊張してふるえることがありました。しかし話し始めると、何もこわくなくなりました。すぐに力強くすんだ声に変わり、すべての人によく聞こえたのです。

それからまもなく、いたるところで、イエス様がエレンに与えたメッセージを聞きたいと、人々が願うようになりました。エレンが病弱だったので、姉のサラや、ある女性の友人がいつもつきそいました。当時は、自動車や飛行機がありませんでしたので、旅をするには汽車か船、または馬や小さな馬車を使いました。旅は決して心地よいものではありませんでしたが、エレンは一生けんめいでした。

（つづく）

第10章
天からの祝福

子供のための日々の
聖書研究ガイド

暗唱聖句

「子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合おうではないか。」
ーヨハネ第1の手紙 3:18

日曜日

神様は、多くの人を助けるために、エリシャをお用いになりました。ある日、大変な問題をかかえたやもめの女の人が彼をたずねてきました。エリシャは、彼女の夫とは知り合いでした。神様を愛し、預言者の学校の生徒でしたが、若くして死んでしまったのです。それで残された妻はやもめとなり、さまざまな問題が彼女にのしかかってきました。ある人からたくさんのお金をかりていて、返すお金がないのに返してほしいと言われていました。お金をかした人は、もしお金を返さなければ、ふたりの息子をとりあげて、自分の奴隷にすると言っています。彼女は不安でたまりません！列王記下 4:1。

エリシャはこの貧しいやもめの女の人をかわいそうに思い、何とか力になってあげたいと思いました。預言者は、彼女に何をたずねましたか？彼女はなんと答えましたか？2節。

そこでエリシャは、何をするように言いましたか？3,4節。

いったいどうやって、たったひとびんの油が、そこにあるすべてのつぼをいっぱいにできるというの

でしょう?しかしそれでも、やもめの女の人は家に帰り、近所の家々をまわって借りられるだけのつぼを借りてくるよう、息子たちに言いつけました。

近所の人たちは、こころよくつぼを貸してくれました。息子たちは、かりたつぼをすべて家にもってきました。それから、エリシャに言われたとおり、ドアを閉めました。息子たちは、母親がひとびんの油をとってつぼに注ぎ始めるのを、食い入るように見ていたことでしょう。すると、信じられないことが起きました!母親は次から次へとつぼに油を入れていくのですが、いつまでたっても油がなくなりません。そしてとうとう、全部のつぼがいっぱいになったのです。6節。

感謝の気持ちでいっぱいの母親は、エリシャのもとへと急ぎました。7節。

その夜、この小さな家族は、神様への感謝をあらわす特別な礼拝をささげました。借りたお金は、すべて返すことができました。ふたりの息子は、奴隷にならずにすみました。そして、残ったお金で暮らすことができたのです。

考えてみよう:この物語は、神様にできないことは何もないということを、わたしたちに教えてくれているのではないでしょうか?

月曜日

アハブが死んで、息子のヨラムがイスラエルの王となったあと、モアブの王は何をしましたか?列王記下 3:5。アハブがまだ生きていたころ、モアブの王は毎年何をしていましたか?4節。

ヨラムは、戦いの助っ人として、ユダの王とエドムの王を仲間に引き入れました。彼らは、モアブへ行くのに回り道をしようと決めたのですが、まもなく問題がおきました。どのような問題でしたか?9節。

自分たちがするべきことを教えてくれる預言者がいないかユダの王がたずねると、召使いのひとりが、エリシャの名を出しました。そこで3人の王は、助けを求めにエリシャのところへ行きました。エリシャはヨラムに、なぜアハブやイゼベルの神々を拝む預言者たちに助けを求めないのかとたずねましたが、ヨラムはただ、言い訳をするばかりでした。ヨラムは、これらの神々や預言者たちが、だれをも助けることができないのを知っていたにちがいありません。

エリシャは、ヨラムといっしょにいたユダの王が、真の神様を礼拝していることを知っていましたので、ヨラムは助けられるにふさわしい人ではありませんでしたが、彼らを助けてくださるよう神様にお祈りしました。そこで神様は、どのような奇跡を起こすとおっしゃいましたか?16-18節。

その奇跡は、いつ起こりましたか?20節。

ところが、奇跡はふたつも起きました。その朝、敵が谷底をのぞいてみると、彼らの目には水がどのように見えましたか?「やつらは、互いに殺しあったんだ」と敵は思いました。「ようし、やつらの家畜

や見つけたもの全部をちょうだいしてこようじゃないか。」しかし、彼らはまちがっていました。神様が、その日イスラエルに勝利をお与えになったのです。23,24節。

考えてみよう：わたしたちのすばらしい神様は、この時も、愛と忍耐を示してくださいましたか？

火曜日

エリシャはたびたび、あちらこちらにある預言者の学校をおとずれていました。いちど、ギルガルの学校へ行ったときのことです。おそらく、そこで授業を教えていたのでしょう。食事の時間になり、エリシャはしもべに、大きななべを持ってきて、みんなのために煮物をつくるように言いつけました。そのころ、イスラエルの地では何が起きていましたか？食べ物は、たくさんありましたか？列王記下 4:38。

なぜ、イスラエルにふたたび飢きんが起こったのかについて、聖書は何も語っていません。もしかすると神様は、イスラエルの人の多くがサタンに従っていたので、祝福したくてもできないことを人々に思い出させたかったのかもしれません。

生徒のひとりが畑に出かけて行き、煮物を作るための材料を集めてきました。彼は、ぶどうの木についた野うりの実を見つけて、おそらく喜んだことでしょう。彼は何をしましたか？39節。

今はもう、全員おなかがぺこぺこです。煮物ができあがると、すわって食べようと

しました。エリシャもそこにいて、だれもがおいしい食事を楽しみにしていました。食べ始めると、とつぜん何かが変だと気づきました。煮物は、おかしな味がします。すぐに、何か毒のあるものが入っているのだとわかりました。どんなにがっかりしたことでしょう！彼らはおなかがすいてたまらないのに、結局、食べられるものが何もありません。しかし神様は、エリシャにやるべきことを教えてくださいました。40,41節。

生徒たちはふたたび、最後の最後においしい食事が食べられるようにして下さった神様に、感謝の祈りをささげたことでしょうね。

考えてみよう：目には見えなくても、神様と天使たちがいつも自分と共にいてくれることを、エリシャは知っていました。神様と天使たちは、わたしたちのそばにもいてくれますか？あなたは、そのことをうれ

しく思いますか？

水曜日

飢きんがなおもイスラエルでつづいていたころ、エリシャはふたたび、ギルガルにある預言者の学校をおとずれました。ある日、だれかがエリシャに食べ物をもってきました。列王記下 4:42。

その人が親切心から食べ物をもってきてくれたことに、エリシャは感謝しました。彼はしもべに、その食べ物を人々に分け与えるよう言いつけましたが、ひとつ問題がありました。そこには、100 人ほどの人がいました。どう見ても、それだけの人を食べさせるのに、これだけの量では足りません。本当に、これっぽっちの食べ物でも、そこにいるみんなにくばるべきでしょうか？半分の人たちにも、きっと足りないでしょう。

それでも、エリシャの言うことは変わりません。しかも、食べ物はかならず余るから、というのです。そこで、しもべは預言者の言うとおりにしました。エリシャは正しかったですか？ 43,44 節。

このときもまた、食べ物は全員にじゅうぶん行きわたり、余ったほどでした。神様は、もしわたしたちが神様に信頼してしたがうならば、できないことは何もないことを、ふたたび示してくださったのです。

考えてみよう：ピリピ 4:19 を読んでください。この聖句は何を教えていますか？神様は、わたしたちが欲しいものや、必要なものをすべて与えてくださると言っているのでしょうか？あなたが欲しいと思うもので、必要でないものはありますか？

木曜日

エリシャは、よく旅をしました。たくさんの人を教え、助けながら、場所から場所へとわたり歩きました。

彼がよく通っていた、シュネムという町がありました。ある裕福な夫婦がそこに住んでいて、エリシャはシュネムを通るたびに、彼らの家に立ち寄りました。この夫婦には、エリシャが神様の特別なしもべであることが分かりました。彼らはエリシャが来るのをとても楽しみにしていて、彼のためにいつもおいしい食事を用意しました。

ある日、妻はある思いつきを夫に話します。それは何でしたか？列王記下 4:9,10。

夫も賛成してくれました。完成した客室はとても心地よく、すてきなお部屋でした。エリシャは、自分のための部屋をとても感謝しました。

ある旅の途中、エリシャはその部屋で休みながら、この夫婦の親切について考えていました。また彼らに、どうやって感謝の気持ちをあらわしたらよいか、思いめぐらしていました。エリシャはしもべのゲハジを呼び、その家の女の人と話をして、彼女が特別に欲しいものは何かを聞き出してほしいと言いました。

ゲハジは女の人に、エリシャが彼女に何かしてあげたいと考えていることを告げましたが、彼女は何も思いつきませんでした。その後、ゲハジはどんな提案をしましたか？ 14 節。

当時、子供をもつことは、とても重要なことでした。しかしこの女の人は、もう赤ん坊を産むのぞみを捨ててしまっていました。エリシャは、これこそが彼女のためにできる一番すばらしいことだとわかったのです。女の人に向かって、彼女が 1 年のうちに子供を産むことを告げたとき、彼女にはとうてい信じられませんでした。ところがなんと、預言者の言葉どおりになりました。かけがえのない、かわいい男の子がうまれたのです。

考えてみよう：「おもてなし」は、とても大事な言葉です。それは、思いやりと親しみをもって、人の役に立つことです。この世の中で人々は、せわしく、しばしば自分中心で、礼儀知らずで、思いやりがたりません。神様はわたしたちに、親切なもてなしと思いやりを他の人々にあらわすよう、のぞんでおられます。イエス様は子どもだったころ、あまり食べ物がないときでも、しばしば人々にわけてあげました。

金曜日

エリシャの約束どおり、部屋を作ってくれたこの親切なふたりには、男の子がうまれました。この子が大きくなったある日、父親と畑へ出かけました。何が起こったのかくわしくはわかりませんが、朝のうちに子どもの具合はとてもわるくなり、しもべのひとりが彼を家へつれて帰りました。母親は、男の子をひざの上に寝かせましたが、ひどく心配だったにちがいありません。しかし、看病のかいもなく、お昼前にはどうなりましたか？ 列王記下 4:18-20。

こんなおそろしいことが、これほど急に起きるなんてことがあるでしょうか？神様はなぜ大切な子どもを与えておいて、死なせるのでしょうか？

今できることはただひとつ、1 分たりとも無駄にしないで、エリシャをさがしに行くことでした。長い旅になりそうでしたが、そんなことは気になりません。27-30 節。

ゲハジは道をいそぎました。シュネムの家に着くと、エリシャに言われたとおりのことをしましたが、何も起こりません。彼はエリシャにそのことを言おうと、大急ぎでもどりました。

ようやく到着したエリシャは、すぐに自分のためにつくられた部屋へあがりまし

た。彼のベッドには、あの愛らしい男の子が横たわっています。もう死んでいるのです！エリシャは、ひとりきりで神様と話す必要がありました。そして、神様は彼の祈りを聞いてくださいました。男の子はとつぜん、大きく息をすいこんで、くしゃみをしたのです。しかも、いちどだけではありません！７回もくしゃみをしたのです。それから男の子は目をあけて、あたりを見回しました。もう頭はいたくありません。すっかりよくなったのです。

ゲハジが、すぐに母親を呼んできました。母親もずっと祈っていたと思いますか？部屋へ来るように呼ばれた彼女は、走ってきました。36,37節。

***考えてみよう：**あなたは、ハッピーエンドの物語が好きですか？だれでも好きですよね。神様がエリシャの祈りを聞いてくださって、本当によかったですね。しかし、この男の子は、そのあと永遠に生きつづけたでしょうか？いいえ、そうではありません。もちろん彼も、年をとってから死にました。ほとんどの場合、大人でも子どもでも、いちど眠りについたら〔死んだら〕、そのまま眠らせておくのが最善であることを、神様はご存じなのです。けれども神様を愛し、神様に信頼して従ったすべての人たちには、ハッピーエンドがあるのです。いつの日か神様は、ながく眠っている彼らを目覚めさせ、永遠に生きる者として下さることを、いつも覚えているようにしましょう！*

もっと学ぼう！

★列王記上４章
★国と指導者 p. 204-211

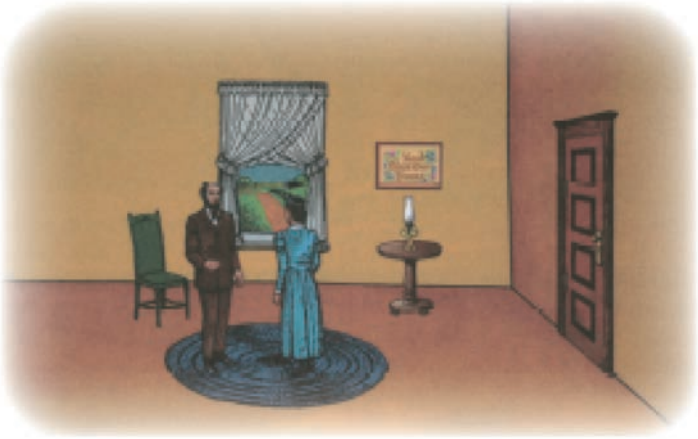
お話しひろば

嵐の中でイエスに信頼する

『少女エレン』よりエイミー・シェラード編

再臨信徒たちは、イエス様が天の聖所にある至聖所での働きを終えられるのは、そう遠くないだろうと考えていました。至聖所での働きを終えられたら、イエス様は約束どおり雲に乗ってこられるのです。

しかし、信者たちは聖書を勉強してはいましたが、イエス様の再臨の前に起こるだろうと預言者らが語ったことの多くを、まだ学んでいませんでした。ひとつには、イエス様が来られるというよい知らせ、そしてイエス様のおいでにどうやって備えるか。世の終わりがやってくる前に、そういったことを全世界に伝えなければなりません。マタイ 24:14。



Little Folk Visuals

再臨信徒たちを助けるための預言者として、イエス様はエレンをお選びになりました。ですからサタンは、エレンがイエス様から与えられたメッセージを広めようとするのを、いつもじゃましようとしました。

あるときエレンは、ひどくのどが痛んで、それが何日もつづきました。声はしわがれてしまい、ささやくことすらほとんどできませんでした。それなのに、もうすぐ集会でお話をしなくてはいけないのです。「どうしよう?」エレンは心の中でさけびました。しかし、それでも集会に行くことに決め、イエス様にすべて任せることにしました。話し始めたら、ささやくぐらいの声しかでませんでした。ところが数分のうちに、彼女の声は、はっきり力強くなってきました。もうすっかり、のどの痛みは消え、2時間近くも語りつづけたのです。イエス様が奇跡を起こしてくださったので、人々はイエス様からのメッセージを聞くことができました。

エレンが各地を旅してまわっていると、時々、若い男の人たちが彼女のお供をして、お世話を手伝いたいと申し出ることがありました。しかしエレンは、ていねいに断りました。彼女が安心していっしょに旅することができるのは、ひとりの男性だけでした。彼はエレンが出会った若い働き

人で、名前をジェームス・ホワイトといいます。再臨信徒たちにメッセージを伝えるために、いろいろな場所へ行った経験のある人でした。

エレンとジェームスは、お互いをよく知るようになるにつれて、いっしょに話したり祈ったりするようになりました。イエス様がみちびいておられるのをふたりとも知っていましたし、イエス様のご計画にしたがう決心をしたいと願っていました。いつしか心から愛し合うようになり、それがイエス様ののぞんでおられることだと確信したとき、ふたりは結婚しました。こうして、エレン・ハーモンはエレン・ホワイトとなったのです。

夫から愛されているという幸福感と安心感にひたりながら、エレンはこれまで以上に神さまのための働きに精を出しました。ジェームスも、イエス様が与えてくださった体の弱い妻をささえるために、これまで以上にがんばりました。夫婦となったふたりは、ともに各地をめぐって旅をつづけます。しばしば彼らは、馬や馬車に乗って旅をしました。遠い場所へ行くときには、汽車に乗ることもありました。また時には、船に乗ることもありました。

あるとき、船で旅をしていると、ひどい嵐にあいました。風はもうれつに吹き荒れ、波は高くうねっています。船は右へ左へとはげしくゆれ、波は窓をつきやぶって中へ入ってきます。「船がしずむぞ!」乗客たちが叫びます。「もう二度と、陸にはたどりつけない!」

おおぜいの人たちが、泣き叫んでいます。ひざまずいて、ひっしで神様に祈っている人たちもいました。

ひとりの女性が、「あなたは怖くないのですか?」とエレンにたずねました。「わたしたち全員、おぼれ死んでしまうかもしれないことが、お分かりですか?」

「怖くはありません」とエレンは答えました。「神様は、嵐のこともすべてご存じですから。神様は、わたしたちを安全に陸へと導くこともできるのです。」エレンはこう言って、おびえている女性を安心させようとしました。

たしかに神様は、この船を安全に陸へと導いてくださいました。乗客も船長も、またエレンもジェームスも感謝をささげました。サタンが彼らを滅ぼすことがないように、イエス様が守ってくださったことを、みんなは知ったのでした。

（つづく）

第11章

忠実な奴隷

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「子をその行くべき道に従って教えよ。そうすれば年老いても、それを離れることがない。」
一箴言 22:6

日曜日

この女の子の名前は知りませんので、とりあえず、小さなお手伝いさんと呼ぶことにしましょう。彼女の両親はイスラエルに住んでいて、神様に忠実な人たちでした。この小さなお手伝いさんが生まれたときから、両親はこの子に、心をつくして神様を愛し、神様に信頼することを教えました。この子も両親もエリシャのことを知っていて、おそらく母親が、エリシャが人々を助けた話や、彼をとおしてなされた神様の数々のすばらしい奇跡について、語りきかせていたのでしょう。

小さなお手伝いさんは、心をつくして神様を愛していました。彼女は、生きているかぎり何が起ころうとも、神様に信頼することを決心していました。そして一生のうちに、いろいろなたくさんのことが、彼女に起ころうとしていました!

シリア王国は、小さなお手伝いさんのふるさとであるイスラエル王国のとなりにあり、これら２つの国は敵対していました。シリア人がイスラエルの町のひとつをうばいとったとき、アハブ王はそれを取り返そうと戦いましたが、イスラエルは戦いにやぶれ、アハブは命をおとしました。その時から、イスラエルのだれも予期しないときに、シリアの兵隊がイスラエルをおそってくるようになりました。そのようなときに、小さなお手伝いさんは、シリアへとさらわれていったのでした。彼女は、どんなにこわい思いをしたことでしょう!また彼女の

両親は、どれほど悲しんだことでしょう！

もしかすると小さなお手伝いさんは、エジプトにつれて行かれたヨセフのことを思い出していたかもしれません。実際にいま、ヨセフのように決断をしなくてはいけません。彼女は神様を愛し、神様に信頼しつづけるでしょうか？心は悲しみでいっぱいでしたが、彼女はヨセフと同じ選びをしました。この先何が起ころうとも、神様を愛し、神様に信頼し、従いつづけるのです。

考えてみよう：シリア人にさらわれ、愛する両親と家からひき離されたとき、小さなお手伝いさんが何才だったかは分かりません。あなたと同じぐらいの年だったかもしれませんね。あなたはもう、彼女と同じ選びをしていますか？

月曜日

小さなお手伝いさんは、シリアの兵隊に捕まってしまいました。そして、ダマスカスという、シリアの王が住む町につれていかれました。そこでヨセフのように、あるえらい人の家の奴隷となったのです。その人はナアマンという将軍で、王の軍隊の指揮官でした。列王記下 5:1,2。

小さなお手伝いさんはナアマン夫人に仕えることになり、夫人のためにいっしょうけんめい働きました。彼女は明るくて、お手伝いが上手でした。しかしまもなくして、ナアマン夫人が何かを心配して、悲しんでいるのがわかりました。その理由を知った小さなお手伝いさんも、悲しくなりました。

ナアマン将軍が、とても悪い病気にかかってしまったのです。それはライ〔ハンセン〕病といって、昔はなおらない病気でした。イスラエルの国では、ライ病にかかった人は、罪を犯したせいで神様からの罰を受けているのだと考えられていました。患者たちは、他の人に近づくことさえできません。しかし、小さなお手伝いさんは、自分を守ってくださる神様に信頼していたので、恐れませんでした。

小さなお手伝いさんは、エリシャのことばかり考えていました。また、神様が人々を助けるために、彼を通してなさった数々の奇跡のことも考えていました。エリシャはナアマン将軍も助けることができるにちがいない、と彼女は思いました。ある日、小さなお手伝いさんは、このことをナアマン夫人に話します。列王記下 5:3。

小さなお手伝いさんは、ナアマン将軍が必ずいやされると信じていました。小さなお手伝いさんの言ったことをナアマン夫人が夫に伝えると、彼は何をしました

か？ 4 節。

王様も、喜んで協力してくれました。部下であるこの将軍はいい人で、優秀な兵士だったからです。もし彼がいやされるのなら、それはすばらしいことです。王様はただちに、何をしましたか？ 5,6 節。

小さなお手伝いさんとナアマン夫人は、どんなにわくわくして喜んだことでしょう！

考えてみよう：小さなお手伝いさんにしてみれば、「わたしのことをさらっていったのだから、ナアマン将軍がライ病になっていい気味だわ」と考えてもおかしくなかったでしょうが、彼女は将軍と夫人に対してどう感じましたか？

火曜日

サマリヤにあるイスラエルの王の宮殿では、ナアマン将軍が到着したとき、かなりの驚きと不安がありました。ナアマン将軍があずかったシリアの王様からの手紙を読んだイスラエルの王様は、恐ろしさと怒りのあまり、衣を裂いたのでした。シリアの王は、いったいどうして、イスラエルの王である自分がライ病をなおせると思ったのか？ライ病なんて、だれもなおせるわけがない！シリアの王はただ、無理難題〔解決できない問題やむちゃな言いがかり〕をふっかけて、戦争を始めようという魂胆〔たくらみ〕なのだろう！ 列王記下 5:7。

ある人がエリシャの家へかけこんできて、その出来事を知らせました。エリシャは、王が力ある神様のことを少しも思い出さなかったことを残念に思いました。8 節。

まもなく、ナアマンとお供の兵士たちがエリシャの家にやってきました。彼らは預言者に会うために、玄関のところで待っています。ところが、家から出てきたのはエリシャのしもべだけでした。ナアマン将軍の驚きぶりを想像してみて下さい！将軍は身分の高いえらい人ですから、人々からあがめられることに慣れていました。それなのにこの預言者は、自ら出てきてあいさつもしないで、しもべに用件を伝えさせるとは、なんと無礼〔失礼〕な！しかも、いやされるためにやるべきことを聞いた将軍は、これ以上の侮辱〔相手を軽んじはずかしめること〕はないと感じました。9-12 節。

たしかにヨルダン川は、ダマスカスにある川とくらべると、決してきれいとはいえない川だったのです。また時には、泥でかなりにごることもありました。

預言者のしもべであるゲハジは、ナアマン将軍が馬と馬車の向きを変えて、去って行くのを見ていました。将軍のあとをついていった部下たちは、がっかりしていました。おそらくエリシャも、そのようすを窓から見ていたことでしょう。でも彼は、心配していませんでした。神様がしなさいと言われたことを、そのとおり行ったからです。

考えてみよう：ナアマン将軍は、この時

もう神様のことを知っていましたか？彼は、謙そん〔へりくだること〕とはどういうことかを、知っていましたか？

水曜日

エリシャの家を去ったとき、ナアマン将軍は、侮辱〔相手を軽んじてはずかしめること〕されたと思ってとても腹を立てていたため、馬車を全速力で走らせていたかもしれません。でも部下たちは、けん命に将軍の馬車に追いついて、彼をなだめようとしました。ナアマン将軍は、彼らの話を聞くことにしました。**列王記下 5:13**。

たしかにそうでした。もしエリシャが何かむずかしいことをしなさいと言ったならば、そうしていたでしょう。ナアマン将軍は、少しおちついて考えました。それからくるりと向きを変え、ヨルダン川のほうへと向かいました。あの川に７回も体をしずめたら何かが変わるなんて、想像もできませんでしたが、とにかく、やってみることにしました。そして、本当にやってみました。

部下たちは川沿いに立って見守り、かたずをのんで数えていたにちがいありません。将軍は、６回も体を水にひたして上がってきましたが、何ひとつ変わっていませんでした。ライ病はまだありました。いよいよ７回目です。川から上がってきた将軍の体を見ると、なんと、ライ病がみあたりません。なおったのです！エリシャは７回と言いましたが、それは正しかったのです。ライ病はすっかり消えていました！**14 節**。

あなたにも、喜びの叫び声が聞こえますか？川からあがり、体をふいて服を着るときの、ナアマン将軍の笑顔が目にうかびますか？勇気をだして将軍に考え直すように説得した部下たちも、本当にうれしかったことでしょう。

ナアマン将軍は、サマリヤに向かっています。向かっているのは、宮殿ではありません。まっすぐエリシャの家へと向かっています。ライ病をなおしてくれたときのお礼にと、シリアの王様がイスラエルの王様のために高価な贈り物をもたせていました。でもナアマン将軍は、その贈り物をエリシャにあげたいと思いました。

考えてみよう：ナアマン将軍は、体をしずめた川の水に、何かふしぎな力があると思いましたか？それとも、神様が彼をいやしてくださったことを知っていましたか？

木曜日

ナアマン将軍は、ふたたびエリシャの家にやってきました。こんどはエリシャが出てきて、将軍と話をしました。**列王記下 5:15**。

はじめて神様への信仰をあらわしたナアマン将軍の、なんと美しい証でしょう！将軍は贈り物をあげようとしましたが、預言者は断りました。ここで、ある大切なことを理解しなくてはいけませんでした。

いやしは、エリシャではなく神様からのものです。ナアマン将軍も彼の部下たちも、そのことを正しく理解する必要がありました。将軍はなおも、預言者に贈り物をうけとるようすすめましたが、エリシャはまたも、ていねいに断りました。16 節。

そこでナアマン将軍は、自分にあるものを与えてくれるように、エリシャにお願いしました。それは何でしたか？彼がそれをほしがったのはなぜですか？ 17 節。

ナアマンは今、自分がどれだけ完全に真の神様を信じているかを示しています。彼はおそらく、イスラエルの土を持ち帰って、自分の国でイスラエルの神様を礼拝するところに置きたいと思ったのでしょう。もしかすると彼は、自分の庭に特別な場所をもうけて、そこで考えたり、祈ったりできるようにしたのかもしれません。

また、もうひとつのことが将軍の頭に浮かびました。シリアの王が、異教の神殿で偶像に祈りをささげに行くとき、ナアマンの腕によりかかることがあり、それは将軍の務めのひとつでした。たとえ王様といっしょにひざまずいていたとしても、心の中では偶像に祈りをささげていないことが、神様にはわかるのでしょうか？エリシャはやさしく、心配しなくてもだいじょうぶと言いました。18,19 節。

軽やかな、喜びにあふれた心で、部下たちは贈り物をしまいました。ナアマン将軍は別れのあいさつをし、一行はダマスカスの家へと帰って行きました。家の中にもどったエリシャの心も、感謝でいっぱいでした。

ところが、そこにひとりだけ、よろこんでいない人がいました。そこで彼は、ある決心をしたのです。その人はだれでしたか？また彼は、何をしましたか？そのことは明日、勉強しましょう。

考えてみよう：それは、すばらしい１日だったと思いませんか？ナアマン将軍が、異教の神殿で祈ることについて悩んでいたのを、あなたは気づきましたか？彼は、自分がひざまずいている間の心の中も、神様がごぞんじであることを確かめたかったのです。わたしたちがひざまずいているときの心の中には、どんな思いがあるでしょうか？わたしたちは偶像を礼拝してはいませんが、祈っている間に別のことを考えているようなことはありませんか？

金曜日

ゲハジは、おもしろくありませんでした。エリシャが高価な贈り物を断ったことが、彼には信じられませんでした。そこで、ゲハジは行動を起こすことに決めました。彼は、できるだけ早くナアマン将軍に追いつこうと思って、道を急ぎました。追いつくと、将軍はすぐに馬車をとめてくれました。列王記下 5:20,21。

ゲハジは、自分が考えた作り話を、息を切らしながら話していたことでしょう。22 節。

将軍の部下たちは、目をまるくしながら、先ほどしまった贈り物を出していたことでしょう。ナアマン将軍も、少しはふしぎに思ったのではないでしょうか。それでも彼

は、求められたよりも多くのものをゲハジに与え、部下たちに荷物を運ぶのを手伝わせました。道の途中でかえされた部下は、ゲハジのことをあやしいと思ったかもしれませんね。23,24節。

ゲハジのしたことは大変なまちがいで、この物語のさいごはとても悲しいものです。ゲハジはすでにうそをついていましたが、ひとつのうそは、ほとんどの場合、さらなるうそを生むことになります。25,26節。

その日、ひとりは神様を愛し、神様に信頼して従うことを選び、もうひとりはサタンにしたがうことを選びました。そして、ナアマンがわずらっていたあの恐ろしい病気は、ゲハジが死ぬまで負うことになったのでした。27節。

家にもどってきたナアマン将軍を見て、ナアマン夫人と小さなお手伝いさんが感激したことは言うまでもありません。彼は、完全にいやされました。神様も小さなお手伝いさんのどちらも、どんなに喜んだことでしょう。すべては、彼女が神様を愛し、神様に信頼して従うことを選び、もっている光を大きく輝かせたおかげだったのですから!

考えてみよう：今週の物語から4人を選んで、それぞれの人物からあなたが学んだことを話してください。小さなお手伝いさん、彼女の両親、ナアマン将軍、イスラエルの王さま、エリシャ、ゲハジのうちから選んでください。

もっと学ぼう！

★列王記下5章
★国と指導者20章

ジョセフ・ベイツを驚かせたこと

『少女エレン』よりエイミー・シェラード編

幼いころ事故にあってからずっと、エレンはなんどもがんばってみたものの、どうしても字を書くことができませんでした。手に力が入らず、ペンを持てないのです。書いてみても、なぐり書きのような字になってしまい、だれにも読めません。ある日、イエス様がエレンに幻を与えてくださったときのことです。イエス様は幻の中で、エレンに語った大事なことを多くの人に伝えるために、聞いたことを書きとめなさいと言われました。エレンがすなおにしたがってペンをとると、手のふるえが止まり、力がみなぎりました。しかも、この時書かれた字は読みやすいものでした。奇跡です。この後から、エレンは数多くの手紙や本、雑誌の記事などを書くようになりました。

Little Folk Visuals

ジョセフ・ベイツという船長さんがいて、彼はエレンの話を聞きたい、また、彼女の書いたものを読みたいと熱望していました。彼は長年の再臨信徒で、これまで世界中のあらゆる場所を航海してきたのですが、今では伝道者になっていました。ベイツ船長は、エレンの話すこと、書いたことのすべてが聖書と一致していることは知っていましたが、彼女の幻が本当にイエス様から来たものであるかどうかを確かめたいと思いました。

ある日、ベイツ船長は、ある再臨信徒の家でもたれる集会に行きました。エレンもその中にいて、彼女が話したあとに、イエス様は幻をお与えになりました。それは、夜になると星のように見える惑星についての幻でした。それらの惑星はとても美しく、幻を見せられている間も、その美しさについて語っていました。

ベイツ船長は、星についてはとても詳しい人でした。航海のときには、星が船を導いてくれたからです。エレンがバラ

のような色のしまもようと、その惑星のまわりにある４つの衛星〔月〕について話したとき、ベイツ船長の胸は高なりました。彼は、彼女が話しているこの星について、よく知っていたのです。「それは木星だ!」と、大声でさけびました。

それからエレンは、別の星について話し始めました。その星には美しい輪があり、７つの衛星がそのまわりにありました。「彼女が今見せられているのは土星だ!」と船長は言いました。次に、６つの衛星をもつ天王星を見せられていました。

幻が終わって、船長はエレンに話しかけました。「あなたはこれまでに、天文学（星についての勉強）を学んだことがあるのですか?」と彼はたずねました。

エレンは一瞬考えて、首を横にふりました。「わたしは、今までに天文学の本を見たことがあるかどうかさえ、覚えていないのです」と答えました。その日から、ベイツ船長は、これらの幻がイエス様からのものであると確信したのでした。

ジョセフ・ベイツは、神様がわたしたちをとても愛して、イエス様の再臨に備えるための助けとして、ひとりの預言者を与えてくださったことに感謝しました。ただエレンは、ベイツ船長が信じている、あることが気になっていました。彼は、多くのクリスチャンが礼拝している日曜日にではなく、週の第７日目である土曜日に礼拝をしていました。これは聖書の教えにもとづいていると、彼は話していました。

エレンは、自分が教えられてきたことの多くが聖書に書かれていないことに、すでに気づいていました。さて、彼女は、どちらが聖なる日なのかを確かめなくてはなりません。聖書が教えている礼拝日は、彼女がこれまで教えられてきた日曜日なのでしょうか?それとも、ベイツ船長が信じているように、土曜日なのでしょうか?

（つづく）

第12章
しもべたちへの神様の心づかい

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「人にはそれはできないが、神にはなんでもできない事はない。」
ーマタイ 19:26

日曜日

もし、おおぜいの人たちが毎週安息日にあなたの教会にやってくるようになって、彼らのすわる場所が足りなかったらどうしますか？もし彼らが牧師のところへ行って、自分たちで力を合わせてもっと大きな教会を建てるつもりだと言ったらどうでしょう？牧師は喜ぶと思いますか？

実はエリシャの時代に、このようなことが起こったのです。ただ、大きくする必要があったのは教会ではなく、預言者の学校でした。ある日、生徒たちのグループが、エリシャにそのような相談をしにきました。列王記下 6:1。

エリシャにとって、生徒の数がふえるというのは、うれしい反面、問題でもあったにちがいありません。神様についてもっと勉強したい、そしてできるだけ勉強した後は伝道者になりたい、という若者がどんどんやってくるのは、たしかにすばらしいこ

とでした。生徒たちはそのために、自分たちで学校を建て直し、できるだけ多くの若者が学べるようにしたいと考えたのでした。エリシャは、彼らの計画についてどう思いましたか？2 節。

生徒たちは、エリシャが大好きでした。彼はたびたび、生徒たちのいる学校をたずねてきては、授業を教えました。彼が自分たちに関心をもってくれていることが、生徒たちにはよくわかりました。生徒のひ

とりがエリシャに、自分たちといっしょに行ってほしいとたのむと、預言者は行ってあげると答えたので、彼らは大喜びしました。3節。

預言者の学校の生徒たちは、数学や歴史や音楽といった一般的な勉強のほかに、聖書を学びました。彼らにとっては、聖書の勉強がいちばん楽しいものでした。

生徒たちはまた、自分自身と家族の生活を支えるための、有用な〔役に立つ〕仕事もおぼえました。ですから、学校の建てかたも知っていたのです。

考えてみよう：仕事のしかたをおぼえるのは、今でも、よいことだと思いますか？女の子たちは、健康的な食事のつくりかたや、家事のしかた、また家族のお世話のしかたを学ぶべきだと思いますか？たとえ看護師さんになったり、先生になったり、他の仕事をおぼえていたとしても、家事はとても大切です。では男の子たちは、修理をしたり、作物を育てたり、いろいろなことができるようになるべきですか？あなたはどんなことを学んでいますか？

月曜日

ある日、預言者の学校の生徒たちは、道具を集め、一丸となってある作業にとりかかりました。新しい学校をつくるための材木が必要なので、まずは木を切らなくてはいけません。床や壁や屋根、また机やいすやいろいろな物をつくるのに、木がたくさん必要です。木を切りに、彼らはどこへ行きましたか？エリシャは、彼らといっしょでしたか？列王記下6:4。

むかしは木を切るのに、斧（おの）を使わなくてはいけませんでした。ある生徒は斧をもっていなかったので、どこかから借りてきました。彼は、いっしょうけんめい木を切っていましたが、とつぜん斧の頭の部分が柄〔道具を手でもつための棒の部分〕からはずれて、とんでいってしまったのです。それは、どこに落ちましたか？5節。

その生徒は、大変なことになったと思ったでしょう。斧の頭がなければ、木を切る仕事はできません。しかもその斧は、わざわざ借りてきたものだったのですから。とうぜん新しい斧を買って、べんしょうしなくてはいけないでしょう。けれども彼は、ほかの多くの生徒たちのように、あまりお金を持っていなかったはずです。では、どうすればよいのでしょうか？

そこにはほかの生徒たちもいて、斧の頭をなくした生徒をかわいそうに思ったことでしょう。川に入り、ぬかるんだ川底で斧の頭をさがしてくれた人がいたかもしれません。

エリシャは、斧の頭をなくした生徒を叱りませんでした。わざとやったのではないことが、わかっていたからです。でも、預言者が木の枝を切って、斧の頭が落ちたところに投げこむのを見ていた生徒たちは、皆ふしぎに思ったことでしょう。「そんなことをして、一体なんになるんだろう?」と。それでもみんなは、何が起こるのかと思って、いっしんに川を見つめていたはずです。6節。

すると、鉄でできた斧の頭が浮き上がってくるではありませんか。みんなは、さぞかし驚いたことでしょう。鉄が水に浮くなんて話は、聞いたことがありません!おそらく、あまりにもびっくりして、しばらくの間、ぼうぜんと見ていたかもしれませんね。エリシャはその生徒に、斧の頭が流れて行ってしまう前にどうするように言いましたか? 7節。

考えてみよう:その生徒は、どんな気持ちだったと思いますか?それからしばらくの間、生徒たちが話していたこと、絶対に忘れなかったことは何でしょうか?斧の頭を取りもどしたその生徒は、それを斧の柄にしっかりとりつけたと思いますか?人からむやみに物を借りるのは、あまりよいことではありませんが、もし借りなくてはいけない場合には、どんなことに、またどのように気をつけるべきですか?

火曜日

シリアの王さまは、イスラエル国内の自分の国に近いあちらこちらの場所に、奇襲攻撃〔不意打ち〕をしかけていました。

ところが、どうにも理解できないことが何度も起こっていました。どんなにないしょで攻撃の計画を立てても、なぜかいつもイスラエルにその計画のことが知られていて、シリア軍が攻撃をしかけるたびに、追い払われてしまうのです。

しまいにシリアの王さまは、自分の兵士の中にだれか裏切り者がいて、自分たちの計画をイスラエルのだれかに知らせているのだ、と決めつけました。列王記下6:11。

シリアの王の兵士たちは、そうでないことを知っていましたので、その中のひとりが、何が起こっているのかを王さまに話しました。12節。

なにが問題なのかがわかれば、解決するのは簡単だと思いました。シリアの王さまがやるべきことは、エリシャをさがし出してつかまえるだけです。13節。

しかし王さまは、それを運にまかせたりはしませんでした。おおぜいの兵隊を送って、エリシャの逃げ道をふさぐことにしました。14節。

考えてみよう：わたしたちの神様が力強い神様だということを、シリアの王さまは、よく知っていたと思いますか？シリアの大軍のために、神様がエリシャを助けるのは、むずかしくなりましたか？

水曜日

シリアの王さまは、エリシャを捕らえるために軍隊を送り、夜のうちにエリシャのいる町をすっかり取り囲んでしまいました。次の朝早く、外へ出てあたりを見まわしたエリシャのしもべは、何を見ましたか？15節。

しもべは、急いでエリシャに知らせました。どうしたらいいのでしょう？もうそこから逃げ出して、安全な場所へ行くこともできません。町は、完全にシリア軍に囲まれてしまっています。逃げ道はないように思われました。しもべは、自分たちが捕虜にされるか、殺されるのではないかと、おびえていました。ただし、エリシャは何も心配していませんでした。預言者はおだやかに、しもべに何と言いましたか？16節。

何ですって？エリシャは目が見えないのでしょうか？そこには、みかたのイスラエル軍がまったくいないのが、見えていないのでしょうか？一体どうして、そんなことが言えるのでしょう？

エリシャは、しもべの言っていることを確認する必要はありませんでした。敵の軍隊がいることは、とうに知っていましたから。でもエリシャは、このおびえているしもべがかわいそうになり、彼を安心させたいと思いました。そこでエリシャは、神様に何をお願いしましたか？17節。

こんどは、あたりを見まわしたしもべが、どう感じたと思いますか？

考えてみよう：今でも、私たちが必要なときには、神様はいつもより多くの天使を送って下さいますか？神様は、サタンがわたしたちにむりやり何か悪いことをさせるのを許さず、むしろ、わたしたち一人ひとりを助けるために、天使をつかわして下さることを知っていましたか？神様は、わたしたちが祈るときに助けて下さいます。もしわたしたちが何か悪いことをするとしたら、それは、わたしたちがそうすることを選んでいるからです。そのことをぜったいに、忘れないようにしましょう。

木曜日

シリアの軍隊は、その場にエリシャを守っている他の軍隊がいることに気づいていませんでした。それは天使たちの軍隊で、彼らもエリシャのいる町のまわりにいました。エリシャが祈ると、神様はしもべの目を開いて、それが見えるよう

にして下さいました。そして預言者は、シリアの兵士たちに逆のことが起こって、彼らの目が見えなくなるように祈ったのでした。列王記下 6:18。

それからエリシャは、目の見えなくなったシリアの兵士たちを、イスラエルの王が住む都、サマリヤへと導きました。そこに着いたら、とつぜん彼らの目が開かれました。大変なショックを受けたことでしょう。予想もしなかった場所にいたからです。しかも、自分たちが捕まえようとしていた人に導かれて、高い城壁に囲まれたサマリヤの都に入ってしまったのです。列王記下 6:20。

シリアの兵士たちは、それはもう恐ろしかったにちがいありません。こうなったら、イスラエルの軍隊によって、自分たちは皆殺しにされるかもしれません。イスラエルの王さまは、本当にそうしようと考えていました。しかし、すべてを支配しているのは、王ではなく神様でした。そこで王さまは、エリシャに何とたずねましたか？ 21

節。

エリシャは、イスラエルの王さまが彼らを殺すのは、正しくないことを知っていました。彼らは捕虜であって、自分たちの王の命令に従っているだけなのです。また、エリシャは彼らに、その日に起こったすばらしい出来事を、国にもどって報告してほしいと思いました。ただしこの報告は、シリアの王様が期待していたようなものとは、まるで違うものとなるでしょう。

このシリアの兵士たちは、イスラエル人が公平であること、また彼らが拝んでいた異教の偶像よりも、神様がはるかに力強いおかたであることを学ぶでしょう。ただ、今のところは、自分たちがどうなるのかを知るよしもなく、待つことしかできません。

考えてみよう：エリシャのしもべは、目を開かれる前と、目を開かれた後に、どう感じたでしょう？また、シリアの兵士たちは、目が見えていたときと、目がくらまされた後に、どう感じたでしょうか？エリシャは、それらの出来事のあいだ中、どう感じていたでしょう？神様を信じる人は、恐れる必要がありますか？

金曜日

イスラエルの王が、罠にかかったこれらのシリア兵を殺すべきかどうかをエリシャにたずねたとき、エリシャは何と答えましたか？列王記下 6:22。

シリアの兵士たちは、驚きのあまり、互いに顔を見合わせたにちがいありません。彼らは、目が見えなくなっていたように、

耳までがおかしくなってしまったのでしょうか?とにかく、自分たちは殺されずにすむらしいのです!しかも、王が彼らに食事をふるまうそうです。彼らは、目の前で起こっていることが、信じられませんでした。

食事の時間になりましたが、彼らに出されたものはパンと水だけでしたか?また食事の後、彼らは囚人として、そこに捕らえられたままでしたか? 23 節。

自分たちの国にもどったシリアの兵士たちは、エリシャを捕らえようと出て行ったときと同じだったと思いますか?とんでもないですね!彼らは、生涯忘れることのできない、いろいろなことを経験して学んでいました。それから長い間、シリアの王様は、イスラエルに戦いをしかけるようなことはしませんでした。

考えてみよう: *時々ですが、わたしたちは、親切を受けるのにふさわしくないような人にも親切をするように、機会を与えられることがあります。そのような人たちに、親切にしていますか?それとも私たちは、自分によくしてくれない人は親切を受けるにふさわしくないと言って、神様を悲しませてはいませんか?はたして私たちは、自分に与えられる神様のすべての祝福を受けるのに、ふさわしい者でしょうか?わたしたちは、イエス様をこの世に来させて、死んでもらうのにふさわしい者でしょうか?わたしたちは、それに価しないと思える他の人にも、優しく接する選びをするべきですか?そうすることは、イエス様にならって生きていることになりますか?そして、わたしたちが他の人々にどう接するかによって、彼らがもっとイエス様について知りたいと思うようになるでしょうか?*

もっと学ぼう!

★列王記下 6:1-23

★国と指導者 21 章 p. 221-224

説教者となった船長

エイミー・シェラード

ジョセフ・ベイツは少年のころから、海を愛し、船乗りになることを夢見ていました。そのためたったの15歳で、彼は両親のゆるしを得て家を離れ、船乗りの見習いになったのでした。彼の仕事は、船乗りと乗客のベッドをととのえ、船室をそうじし、船乗りのいろいろなお手伝いをすることでした。

20年ものあいだ、ジョセフは船で遠いところまで行き、わくわくすることや危ない目にあうこともありました。ひどい嵐にみまわれ、いちどは難破したこともありました。戦時中のある時には、捕虜として捕らえられ、敵の船につながれました。ほかの捕虜たちと船の横に穴をあけ、岸まで泳いで逃げたこともありました。

そしてついに、ジョセフはもうひとりの船乗りといっしょに、自分たちの大きな船を持つことができました。船長になったジョセフは、いつしかお金持ちになりました。彼は賢い人でした。健康でいたかったので、ジョセフはお酒を飲みませんでした。たばこが悪い習慣だとわかった時には、たばこをやめました。また、できるかぎり健康的な食物を食べるように、最善をつくしました。

ジョセフは船乗りとして何年かを過ごしたのち、プルーデンスというすてきな女性と結婚しました。彼が長い船旅に出るときには、プルーデンスはいつもさびしい思いをして、夫のことを心配せずにはいられませんでした。さらに10年以上も船乗りとして過ごした後、ジョセフが船乗りをやめて、妻といっしょにすてきな居心地の良い家で過ごす決心したときは、彼女がどれほど喜んだか想像できるでしょう。

再臨のメッセージを学んでからは、自分で預言の研究もしました。そして、聖書の預言が真実であるとわかったジョセフは、他の人たちが理解できるための手助けをするようになりました。できるだけ多くの人が、イエス様の再臨の準備をするよう

になってほしいと望んだからです。

ジョセフはまた、神様の定めた安息日が週の初めの日曜日ではなく、第７日目の土曜日であることを信じている人々についても知っていました。自分で注意深く聖書を調べてみると、神様が休みの日を日曜日に変えてはいないことがわかりました。そしてすぐに、彼は第７日目を聖なる日として守り始めました。十戒の第４条が教えているとおりです。そして、ほかの人たちにもそのことを伝えました。

より多くの人たちが真の安息日について学べるように、イエス様はベイツ船長をみちびいて、小さな本を書かせました。しかし、本を印刷するにも、場所から場所へと旅をしながら説教をするにも、たくさんのお金がかかります。いつのまにかベイツ船長は、かなりのお金を使ってしまい、もうお金持ちではなくなっていました。とうとう、お金は底をつきそうになりましたが、彼は心配しませんでした。イエス様にしたがっていれば、必要なものは何でも備えられることを知っていたからです。

ある日、ジョセフが書きものをしている部屋に、台所でパンを焼いていたプルーデンスが入ってきました。「小麦粉が足りなくなってしまったの」と彼女は夫に言いました。「お店に行って、買ってきてもらえないかしら?」

「どれだけ必要なんだい?」立ち上がって、帽子に手をのばしながら、ベイツ船長はたずねます。

「まあ、４ポンドぐらいよ。」台所にもどりながら、彼女は答えました。

ベイツ船長は、道を下りながら、ポケットに手を入れました。小麦粉代に足りるだけのお金をもっているだろうか?そのことが気になってきました。

（つづく）

第13章

4人のライ病人

子供のための日々の聖書研究ガイド

暗唱聖句

「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、
上から、光の父から下ってくる。」
ーヤコブ 1:17

日曜日

イスラエルとシリアの2国は隣同士でしたが、仲良くなることはありませんでした。わたしたちが先週学んだ出来事のあと、つまり、エリシャがシリアの兵士たちを親切にあつかったあとからは、シリア人たちは、イスラエル人を悩ませることを、しばらくの間やめていました。ところが今、ふたたび戦いが始まってしまいました。

こんどは、シリア王が、イスラエルの首都であるサマリヤを占領するために、軍隊を送ることにしたのです。だれも出入りができないように、都のまわりに兵隊をおきました。都の中にいる人々の食糧がつきれば、降参してくるにちがいない、とシリア人たちは考えたのです。列王記下6:24。

見たところ、その計画はうまくいっているようでした。都の食糧は、どんどん減っていったため、人々は死に物狂いです。そして、食べられそうなものがあれば何でも買おうとして、ますますたくさんのお金を払うようになっていきました。25節。

とうとう飢きん〔食べ物が足りなくなること〕は最悪になり、あんまりおなかがすいて、人間の死体を食べる人たちまでいました。このひどいようすを、あなた

は想像できますか？人間が、人間を食べているのです！ある日、王さまが都の城壁の上を歩いていると、飢えに苦しんでいるひとりの女が、ある出来事について彼に話しました。それを聞いた王様は、恐ろしくなりました。彼は何をしましたか？ 30節。

荒布をまとうことは、その人が深い悲しみを表していることを意味します。

考えてみよう：あなたがその王様だったならば、何かできることがあったでしょうか？イスラエルが、神様の十戒にしたがうことを拒むと、こういったぞっとするようなことが起きるであろうと、神様は警告なさいましたか？申命記 28:15,53 の神様の警告について読んでみましょう。

月曜日

イスラエルの王さまは、いまにも頭がおかしくなりそうでした。何年か前に、雨が降らなかったことで、アハブ王がエリヤを責めたことがありましたが、この王さまは何をしましたか？ 列王記下 6:31。

この王さまは、悪いアハブ王と何も変わりませんでした。彼は、サマリヤの人々にふりかかっている飢きんや恐ろしい災いを、すべてエリシャのせいにしたのです。

サタンのうそに耳をかたむけることにした人はみな、心の目が見えなくなっています。サタンがどれほど冷酷〔思いやりがなくむごい〕か、彼らには分からないのです。問題の原因は、エリシャではなく、神様の十戒にしたがわないことを選んだためであったのに、そのことをさとっていませんでした。

サマリヤでは、イスラエルの指導者たちが何人かエリシャの家に集まって、話し合いをしていました。話していたとき、神様が預言者にお語りになりました。そしてエリシャは、神様からのお言葉を彼らに告げたのでした。エリシャは彼らに、王さまからの使者がまもなくここに来て、そのすぐ後に、王さまもやってくる、と言いました。32節。

その預言どおり、彼らが話していると、まず使者がやってきて、それから王さまが到着しました。エリシャは、明日にも飢きんは終わり、すべての人にたくさんの食糧が行きわたるであろうと告げました。ところが、王さまの高官〔高い地位の人〕のひとりが、そんなことは信じないと言いました。たとえ神様が天から食べ物をふらせて下さったとしても、エリシャの言うようなことは起こりえない！と言うのです。エリシャは、この高官と言い争ったりはしませんでした。列王記下 7:1,2。

エリシャの預言は、どういう意味なのでしょう？その高官は、神様の約束がはたさ

れるのを見るけれども、食べ物が彼の口に入ることはない、とエリシャは言いました。なぜでしょうか？答えは、すぐにわかります。

考えてみよう：イスラエルの王さまがエリシャを責めたように、私たちも、つい「責める」ことしてしまいます。そうですよね。でも、まちがったことをしてしまった時に、わたしたちは何をするべきですか？

火曜日

サマリヤの都の中では、人々がまだ飢えに苦しんでいます。しかし神様は、食べ物を下さると約束しておられました。神様はどうやって、その約束をはたそうとしておられましたか？

サマリヤの門の外では、４人の男たちが、すわりこんで話をしていました。彼らもひもじい思いをしています。この４人は、どんな人たちでしたか？**列王記下 7:3**。

都の中で食べ物をお願いして歩くのは、まるでむだなことでした。だれひとりとして、食べ物を持っていないのですから。そこで、彼らは相談して、ある計画を実行することにしました。たとえそれがうまくいかなかったとしても、失うものはなにもありません。どちらにしても、飢え死にすることに変わりはないのですから。**4 節**。

ライ〔ハンセン〕病人であった彼らは、あたりが暗くなるまで待ちました。おそらく、都の中にいる人たちに見られたくなかったのでしょう。シリア軍の陣営〔戦地で軍隊がキャンプしているところ〕に着いた彼らが見た光景は、どのようなものでしたか？**5 節**。

いったい、何が起きたのでしょう？敵はどこへ行ってしまったのでしょうか？敵は、すべてのものをそこに残して、消えてしまっていたのです。**6,7 節**。

神様はまたしても、ご自分の民のために、驚くべき奇跡を起こしてくださいました。彼らが、その奇跡にふさわしくないにもかかわらず。

おなかをすかせたライ病人たちは、いま自分たちの身に起こっていることがあまりにもすばらしくて、信じられないほどでした。食べ物にありつけるのです！しかも、それだけではありませんでした。**8 節**。

考えてみよう：シリア人たちが逃げ出したように、別の時にも、イスラエルの敵が逃げ出したできごとを思い出せますか？ギデオンと 300 人の仲間たちの物語はどうでしょう。ヨナタンと、武器を運んだ青年の物語もそうですね。木の上から行進する足音が聞こえた、あのできごとも覚えていますか？

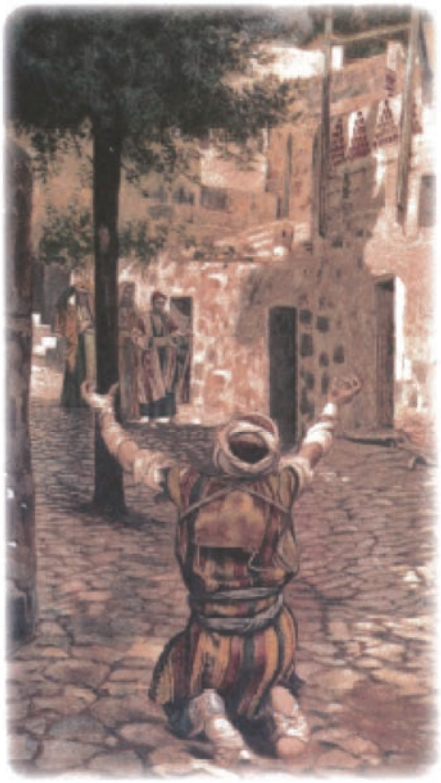
水曜日

4 人のライ病人たちは、シリア軍の陣営がからっぽになっているのを発見しました。いったい何が起こったのでしょう？シリアの兵隊は、どこへ行ったのでしょう？

ライ病人たちは、敵がどこへ行ったのかはわかりませんでしたが、最初に入ったテントの中で、とんでもないものを見つけ

ました。列王記下 7:8。

まず食べ物！その量は、とても食べきれないほどでした！それに、金や銀や着物までも！想像もしていなかった夢のようなできごとだったので、始めのうちは、自分たちのことしか考えられませんでした。しかしすぐに、自分たちがとても利己的〔自分のことしか考えないこと〕であることに気づきました。そして話し合った上、すぐに行動することに決めました。彼らは、朝がくるまで待ちませんでした。9,10 節。



4 人が門番にそのことを話すと、門番たちも朝まで待ちませんでした。王さまはすでに眠っていましたが、すぐに飛び起きました。さいしょ王さまは、このことを聞いて、敵が何か罠をしかけているのにちがいないと思いました。12 節。

けれども、家来のひとりは、王さまが正しいかどうかは分からないと思いました。もしシリア人が本当にいなくなっているとしたら、そこにはたくさんの食糧があるはずです！この家来は王様に、何をお願いしましたか？王様は、それをゆるしましたか？13,14 節。

すぐに数人の男たちが、残っていた馬にくくりつけられた 2 台の馬車に乗って、現場へと向かいました。都の中では、おおぜいの人たちがすでに起きて、知らせを待っていたことでしょう。はたして、よい知らせがとどくのでしょうか？それとも、王様が言ったとおり、これは敵の罠なのでしょうか？15 節。

これで、シリアの兵士たちがいなくなったことが、はっきりとわかりました。馬車は、何マイルも先まで、敵の逃げたあとをヨルダン川まで追いました。敵は、本当にいなくなっていたのです！

考えてみよう：約束なさったことを守るのは、神様にとってむずかしいことですか？あなたはどう思いますか？いちどでも、神様が約束を守れなかったことがありましたか？今回の出来事で、信仰を持っていたのはだれでしたか？

木曜日

食べ物です！夢ではありません！サマリヤの人々は、大あわてでその場所に向かったことでしょう。

王さまは、都の門の番をする責任者として、高官〔高い地位の人〕のひとりをそこに立たせていました。この高官は、エリシャが「明日にはたくさんの食べ物がある」と言ったとき、預言者をばかにした人でした。

もちろん、食べ物があるというシリア軍

の陣営をめがけて先をあらそう、おなかをすかせた群衆を止める手だてなど、あるわけがありません。都の門の責任者であったこの高官に、何が起きましたか？**列王記下 7:17-20**。

ついに、飢きんは終わりました。神様はまたもや、あわれみと助けを受けるにふさわしくない、ご自分の民をあわれみ、助けてくださったのです。そしてまたもや、ご自分の民と敵に、神様にとってむずかしすぎることは何もないことを証明なさったのです。

このときの王さまが死んだ後、ほかの王たちが何人かたてられて、北王国イスラエルをおさめました。神様は彼らに預言者を何人もつかわして、十戒にしたがわずに、サタンにしたがうことを選ぶならば、彼らを祝福することができないことを思い出させ、警告なさいました。けれども彼らは、したがわないことを選んだために起こった悲しい出来事から、教訓を学びませんでした。そして、サタンに仕えつづけました。少しずつ、彼らは神様から遠く離れていき、ついには、神様がこれ以上助けてあげられないほど、遠く離れてしまったのでした。

考えてみよう：エリシャは年老いていました。彼は生涯、神様を愛し、神様に信頼しました。エリシャをとおして数多くの奇跡がおこなわれましたが、彼は決して高慢〔ほこり高ぶること〕になりませんでした。彼もエリヤのように、あのみごとな燃える馬車に乗って天国へ行くのでしょうか？いいえ。実は年をとってから死ぬまで、エリシャは長いあいだ病気をわずらっていました。彼は、不満をもらしましたか？いいえ。エリシャは、神様に信頼する、すばらしい模範を示した人でしたね。

金曜日

さて今日は、エリシャが北王国イスラエルで預言者をしていたころの学びを終えるにあたって、ある幸せな物語を思い出してみたいと思います。それはおそらく、ナアマン将軍がライ〔ハンセン〕病をいやされた時よりも、前のことです。

そのころ、２度目の飢きんがせまっていたので、神様はエリシャに、あの親切

な女の人のところへ行ってそれを知らせるように言われました。親切な女の人というのは、神様が生き返らせた男の子の母親のことです。むかしのナオミのように、この女の人も、飢きんのあいだ、別の国に住む場所を見つけました。列王記下 8:1,2。

ある日のこと、イスラエルの王さまが、エリシャのしもべゲハジを宮殿に呼びよせ、エリシャをとおして神様がなさったすばらしい奇跡について、いくつか聞かせてほしいと言いました。4 節。

イスラエルにいる多くの人々は神様のことを知っていましたし、おそらく、彼らは神様を信じていると言っていたでしょう。ある人々はエリシャが神の預言者であることを知っていて、自分たちの生き方を変えてはいませんでしたが、彼を敬っていました。

王さまにエリシャのことを話したその日、ゲハジはおそらく、聖書に書かれている数々の奇跡だけでなく、さらに多くの奇跡についても話したことでしょう。彼はまた、エリシャが預言者の学校に通う生徒たちを助けていたことも、話したと思います。

ゲハジがちょうど、神様が生き返らせた男の子の母親について王さまに話していたときに、何が起こりましたか？ 5 節。

これほど思いがけない、うれしいことってあるでしょうか！彼女は何のために、王さまに会いに来たのですか？ 3 節。

王さまが彼女のかかえる問題について、ひととおりたずね終えると、彼はすぐ、彼女のために何をしてあげましたか？ 6 節。

***考えてみよう：**すばらしいハッピーエンドではありませんか？今週わたしたちが学んだ、別のハッピーエンドの物語は何でしたか？人生の終わりにあって、エリシャは決して元気で健康な体ではありませんでしたが、それでも彼は、神様の働き人となる選びをしたことに、満足していたと思いますか？*

もっと学ぼう！

★列王記下 6:24，32-7:20

★国と指導者 21 章 p. 224-226

思いがけない郵便物

エイミー・シェラード

ベイツ夫人は、パンを焼くのには、あと4ポンドの小麦粉が必要だと言っていました。小麦粉を買いに行く途中、ベイツ船長はポケットに手を入れました。「必要な小麦粉の分、足りるといいのだが。」彼はひとりごとを言いました。「お金は、これだけしかないし。」

Little Folk Visuals

お店に着いたベイツ船長は、４ポンドの小麦粉を店の主人にたのみました。小麦粉をてわたされ、その値段をたずねました。すると小麦粉の値段は、ぴったりベイツ船長のポケットに入っている金額だったのです。

「イエス様、ありがとうございます!」帰る道すがら、ベイツ船長は感謝の祈りをささげました。家に帰って、台所のテーブルに静かに小麦粉をおろし、ふたたび書き物の続きをしに、部屋へともどりました。小麦粉を見たベイツ夫人は、おどろいて、困った顔になりました。すぐに、書き物をしている夫の部屋へ行きました。

「ねぇジョセフ、どうして小麦粉をたった４ポンドしか買ってこなかったの?」彼女はたずねました。

「必要な量は、それだけではなかったのかい?」船長もたずねます。

「ええ。でもあなた、いつもは必ずひと樽ぶん、まとめて買ってきたでしょう?」妻は、夫にそのことを思い出させました。

そこで船長は、４ポンドしか買わなかった理由を話しました。「あれが、わたしたちの最後のお金で、それを使い切ってしまったんだよ」と、彼は説明しました。

ベイツ夫人は、ショックを受けました。「世界中をまたにかけた、ベイツ船長と呼ばれたあなたが、４ポンドの小麦粉を買うお金しかもっていなかったですって?」それから彼女は、手で顔をおおい、泣き出してしまいました。「一体どうすればいいの?私たち、これからどうやって生きていけばいいの?」

船長は、やさしく夫人をなだめました。「イエス様が、わたしたちを養ってくださるから、心配はいらないよ」と言いました。しかしそう言われても、彼女はすぐに信じて

Little Folk Visuals

安心することができませんでした。

しばらくたって、ベイツ船長は郵便局へ行きました。郵便局長さんに、「わたしあてに届いている手紙はありませんか?」とたずねました。

局長さんは、にっこりと笑いながら、一通の手紙を船長にわたしました。「ええ、ただし、料金をお支払いいただかないとね、船長さん。」局長さんは、彼にそう答えました。

ベイツ船長は、郵便料金を払うお金を1セントももっていませんでした。

そこで、「あのう、その手紙をあけていただけませんか?」とていねいにお願いしました。「その手紙の中に、お金が入っていると思うんです。」

郵便局員が手紙を開けると、船長の言ったとおり、中には手紙と10ドルが入っているではありませんか。船長は料金を支払い、それからにこにこしながら、急いでさっきのお店へともどりました。

「今なら、プルーデンスをびっくりさせられるぞ!」彼は、ひとりごとを言いました。「すごく喜ぶだろうな。」

お店で、船長はひと樽の小麦粉と一袋のジャガイモ、砂糖と、ほかに必要なものをいくつか買いました。「これを全部、うちの玄関の前にとどけてください。」彼は、お店の人にそうお願いしました。

家に帰ると、ベイツ夫人が興奮しています。「ちょっと、玄関を見て!だれかがまちがって、あれだけの食べ物をおいていったみたいなの。うちにお金はないから、まちがって届けられたものに違いないわ。」

船長は、「ぜんぶ私たちのものだよ」とほほ笑みながら言いました。「イエス様が、わたしたちを養って下さるんだから」といって、あの手紙を夫人に見せました。

ベイツ夫人は、またも涙がとまりませんでした。ただしこんどは、喜びの涙です。彼女は今、夫の言ったことが真実であるとさとりました。イエス様が、彼らを養って下さっていたのですね。